
戦艦娘ラブソディ

7r6

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦艦娘ラブソディ

【Nコード】

N9681X

【作者名】

7r6

【あらすじ】

ある学校には異例の生徒がいた。彼らは宇宙戦艦が人間化したものだった。

彼女たちは二派に別れ一人の男子生徒、元の統合艦隊旗艦を我がものにしようと争っていた。

教室で校庭でそしてかえった後の宿舎で、ビームを撃ち合い周囲を破壊しながら彼女たちの活躍は続いていくのだった。

学校の中の戦艦

プロローグ

巨大な時空震が外宇宙で初めての完全無人演習中の地球連合人格付与艦隊を襲った。襲われたのは第一艦隊アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊。そして第二艦隊アジア連合艦隊。

幸いオーストラリアを中心とした第三艦隊南半球連合艦隊とイスラム及びアフリカ諸国を中心とした第四艦隊赤道諸国連合艦隊は残されていて急遽救助に向かった。

しかし彼らがそこで見たものは艦隊の姿ではなく、二、三十人の若者の姿だった。全裸で真空の宇宙空間を漂う彼らはなんと全員が生きていた。しかし彼らは人間ではなかった。

第一章 学校の中の戦艦

「大和君待ってー」

嬌声が朝の校庭に響き渡った。

国連軍付属高等宇宙軍事専門学校日本分校。校庭では三十人ほどのセーラー

服姿の女子生徒が一人の学生服姿の男子生徒を追いかけていた。

今時となっては時代遅れとしか言いようがないが、艦隊勤務はセーラーستاイルと上の方で決めてしまったらしい。

「大和君は私達の味方よね？」

「冗談じゃないわ。大和君はあたし達の味方よ！」

女の子は二組に分かれていた。白人種と黄色人種。激しく男の子の所有権を

巡って対立していた。

人数的にはほぼ互角か。

「又やっているな。しかしあれが人間じゃないなんて」

呆れたように見学しながら男子生徒が呟く。

「でもあの娘達。最初よりだいぶ活発になってきていない？」

人とは違う存在とは思えない大騒ぎに脇の女子生徒も横に首を振った。

「違うぞ。俺は俺自身のものだ」

追われながらも男の子が主張するが、女の子達は誰一人聞いてはいなかった。

「やめないか。おまえ達は朝っぱから、何を勝手なことを言っている」

騒ぎを聞いたらしくジャージ姿の男の先生が姿を現した。

「うるさい。邪魔しないで。これはあたし達の問題なんだから」

先頭のいかにも活発な雰囲気の子が軽く手を払う。

「うわっ！」

体育の教師だったのか。体格のよい男性教師は女子生徒の軽い一撃であっさ

りと吹き飛んだ。

「先生、無茶ですって。女の子の姿をしていたって、相手は戦艦です」

追われていた男子生徒。大和が力なく呟く。

そう彼らは大和自身も含めて戦闘宇宙艦の群れ。地球連合軍連合宇宙艦隊だった。

演習中の艦隊をおそった時空震。なぜか付与された人格の姿。本来は艦のインターフェイスを具現化した姿を残し、肝心の戦闘艦の姿は消えていた。

ついに決心したのか女の子達は足を止め正面からにらみ合う。「もう許せない。このあたし飛鳥の名にかけて大和はあたし達のものだと思い

知らせてあげる」

黄色人種のリーダー、実はアジア連合艦隊旗艦、艦隊における序列一位である戦艦娘、飛鳥は憤然と叫ぶ。

日本人そのものの黒い瞳にロングの黒髪。結構背が高く、比較的控えめな胸

をのぞいては各所が存分に発達した端正な面立ちの女の子。

飛鳥はすらりと伸びた両足を地面で地面をしっかりと踏みしめ、なんと体に

縦線を走らせ、そのまま左右に分かれていく。

「主砲発射シークエンスに移行。エネルギー充填開始します」

飛鳥の体内から無機質なアナウンスが流れ出す。

「今日こそ決着をつけてあげる」

体が左右に分断されたのにもかかわらず飛鳥は元気いっぱいだ。宣言とともに

に縦方向の巨大な二つの角、クワガタムシのそれを思わせる角がせり出し、方向をきっちり、これまた気の強そうな白人種の先頭に立つ娘にあわせる。

娘達は単なるインターフェイスの具現化ではなく、元々の戦闘艦の機能をその体内に宿していたのだ。

「キャサリン、泣いて謝るなら今のうちよ」

飛鳥は冷たく吐き捨てた。

「こりもしないで艦隊決戦か？」

見学していた男生徒が青ざめる。

「避難しないと。巻き込まれたら命がないわ」

「逃げた方がいいな」

同じく顔色を変えた女子生徒の言葉に男子生徒も頷く。二人は一目散に校舎

の中に駆け込んでいった。

「芸のない。いつもの通り防いであげます」

アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊旗艦。当然こちらも艦隊序列一位の白人種の娘、戦艦キャサリンも冷然と言い放つ。

飛鳥が活力に満ちた娘なら、キャサリンは気品に満ちた娘だった。飛鳥もだがキャサリンも完璧な日本語だ。対人インターフェイスである彼女

達は地球上の全ての言語を話すことができた。

長身で飛鳥以上に豊満かつ蠱惑的な肢体をそらすと豊かな金髪をふわっと広

げる。冷たい輝きを放つアイスブルーの瞳が飛鳥を見据えた。

「シールド展開。迎撃態勢に入ります」

飛鳥同様キャサリンの体内からも無機質なアナウンスが流された。「あなたが私に勝つなど不可能です」

既定事項を述べるようにキャサリンの口調に揺らぎは全くみられない。

「ご託はいいのよ。主砲発射」

飛鳥の角の間に高压のビームが収束。そのままキャサリンめがけて放たれる。

「全く芸のない」

瞬間、金髪がキャサリンの全身を覆う。ビームはその金髪を直撃。

さらに次の瞬間。弾かれたビームは軌道をそらされ虚空に消えた。
「次は私の番ですか」

つぶやくキャサリンの肢体に飛鳥同様の縦線が走った。

『緊急事態。各部シールドを展開。不測の事態に備えよ』

艦隊少女の暴走。並の暴走とは訳が違う。姿が違っても戦闘艦は戦闘艦だ。

状況によっては学校はおろか町が壊滅してしまう。

その時になってようやく校庭に緊急アナウンスが流され校舎、そして学校全

体を覆う形で青白い防御シールドが張られ始めた。

正直に言ってかなり手遅れ気味の対応ではある。

「いい加減にしてくれ。どれだけ周囲に迷惑をかけたら気が済むんだ」

さすがに逃げてもいられなくなり、大和は両者の間に割ってはい

る。
遅い体。鍛え抜かれた筋肉。飛鳥同様に日本人の色が濃い青年だ。しかし

今は疲労の影が濃い。

二つの艦隊が行動をとるときに最高司令部から派遣される総合旗艦。

複数の艦隊を束ねるだけあって、普段はやんちゃ坊主と言っている活気のあ

る彼だが、さすがにこんな事態が続けば疲れもたまろうというものだ。

いつもは愛嬌に満ちた面持ちに今は苦味が満ちていた。

「だから大和があたしを選べは何の問題もないのよ。いつも言っているじゃない」

体の縦線を消した飛鳥は大和にしなだれかかると平然と言っている。

「私を選ぶべきです。なぜなら飛鳥さんより私の方が優れているのですから」

当然だがキャサリンも負けてはいない。慌てて縦線を消し、大和の腕をとると高く突きだした胸に誘う。

「やめてくれよ。仲良くしてくれ。俺は君達双方の旗艦なんだから」
一瞬だが二人の美少女の豊かな肢体に頬の肉をゆるませた大和だがそうもい

かない。必死の説得に入った。

「そうはいかないよ。大和とあたしは起源が一緒。そっちとは親密度が違うんだから」

飛鳥は頬をふくらませるといっそう力を込めて大和に抱きつく。

「起源がなんです。より優れたパートナーと一緒にするのが理の当然です。さ

あ私を選びなさい」

キャサリンの腕にも力が入る。突きだした山脈がグニャと変形した。

「このオッパイお化け。下品なもので大和を誘惑しないで」

「貧弱な小娘。お粗末なもので何を甘えているのですか」

飛鳥とキャサリンの視線が絡み合う。

「そうだよ。飛鳥の言うとおりだよ。大和さんはあたし達のものなんだから」

「ここは日本だな。白人優位は通らないよ」

飛鳥の言葉に序列五位、小柄で悪戯そうな目つきの戦艦扶桑や序列二位の副

旗艦、目の細い少し年上の戦艦娘定延等のアジア連合艦隊少女達が同調。

さらに残りの序列六位巡洋艦娘の夏や同じく序列九位巡洋艦那智、
序列十四

位最下位の強行偵察艦娘の針葉など十数人の戦闘艦娘も一斉に首をふって見せた。

「何がここは日本か。そちらにも日本艦以外がいるではないか」
「所属国は違っても、同じ学校に所属しているのに間違いはないでしょ」

アメリカ・ヨーロッパ連語艦隊所属の序列二位副旗艦の生真面目そうな戦艦娘ゴールドバや序列三位すつきりとした顔立ちの戦艦スージーが反論を声高に叫び返す。

同じく白人艦隊所属の序列四位戦艦娘テルビッジや序列五位戦艦メアリーも力でバックアップしようと、体に縦線を走らせた。

ほかの娘達の乱入にさらに混乱は増し、收拾はつきそうにない。
「何をだらだらとやっている。統合旗艦のおまえが判断しないで、誰が結論を出すというのだ。さっさと態度を決めろ」

いつの間に復活したのか男性教師が険しい顔で大和に迫ってきた。
このまま

軋轢が続けば大惨事も必然。
教師だって必死だ。

「先生、大和は繊細なの。高度なシステムで大和は組み上がっているんです」

「そうですね。彼を追いつめることはこの私が許しません」
とたんに絶妙なコンビネーションで双方の旗艦娘飛鳥とキャサリンが男性教師にくっつく。

「いいからどっかに」「消えなさい」

二人の細腕が一閃し、男性教師は虚空に消えた。

彼女達にとって大和にものを言っていないのは自分達だけだった。
「そう思うんだったら追いつめないで、もっと俺の言うことを聞いてくれよ」

再び少女達の説得に入る大和。

「さて邪魔者はいなくなっただし、決着をつけようじゃない」

「邪魔者は飛鳥さん自体じゃないのですか」

いつの間にか二人の体には再び縦線が入っていた。

「お願いだよ。俺はおまえ達の旗艦じゃないのか」

疲労の色が濃い。対決姿勢を崩さない二人の娘に、このままでは俺も長くは

ないと、心の底から思う大和だった。

「……頼むから俺の言葉を聞いてくれ」

再度呟く大和。

端から見て単なるヘタレとしか思えない大和だが、容姿端麗なだけ有って艦

隊所属の女の子には哀愁漂うと好意的に解釈されていた。

そしてそう解釈していたのは戦艦娘達だけではない。

「大和君かわいそう。あんな乱暴なだけの女の子に囲まれて」

青白いシールド越し。校庭を望む窓際にたつ女生徒。肩までのショートボブ

を揺らす内気そうな娘。立木ゆかりは何とも切なそうに唇をかむ。
その瞳には思い入れが満載されていた。

「起立」

一時限目の授業。戦艦娘達の姿は彼女らだけが所属する特別クラスにあっ

た。軍事機密の意味合いもあったが、それよりも生徒達の安全確保の側面が強い処置だ。

実際の発砲はともかく、校庭での大騒動は今朝が最初ではない。

大和の号令に一齐に戦艦娘達が立ち上がる。統合旗艦である大和は当然だがクラス委員長を務めている。

机の並び方は変則的で四列の机の左右に黄色艦、そして白色艦に分かれて座っていた。

そこまでは普通なのだが、大和はどちらに座っても角が立つので最前列、それも左右どちらにも所属せず特別に真ん中に座っている。

「礼」

再びの号令に少女達の頭が下がる。しかし頭の向きは教師ではなく、微妙に角度がつけられ大和に向けられている。

「……まったく」

担任の男性教師の顔がゆがむ。やはり自分に向けるのが当然と教師は思っていたが、女子達の感覚は違う。

旗艦である大和は艦隊総司令の代理。将官クラスだと女子は感じていた。単なる教師とは格が違うというのが女子の総意だ。

「着席」

三度目の号令で女子達も腰を下ろす。

「これから作戦立案の原則を諸君に教えていこうと思う」
男性教師が重々しく口を開く。

「大和、今日の予定だけど帰りにどっかよっていかない」

「大和様の予定に飛鳥さんの存在はないと思いますが」

教師の宣言を無視しいきなり口を開く旗艦娘飛鳥だが、しかしすぐさま同じ

旗艦娘キャサリンに話の腰を折られた。

「ちゃんと聞かんか。これは学生であるおまえ達の義務だ」

血走った視線を小生意気な女子達に向けると教師は不機嫌さ丸出しでうなる。

「ちゃんと聞いているから先生」

「私も義務から逃げたりはしませんわ」

飛鳥そしてキャサリンはシレッと答える。

「その言葉忘れたとはいわせんからな。では授業を始める」

言うと教師は黒板に板書きしつつ教科書を読み上げ始めた。

「何で大和の予定にあたしが入っていないのよ」

「なぜなら大和様の予定は私達でいっぱいですから」

飛鳥に憤激の視線を向けられてもキャサリンの態度に全く乱れはみられない。

い。飛鳥達など歯牙にもかけない風情だ。

「……なっ」

「何を勝手に決めてるの」

「決めるのは大和君じゃない」

怒りに声も出ない旗艦が変わって、扶桑やらの仲間の戦闘艦達が

口々にキャ

サリンを糾弾し始めた。

「いい加減せんか。さっき授業を受けると言ったのはどうした」

姦しくさえずる女子に教師の怒りが爆発した。

「……それは」

「……こうであり」

教師の怒号に答え飛鳥とキャサリンは授業の内容を完璧に反復する。複合多

元センサーを備える戦艦娘達。

聖徳太子も真っ青のマルチ処理能力を持つ彼女達にとって授業内容など片手

間にでも何とかなってしまふ。

「……そ、その通りだ」

いつもと同じく沈黙してしまう教師だ。

「先生はそういうことを言いたいのでは」

女子達の態度に統合旗艦大和は教師に同情の視線を寄せる。何を言っても平

気で返される苦痛を大和はよく知っていた。

「大和様のご意向は私が存じ上げております。言葉に出さずとも大和様は私た

ちと一緒にいたいというのは分かっています」

意気消沈した男性教師には目もくれず、アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊旗艦

序列一位の戦艦娘キャサリンはそう決めつけた。

「美形の大和様にはそれなりに見栄えの良い我々がふさわしい」

「人には分がある。釣り合いは大切だろうな」

今度は白人艦隊のゴールドバやスージーが旗艦に同調。扶桑達、アジア連合艦

隊娘に険しい視線を向ける。

「こうなったら実力行使よ」

「実力のない者が何を」

男の奪い合いに遠慮はいらない。大和の呟きには一切耳を貸さず、言い争い

はエスカレートし全員が椅子から立ち上がった。

机を蹴倒しながら旗艦である飛鳥とキャサリン以下、女子達の体に次々に縦

線が入っていく。クワガタの角が突き出た。

同時に髪の毛が仄かに光を放ち、シールド展開の準備を始める。

文字通りの戦艦娘であるアジア艦隊の飛鳥、定延、ランヴィ、愛宕、扶桑そ

して対面のアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊の戦艦娘キャサリン、ゴールドバ、ス

ージー、テルビッジ、メアリー。

主戦力である彼女達を正面に据え、側面に展開した巡洋艦娘。相手の隙をう

かがうべく教室の所々に散らばる強行偵察艦娘。

狭い教室内。全員が臨戦態勢だ。

「砲撃を開始。一斉射撃。敵を殲滅する」

「総員シールドを展開。反撃を開始」

人間形態になってからこの方。なぜか次第に性格に緩みの出てきた戦艦娘達

のたががついに外れる。

光を放っているのかと思うほど高揚した表情。確かに大和の奪い合いだが、

その感情は怒りだけではない。

戦いそのものを楽しみに全員がワクワクと、生気を全身から発散していた。

「行くよキャサリン！」

「どこからでもいらっしやい飛鳥！」

双方の旗艦の宣戦布告。キラキラと煌めく髪の毛が舞い上がり全身を覆い防

御シールドを形成。

その最中にも、両陣営から放たれた凄まじい光球が次々と教室内に炸裂す

る。爆風に吹き飛ばされながら、燃え上がる椅子や机。室内は炎に包まれた。

ついにクラスメート同士の砲雷撃戦が始まったのだ。

「何でこうなる」

地獄の業火もこの炎の前ではぼやも同然。室外に被害が出るのを防止すると

ともに、教師も保護。大和のシールドが最大出力で展開された。

「本当にキャサリン達って酷いよね」

二時限目。飛鳥達とキャサリン達、両艦隊の交戦で教室は内部が完全崩壊。

教えるはずの教師も怯えてしまい、とても教室にいられる状況になく、グル

ープ学習と称したエスケープに全員が逃避。

「おまえ達も結構酷かったと思うが」

誰もいない特別教室の一室に大和とアジア連合艦隊所属の戦艦娘、旗艦飛鳥

を中心とする少女達は勝手に入り込んでいた。

「本当に大丈夫ですか？」

心配そうに大和達に視線を向け内気そうな娘。この場でただ一人の人間の娘

である立木ゆかりはきく。

ゆかりの心配も当然か。全員が煤け薄汚れていた。吐く息から黒煙がでない

のが逆に不思議なほどであった。

「どうもすまないな。こっちは大丈夫だから」

ゆかりの言葉に大和は笑みを返す。

「有り難かった。どこに行こうと思っていたら君が」

「そんな。同じ学校の仲間じゃないですか」

破壊した教室には戻れない。居場所がない。

入ったばかりの学校で右も左も見当がつかずウロウロしていた、そんな大和

達に言葉をかけてきたのがゆかりだった。

「親切にするのは当然ですから」

熱い視線で大和を見つめるゆかり。

「……当然ねえ？」

まだ二時間目。自分の授業もあるのだろうにエスケープしてまで、それに大

和に向けたその熱視線は何？

うさんくさそうにゆかりを眺めていた戦艦娘飛鳥だったが氣を取り直し、改

めて大和に目を向ける。

「あっちから撃ってきたから、撃ち返したただけだよ」

まあいいか。話を戻そう。当面、大和をキャサリン達の間をついて確保した

だけに、飛鳥は満面の笑顔である。

「まあ、いいけど。特に壊れたところはないな」

ここで飛鳥を追求しても怒り出すだけ。それがわかっているから大和も強くはでられない所だ。

「大和は優しいね。あたしの幼なじみだけはあるね」
にこにこ飛鳥は甘酸っぱい笑みを見せた。

「大丈夫だよ。あいつらは守りに重点を置いているから、肝心の攻撃力はたいしたことはないから」

続けていいながら飛鳥は体を寄せてくる。

「ここはあたし達だけ。あたしというかあたし達を自由にしているよ」

正確には違うけど。人間の娘など無視してもいい。飛鳥が大和に向けるのは

蕩けるような笑顔だ。仲間の娘達も切ない表情を浮かべ大和も困ってしまう。

「……幼なじみね」

「大和はあたしの体の奥深くを見たことだってあるよね」
甘えるように飛鳥はさらに体を寄せ、制服に手をかけた。

「……体の奥底までなんて？」

ショックを受けゆかりは黙り込んだ。

「幼なじみといっても実態は隣接したドックで同時期に建造されただけだし、

奥底を見たといっても組み立て途中のメインエンジンなんかをセンサーの検査

もかねて、お互いに走査しあっただけじゃないか」

微妙に甘酸っぱいのかなと思いつながら大和は素っ気なく飛鳥に答える。

「かもしれないけど幼なじみなのは間違いないじゃない。大和のメインエンジン

ンはあたしより立派で少し悔しかったんだよ」

少ししらけたらしく飛鳥は体を離す。

「そういえばあたし達とキャサリン達の攻撃を一人でそらして外に被害を出さ

せなかったのは、飛鳥よりも強力なエンジンを持っていたからなんだ」

扶桑、少し小柄な娘が感心したようにいう。

「その強力なエンジン見せて」

中国娘の副旗艦、定延が飛鳥と入れ違うように大和に接近してきた。

背が高く目が糸のように細い。不思議な印象の娘だ。

「見せろといわれても」

「作業用ハッチくらいあるでしょ」

細い指先が大和の胸板を探る。

「あのっ。あのっ」

目の前の隠微な雰囲気にはゆかりが身を乗り出すも、どうしたらいいのか？と

ても言葉が続かない。

「破廉恥な。何をなさっているのです」

怒気をはらんだ低い声が大和の耳に届く。

特別教室のドアが開かれ渦巻くような金髪の娘、キャサリンが高い位置から

の視線を絡み合う定延と大和にぶつける。

当然、仲間のアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊に属する戦闘艦娘も一緒だ。

「キャサリン。大和のメインエンジンはすごいんだって。みんなでみてみようよ」

怪しい笑みを浮かべ定延がキャサリンを誘う。そもそもこの状態の大和のど

こにメインエンジンがあるのか？

言っている定延すら知ったことではない。全てその場の勢いだ。
「えっ、ええ」

「楽しいよ。キャサリンも男の子の体をみてみたことないでしょ」
言葉に詰まるキャサリンの目前、定延は大和の上着の内側に手を伸ばす。

「そ、それもいいですわ」

思わず座り込むキャサリン。

「大和のエンジンはあたしが一番最初に見ることになっているんだから」

あわてて飛鳥もキャサリンの隣に座り、残った女の子達も周囲に群がってき
た。

「あたしも見ます。あたし機械工学の授業もとっていますから」

戦闘艦娘に後れをとった。意味の分からない事を言いながらゆかりも割り込

み、女の子達の丸い輪ができる。

「待て。待てったら」

うろたえる大和だが戦闘艦娘も人間の娘も、もう女の子達の勢いは止まらな

い。

「いいじゃない。大和あきらめが悪いぞ」

飛鳥も指を伸ばしキャサリンも、当然だが定延も大和の上着を引

っ張る。

残った女の子に同調。ゆかりも参戦し大和に殺到。大和は女の子の山に埋もれてしまった。

「胸板が堅い」

「腕も太い」

「男の子ってすごい」

一瞬にして上気しまくった女の子達の嬌声が特別教室に充満した。もみくち

や。人間も戦艦も何もない。みんな同じ。

ここは女の子達の戦場だ。

「待て。待てといっているだろ」

大和が女の子達の間から必死にはい出してきた。

上着がはだけシャツも開き筋肉質の胸部が剥き出しだ。

「いい加減にしないか。俺も怒るぞ」

口はともかく何とかこの場からと特別教室のドアにと向かう。

「駄目ですよ。逃がしません」

「足ならこのあたし達、強行偵察艦のほうが上ですから」

「知りたいことを知るのが偵察艦の性ですから」

しかしアジア艦隊の序列十三位若竹と序列十四位針葉そしてアメリカ・ヨーロップ連合艦隊の序列十三位エリカ。

素早く回り込んだ三隻の強行偵察艦に阻まれてしまう。

「すぐくましい」

「初めて。初めて」

大和が足を止めている間に再び女の子の包囲を許した。

「偵察させてください」

「みるだけです？ 本当です」

ここまで興奮状態になったらもう止まらない。次々にのびる細い腕がペタペ

タと大和の全身をなで回す。

「剥いちゃえ。剥いちゃえ」

「男の子の解剖をしちゃえ」

「助けてくれ。飛鳥、俺を助ける」

たまらず大和は一番気になっている女の子、アジア連合艦隊旗艦、序列一位

の飛鳥の名前を叫んでいた。

「逃がすな。解剖しちゃえ」

しかし瞳をキラキラと輝かせ一番ノリノリだったのが当の飛鳥だったから、

さすがの大和も助からない。

「やめろズボンはまずい。ここは学校だ」

いくら戦艦娘でも、相手は女の子。それに本当の人間の女の子まで混じって

いる。とても攻撃はできない。

そもそも艦隊運用に特化した大和の主装備は防御と情報解析だ。

元から攻撃

力は皆無に等しい。

「逃がしませんわ。ゴールドバ逃がしてはいけません」

大和にすがりつくようにズボンのベルトを握りしめ、アメリカ・ヨーロッパ

連合艦隊旗艦序列一位、戦艦娘キャサリンは所属する戦艦娘に指示を飛ばして

いた。

頬が真っ赤。服装は乱れ、腰までの金髪も乱れ放題。いつもの落ち着きほど

こにやら。キャサリンも雰囲気完全に飲み込まれていた。

「やめてくれ。ズボンが脱げる」

「逃がさない。解剖よ」

「男の子。男の子」

知識はともかく、今までの実体験がまったくない元戦闘艦の娘達とゆかり。

もはや歯止めが一切かからない狂乱状態だった。

「駄目だ。俺はもう駄目だ」

「いっちゃえ。いっちゃえ」

お祭り状態の勢いのまま、女の子達は一斉に大和のズボンを引っ張りおろす。

「わあっ」「脱げたー」

大和はズボンもパンツも守りきることはできなかった。

後ろにいた女の子はお尻。前にいた女の子達は、それこそ言葉にできないも

の目撃者となった。

「ギャーッ」

「……なななな」

目を丸くし、完全に固まった女の子達と大和。

「死ねー。馬鹿大和」「破廉恥ー」

飛鳥とキャサリン。そして女の子全員の悲鳴。

次の瞬間、女の子達の一斉攻撃が大和に集中した。

「なぜなんだ。俺が何をした」

何とか人間の娘、ゆかりをその腕で守りながらも、生み出された特大の火球

は特別教室と大和を完璧に粉碎したのだった。

「わきゃ！」

正面から見た。もうお嫁に行けない。格好がいいのか悪いのか。フルチン男

の腕の中、ゆかりは頓狂な悲鳴を上げていた。

「なぜあたし達は校舎に入れないの」

「校庭に机と椅子ですか。完全に島流しですね」

三時限目。戦艦少女達は校庭の片隅に作られたテントの中に座らされてい
た。

珍しく両艦隊の旗艦、飛鳥とキャサリンが同調しつつ、不満を漏
らす。

「二つも教室を破壊したのだから当然だ」

黒く焦げた大和は低く呟く。戦艦少女達の集中砲撃。その上で腕
の中の少女

も何とか無傷で保護。さすがに防御に特化した旗艦。

正直こんな目にあっても壊れない自分に感心するほどだ。

「緊急職員会議を開くからと新しい先生もきてない」

「一時限の先生が心労で病院に行ったからって言うけど、要するに
恐れをなし

て私達に目も合わせられないのでしよう」

アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊所属の序列二位のゴールドバと三位
スージーが

平然といて見せた。

旗艦であるキャサリンもそうだが彼女達は全員が背が高くスタイ
ルが抜群に

よい。しかし雰囲気は違っていてゴールドバは無愛想なほどに厳格、

スージーは

鋭く理知的だった。

「とにかく今度こそ騒ぎは御法度だからな」

……今はこんなにすましているけど、こいつらだって瞳をキラキ
ラさせて絶

対ズボンから手を離さなかったからな。

……女は存在自体が不可解だ。

うなずきあう白人少女に視線をやりつつ、大和としてはこれ以上
ややこしい

ことは勘弁願いたかった。

「仕方がないよ。……あたしあれをあんなに間近なんて」

思い出したのか、顔を真っ赤にした飛鳥が上目使いに大和を見つめる。

「大和が悪いんだよ。清かったあたし達を汚したんだから、ずっと旗艦として」

一緒にいてよね」

それでも必死に表情を引き締めると、飛鳥は大和には理不尽とか思えない要求をしてくる。

「見せられたのは私達だって同様です。目が汚れました。責任はとっていただけないと困ります」

割り込むようにキャサリンがまともに大和の瞳をのぞき込む。アイズブルー

の怜悯な瞳に大和は気圧されてしまう。

「だと思えます。やはり男の子は正直に非を認めないと」

更に戦艦娘に手を貸し授業をエスケープした立木ゆかりも同罪。

同じく校庭

に島流しされていた彼女も唇をとがらす。

「俺は悪くないだろ。やったのはおまえ達の勝手だし、恥ずかしかったのも俺

だし、何で責任をとらなくちゃいけないんだよ」

飛鳥とキャサリンさらにゆかり。三人の美少女に順繰りに視線を送りなが

ら、大和は懸命の抗弁を口にした。

今度は黙って言いなりにはならない。視線には力がこもっていた。「あれだけの立派なものをお持ちになっているんですから」

大和の動揺を誘うつもりなのか、脇から口を出したアジア連合艦隊序列三位

副旗艦の定延が、細い目をさらに糸のようにして艶っぽくほほえむ。

「……ちゃんと剥けてたし、笠だって」

小柄な娘、扶桑が小声で呟く。実物は知らなくてもそこは人型インターフェース。

ス。電腦娘はネットにも潜り放題である。

そして扶桑は序列五位の戦艦。艦内には数百人の人間。外には漏らせない

が、その関係は男女も含めて完全把握。

知識は無量大。あの騒ぎの中、確認することはしっかりと確認していた。

「メモリーに一瞬でも記録できれば、何度でも見直せるもんね」

「赤外線に磁気共振。その気になれば後ろ側からだって精査しちゃうもの」

さすがに並の娘とは違う。顔を赤くして笑み含みでささやきあっている姿と

は裏腹に、ほぼ全員が大和のすべてのサイズを知り尽くしているらしい。

「何ならデーター転送してあげようか」 「……もういいかも」

どうやら間違いなく戦艦娘全員が大和のデーターを完全解析していたようだ。

「ゆかりさんはデーターいますか？」

ただ一人の人間の娘。データー共有していないゆかりに戦艦娘の一人がきく。

「……お願いします」

恥ずかしそうなゆかりだが、その手にはモバイルタイプの情報端末がしっか

りと握られていた。

「だからなんだと言うんだ。俺がなんだろうと責任は別物だろう」

上気し頬を染めた黄色白色二群の娘達に大和はさらに声を上げた。

「だから大和はあたし達の旗艦じゃない。それも女の子であるあたし達の。い

くら数がいたって跳ね返してよね」

「統合旗艦で男性人格。全員が期待しているのですから。あなたにその程度を

期待することがいけないとでも」

サラッと飛鳥とキャサリンが大和にとどめを刺す。

「……勝手なことを言ってくる」

理不尽だ。女子相手でもあの人数を相手に何かできるとは、大和には到底思えない。

相手は女の子。下手に力を出せば大ブーイングがくるだけだし、そもそも本

気であつてもあの状況がどうにかなる訳がないのだ。

わかつていても、俺に何とかできるはずないだろと主張することは、情けな

くてとてもいえない。

低く呟くことしか大和にはできなかった。

「……内心では興味津々。恥ずかしいけど知ったことは無駄ではなかったりして」

「そうだね。今夜は興奮してうまく眠れるかな」

「メモリーを再生するのが楽しみ、楽しみ」

押し黙る大和の背後から、再び女の子達のクスクスという笑い声が聞こえてきた。

「ねえ大和君、そのそれって、やっぱり大きくなるのかな」

受けをねらったのか。半分以上女子校乗りなのか。白人種偵察艦娘の一人序

列十四位、クールベからとんでもない発言が飛び出した。

「……！」

あまりの言葉に思わず固まり絶句する一同。

「……あのっ。別に深い意味はないのよ。そのあたし偵察艦だから、味方艦の

全てのスペックも知っておいた方がいいかなって」

重い沈黙に発言した女子は真っ赤になり、引きつった笑いを漏らす。

「……一応は」

正直に言うべきか迷った。本来の姿でないこの体のスペックなど申告しなく

てもいいと思う。女子の疑問はおそらく単なる興味本位だろう。

それでもいつになったら元の姿に戻られかわからない状態。旗艦としての責

任感から大和は今朝の体験を元に短く答えた。

「大きくなるって」

「やっぱりカチカチに堅くなるのかな」

「それこそ、天だって突きまくっているに決まってるじゃない」

一斉に少女達が声高にさえずる。確かに仮想人格だが油断をしてはいけな

い。艦に乗っていた人間の行状を逐一、その目蓋の奥に収めているのだ。

耳年増の究極が姿を変えた存在でもあった。

「いい加減にしなさい。大和様は私達の旗艦。下世話なことは口にしないでく

ださい」

「キャサリンの言うとおり。今あたし達が問題にしないではいけな

いのは、そ

んなことではないだろ」

珍しくキャサリンと飛鳥が口をそろえる。彼女達もそれぞれの旗

艦。各艦隊

の統率をとるのも彼女達の責務だった。

「大体あたし達は本来の姿から離れているでしょ。そんな瑣末なことなどメモ

リーから消去しておきなさい」

あたしは完全保存版かな？と内心で呟くと飛鳥はもっともらしく訓告を与える。

「だって何時になったら元に戻るか。時空震の影響たって原因かもしれないけど、どうしてなんて全然わからないし」

旗艦の剣幕に頭を押さえながらも序列五位の扶桑が言いつのった。「そんなことは言っていられませんか。今は第三と第四の二つの艦隊しか動い

てられない状態なのですから」

旗艦同士分かり合えるのか。キャサリンも飛鳥の立場に同調して口を挟む。

「現実問題ですが、今のところ明確な敵もいないですし明確に元の姿に戻る

手段ありませんが」

「あえて言えば、相手は海賊程度。これはあたし達ではオーバースペック。警

備艇程度で十分な相手。ならば現在を楽しんだ方がお得じゃないかな」

スージーの発言に定延が補足する。実際、現存する特別な敵はなく宇宙艦隊は文字通り万が一の事態に備えているだけだ。

海賊はいるが持っている船艇は惑星表面を這い回るのがせいぜいのシャトル

クラス。恒星間宇宙で活動する艦隊所属艦とは次元が違う。

もつとも恒星間武装船を建造しても襲う相手は同じ。所得も大差はないだろう。

建造費と運用費が三つか四つ桁が違うそんなオモチャを建造する愚か者は、さすがに海賊にもいなかった。

「下手に私達が動くところかあつまり撃沈して、逆に惑星表面に被害を出しかねません」

定延の補足にさらにゴールドバが乗り出し、両副旗艦の言葉にとりあえず議論は沈静化した。

基本的に各艦隊は所属する国家群の示威活動のために存在しているようなもので、実質的な意味は今のところ薄い。

その分各艦隊のライバル意識も強く、現在活動中の艦隊に心穏やかではない

のだが、今のところそれは仕方がないだろう。

「このままじゃやることもなしか。立派な男の子として、そんなんじゃないや大和殿

もつらいだろうから、あたしが夜もお相手しようか」

定延は冗談っぽく微笑むと大和にしなだれかかる。しかし目が薄く濡れそぼ

り、かなり本気だと誰もが思わずにはいられない。

「あ、あなたは何を考えているのですか。先ほどからおかしな媚態を振りまい

て。大和様はあなたのようなアバズレは相手にはなさいません」

「そうだよ定延。大和はあたし達のもの。あんた一人のものじゃないのよ」

「それも違います。大和様は私達のものです」

「あんた達は馬鹿。大和とあたしは幼なじみで、みんなとは同じ起源の生まれ

なの。お邪魔虫は消えなさい」

「誰がお邪魔虫ですか。気品のかけらもないあなた達につきまとわられる大和

様がお気の毒です。あなた達こそ消えなさい」

飛鳥とキャサリンは言い争いの末、椅子を蹴倒し立ち上がった。

「……あなた達のような乱暴者。どちらにしる迷惑なのでは」

ただ一人の本当の人間。もっとも大和も本来は人間ではないので、どれだけ

のアドバンテージがあるものやら。

ゆかりはそつと心の中で呟く。

「やる気なら容赦しないよ」

「口だけで私達に勝てるつもりですか」

「愚かな、何度同じことを繰り返すつもりですか」

「その言葉そのままあなたにお返しします」

双方の旗艦の対決に艦隊所属の戦艦娘が一斉に立ち上がった。即座に全員の

体に縦線が入り臨戦態勢を作る。

まさに一触即発の事態だった。

『非常事態発生各シールド展開！各員避難態勢に』

何度も同じことが起こればさすがに対応も早くなる。校庭はお馴染みの青白

いシールド光に包まれた。

さすがに学習済み。ゆかりは素早く立ち上がると校舎に消えていく。

「全く定延め。勝手なことを言ってくれる。俺の気持ちも知らないで」

呟く大和の目の前で飛鳥を旗艦とするアジア連合艦隊とキャサリンを旗艦と

するアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊との艦隊決戦が火蓋を切った。
乱れ飛ぶ光弾。同時に煌めく長い髪の毛が体を覆いシールドと化す。凄まじ

い爆炎が校庭に充満し、もはや目も開けていられない。

「俺だって困っているんだ」

大和の前で戦っているのはいずれも美少女。どうせ人間型のインターフェー

スを作るのなら、より見目麗しい姿が望ましいから当然のことだ。

男性型のインターフェイスである大和だって、当たり前だが少女達に相応し

く抜群の美少年だ。

「誘ってくれるのは嬉しい。もしかして定延なら後腐れなく遊んでくれるかも

知れない。正直、抱けるものなら抱きたい」

単なるインターフェースの時は知識としてはあっても、当然だが実感として

の性欲などなかった。しかし実体を得た今は違う。

普通なら時間をかけて抑制力を身につけるのだろうが、いきなりの実体化。

感じる欲望は大和の強い意志力を持っても我慢しかねる強さだ。

大和だって戦艦娘達と同じだ。自分に乗っていた男の兵士が彼女を連れて艦

の片隅で。

目撃するだけしかできなかったことが、今は自分だって可能。

「しかしそれはできないんだ」

校庭では圧力に負け一次シールドを失い、二次シールドも次々と崩壊してし

まう少女が続出。

髪の毛に続いてシールドの具現たる衣服も失い、下着だけの半裸姿になる少

女があちこちで出現していた。

布の絶対量が足りないせいかな？上着ほどではないが、下着でだけでもそれなりにシールドは張れる。

まだまだ少女達の士気は高く、なかなか戦いは終わらない。

「大和はあたし達のものだ」「大和様は私達のもんです」

「本当に俺の気持ちも知らないで」

少女達の叫びを聞くまでもなく。戦艦娘の全員が自分を好きだと大和は知っていた。

より強い統率力を求め、少女達の好みを計算しつくした上で、統合旗艦に自分のパーソナリィが選ばれたのだから。

だから誘えば誰であっても自分についてくるのは確実だ。本当に望めば全員が最後までつきあってくれるだろう。

しかし同時に大和は知っていた。一つの艦隊に所属する戦闘艦は常にデータリンクし安全を確保していると。

秘密の恋人は不可能。リンクを切れば、その時点で不審に思われる。だから一人を抱けば残りの全員にもつきあいを要求されるに違いない。

さらに艦隊同士のライバル心は強いから一つの艦隊と関係を持てば、別の艦隊の戦艦娘に自慢するに決まっている。

結局アジア連合艦隊の十四隻とアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊の十五隻。計

二十九人の戦闘艦娘の相手をしなければ絶対に収まりはつかないだろう。

「俺にはそれだけの体力はないんだ」

……でもっ？艦隊の娘達はリンクしているが、ほかの娘なら？一瞬、立木ゆ

かりの姿を脳裏に浮かべる大和。

不埒な事を思う大和の心の中まで見通せる訳もなく、彼の目の前でほとんど

の戦艦娘は二次シールドまで完全に破られて全裸と化していた。

なぜか一次シールドの髪の毛は破られても煌めきが消滅するだけで一応は残

るのだが、二次シールドの衣服は消滅してしまう。

髪の毛は元々戦艦娘に付属していたものだが、衣服は後から着用したもの、

だからではないか？

色々と解釈はされていたが大本の人間形態になった理由も不明なのだから、

本当のところは誰も知らない。

そういうものだし言い様のない現象ではあった。

「何日かはうまくいっていたのに、今日は最悪だよ。ついに机も椅子もなくな

って地面に体育座りだもの」

「今日の惨状。学校にいさせてもらえるだけでも大温情だと知らないさい」

自分だってもろ当事者にもかかわらず、実に偉そうにアメリカ・ヨーロッパ

連合艦隊旗艦、艦隊序列一位のキャサリンはそう宣う。

四時限目。校庭の片隅に隔離されるように、シャツと短パンの体育着姿で黒

く焼けこげた地面にバラバラと座り込む戦艦娘達の姿があった。

「当然だが教師はいない。おそらく二度と俺達の前に姿は見せないだろうな」

あれだけ火器を撃ちまくったのだ。普通の人間が近づくには危険すぎるだろう。

肩を落とし大和は低く呻く。なまじエリートとして育てられただけに、この失墜感には耐え難いものがあつた。

対して飛鳥とキャサリンは打たれ強いのか存外と平気だ。いつの間にか問答

にも絶妙な間が生じ、このまま仲良くなっていくのかもしれない。

「学校には期待していたのに」

「それは先生達の言葉。最先端の英知が詰まった現役の戦艦。全般を司る仮想

人格。さぞかし伶俐な存在がと期待していたでしょうに」

「来たのがこんな暴れ姫とはな。失望を通り越して恐怖の一言だ」

調子よく続く飛鳥とキャサリンの問答に大和も参戦。

「わかりやすい飛鳥はともかく、一見落ち着いているキャサリンも同類項とは

俺ですら知らなかった」

二人にげんなりした視線を向けると大和はさらに肩を落とす。

「なら言ってもいい。大和がこんなに統率力不足なんて知らなかったよ」

「確かに情けなかったですわ。大和様なら私達をしっかりと導いてくださると信

じていましたのに」

何時の間にタッグを組んだのか、飛鳥とキャサリンは大和に逆襲に出た。

「まあまあ。仕方がないですわ。この体に馴染めば馴染むほど」

「やりたいこととやりたくないことがはっきりとしてきたから」

女の子座りの序列二位定延と体育座りの序列五位扶桑が声を合わ

せると、本

来は敵対しているはずのゴルドバとスージーも口を挟んできた。

「肉体を得て戦艦時代の束縛感から解放されたのかもしれないな」

「言いたいことを言い合ってストレスフリーな生活ですから」

軍艦時代はいろいろな軍事機密もあり好きなこともできなかったが、こうな

った今となってはそんな閉塞感も全てチャラだ。

生き生きとうなずきあう両艦隊の戦艦娘である。

「まさかあんなに下ネタで盛り上がるとはね」

「このメモリーは生涯完全保存版です」

「今日ほど楽しかったのは建造されて以来、初めての体験です」

残りの戦艦娘達も口々に感想を漏らす。全員が満たされた思いでいっぱい
だ。

「そんなに面白かったか。実も俺も楽しかった。逃げまどい必死に教師を守

り、それでも生き生きと好き勝手やっているおまえ達をみているのは決して悪

い気分じゃなかった」

……もつと言うことを聞いてくれていたら俺としたら楽だったけど、こんな

に心躍る体験はまず期待できなかったろう。

そう思うと大和も麾下の戦艦娘に対して笑みを禁じ得ない自分をついに認め

てしまうのだった。

「でも大和、実際あたし達は何をしたらいいのかな」

「このまま漫然と過ごすのもさすがに考え物ですし」

ひとしきり笑いさざめきあっていた戦艦娘だがさすがに退屈してきたのだろ

う、大和に今後の行動方針を求めてきた。

「この時間は相互メンテナンスに当てようと思う」

「……メンテナンス」

「あれだけ無茶やったからな。いくら何でも少しは調べておかないと、後で不

調がでるかもしれないだろう」

「そうですね。楽しすぎて大和様に言われるまで、私もメンテナンスにまで気

が回りませんでした」

キャサリンが言うのと次々と戦艦娘達は立ち上がる。

「とりあえず校舎内に入れるよう交渉しよう。いくら何でもこんな場所ではチ

ェックもメンテナンスもできないからな」

「駄目でもなんか身を隠すもの程度は確保してきて。そうそう乙女の柔肌は人

に見せられないから」

飛鳥は今までの行状を忘れたらしく、頬をピンクに染めると大和に頼み込

む。一時は全裸で主砲を撃ち合ったのだが、さすがに通常ではそうもいかな

い。

「……まずは学内のネットにアクセスして」

時々自分でも忘れてしまうほど人間らしくなってきた大和だが、やはり仮想

人格の対人インターフェイス。

ネットダイブなどお手の物であった。

「体育準備室を使ってくれて。校舎の横手にあるらしい。何か欲しいものと

いつていたけどチェックしないと欲しいものもわからないから、後で連絡をす

るといった」

「じゃあ全員移動しよう」

「全員というのは私達も含まれますの。まあ、いいですけど」

飛鳥の号令に一度は突っ込むキャサリンだが、そこはもう慣れっこ。

「いいじゃない、今更」

「そうですけど」

あっさりと飛鳥の後に続く。

「大和はどこかでセルフチェックしてて。やっぱり男女一緒にまずいから」

「あたしならどこを見られても構いませんが」

クスツと小さく笑みを浮かべ国際連合軍所属アジア連合宇宙艦隊副旗艦、序

列二位定延派スツと胸元を広げ、真っ白な肌を涼しい風に曝す。

「定延、そういう冗談は大和には通じないから。本当に全部見られとかしちゃうから」

「これだけの女の子の前でご自分のものを開陳されるお方ですから確かに」

いつの間にかキャサリンの頭の中では大和が自分で女の子に男の象徴を見せたことになっていたらしい。

「旗艦のくせにいやらしい奴だから」

当たり前のように飛鳥も大和の弁護はしない。

「……いいけどな。名前だけの旗艦か、俺は」

大和は不満だった。なぜかいつの間にか自分の扱いが下落し放題。確かに飛

鳥達に興味はあるが、ついて行くほどプライドは失っていない。

「あたしなら本当に大和殿に全てをお見せしてのよいのですが、よかったですら後

でのぞきに來てくださいね」

「だからやめなさい、定延。大和も本当に来ちゃいけないよ」

飛鳥とクスクスと笑みをこぼす定延の会話の途中、キャサリンが大和を鋭く

にらむと一言。

「ついてこられたら撃沈しますから。皆様いきましよう」

「……本当に俺に対する好意はどうなった」

体育着姿の二組の戦艦娘達が仲良く連れ立って歩いていく。笑いに包まれた

戦艦娘達の背中を見送りながら大和はさらに愚痴をこぼす。

ようやく平穏な一時間が過ぎつつある地球連合所属アジア連合艦隊とアメリカ

カ・ヨーロッパ連合艦隊の統合艦隊だった。

体験入学者である彼女達の予定は午前で終わり。しかし学校は終わっても彼

女達の一日はまだまだ終わってはいない。

宿舎の中の戦艦

第二章 宿舎の中の戦艦。

「ただいまー。今、帰ったよ」

「ただいま。帰って参りました」

地球連合軍日本分遣隊基地宿舎に飛鳥とキャサリンの明るい声が響く。

「お帰りなさいませ。ご苦労様です」

軍宿舎を守る連合軍兵士が自動小銃を抱えて戦艦娘に答える。この宿舎が現在の彼女達の住居。

結構広く大型の航空機の発着すら可能な二千五百メートル級の滑走路をも備えた大規模基地に隣接した五階建ての建物だ。

軍事機密の固まりに近い戦艦娘がすむ場所としてはやはり国連軍関連施設し

かあり得なかった。

「ただいま。みんな元気」

「警備してもらってありがとう」

旗艦である飛鳥達に続き戦艦娘が続々と帰ってくる。基地関連の施設にすむ

のと同様の理由で彼女達は集団行動を義務づけられていたのだ。

もっとも元々艦隊行動が普通だったので、戦艦娘達にはこれが常態。仲間同

士の会話も楽しく集団での行動に特に不満はなかった。

「ただいま。今日は疲れたな」

「お帰りなさい。今日もお疲れ様」

後続の少女達に対する兵士の口調は少し砕けたものだ。見た目は

ともかく飛

鳥達は旗艦クラス。それなりに気を遣っているのだろうか。

「今日は楽しかったよ」

「お元気そうで何よりです」

ニコニコと兵士に笑いかける戦闘艦娘。それにしても出迎える兵士達の口調

は明らかに弾んでいる。

顔も何とも嬉しそうだ。もっともこれだけの美少女が勢揃いしていればそれ

も当然か。兵士達もまた男だったから。

「帰りました」

連れだった戦艦娘と同様に大和も兵士達に軽くさげる。

大和は戦艦娘達のほぼ真ん中を歩いていた。統合旗艦である大和が撃沈され

れば艦隊としての統制がとれなくなる。

大和を守るのも戦艦娘達の責務。少女達にとっては当然の位置関係だった。

もっともいつも可愛い女の子達に囲まれやがってと言う男としての感情が兵

士達に生まれてしまうのも、それは無理からない。

「ご苦労様」

大和に対する兵士の態度は実に素っ気なかった。

「それにして軍学校に登校なさるときには制服でしたのに、今は体操服。学校

で何かあったんですか」

警備の兵士の一人が不思議そうに聞く。

「そういえば鞆などもお持ちになっていませんが」

別の一人がさらに尋ねてきた。

「学校でちょっとあって、教室にいていた鞆は焼失しちゃたの」
さすがに連合艦隊同士で大暴れしたとは言いたくない。小柄な戦

艦娘アジア

連合艦隊、序列五位、扶桑が小首をかしげ誤魔化しを試みる。

「私達とアジア連合艦隊とが対立し戦闘行為に入ったのだ。鞆は一度目の戦闘

で教室で燃え尽き、制服は二度目の戦闘で校庭で二次シールドとして消失し

た」

アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊所属の副旗艦戦艦娘序列二位、ゴルドバが厳

格な雰囲気に対応しく、生真面目な表情で扶桑の補足をした。

扶桑の努力が一瞬で台無しになる。

なぜか防御の要であるシールドは一次は髪の毛、二次は着用している衣服が

当てられ消費される。

髪の毛は輝きが失われればそれでおしまいが、衣服は完全に失われてしま

う。三時限目の艦隊決戦で全裸の戦艦娘が続出したのはそのためだ。

「そのときの戦いで下着も消失しましたから、今はこの下、ちょっと困ったこ

とになっています」

小さく首をかしげる細い目の定延のあけすけすぎる再補足に、兵士も戦艦娘

達も一斉に目を丸くし固まってしまう。

「校庭で大和殿とご一緒の時、膝を立てた体育座りしていた方が大勢いました

ので、覗けてしまうのではと、あたし内心ドキドキしてしまいました」

空気すら固定化した中、筒状の短パンの端を軽くつまむと、定延は頬をピンクに染めてみせる。

「大和、あ、あんたまさか」

「大和様、もしかして私達の」

固まった空気が微塵に砕け散り、双方の旗艦、飛鳥とキャサリンが大和に詰め寄る。

「大和、あたしも体育座りしてたのに」

「まさか私も見られたのでは」

扶桑やゴールドバも血相を変えて突進。さらにその周囲に二重三重の人垣ができた。

「大和様。見てないよね、絶対見てないよね。気づいていたのなら、定延もなぜそのときに言わないのよ」

「正直に言ってください大和様。答えによっては、あたし」

涙ぐみ必死に叫ぶ戦艦娘達。早くも体に縦線を走らせ、主砲の発射態勢に入

った戦艦娘も少なくない。

「よかった。あたしは体育座りしていなかった」「私もです」

もっともいち早く安全圏に逃れ、安堵の息を漏らす娘の姿もあったが。

「飛鳥って娘。こんな弾けた性格だったけ」

「最初はキャサリンって娘。気こそ強かったが、もっと理性的だったような」

「あの定延という娘。あんなに色っぽかったか」

そしてさらに驚いていたのが警備の兵士達だ。全員がより女の子らしくなっていた。

最初来たときの無機質から、目の前の生き生きとした様子。昨日より今日、そして今朝より今現在。

戦艦娘達の変貌ぶりは驚くほどだった。

「見ていない。そんなこと気づいてもいない」

戦艦娘に詰め寄せられた先では大和が両手を挙げ降参のポーズをとりつつ、必

死の弁明をしていた。二時限目の恐怖がよみがえる。

目の前のクワガタムシを思わせる二股の角。エネルギーの収束が始まってい

た。また戦艦娘達の集中砲火を浴びせられてはたまらない。

「おそらく見ていませんよ。大和殿はそんなお方ではありません」
さすがに見かねたのか定延が助け船に入ってくる。

「何でそんなことがわかるのよ。大和って。そ、その自分のものだってあたし

達に見せるような変態野郎だよ」

「そんな誤解するようなことを言うな。あれは勝手におまえ達が俺のズボンを

脱がしたんだろうが」

飛鳥の非難には、さすがの大和も黙ってはられない。このままではただの

変質者にされてしまう。

「経緯はともかく見せたのは事実よ。あえて見ないなんて、そんな自制心。大

和にあるなんて、あたしには信じられない」

「経緯が一番大切だろ。俺は紳士だよ。そっちこそ事実を見ろよ、事実を」

大和の正論に飛鳥は逆ギレした。二人のにらみ合いが続く。

「自制心があるとか、紳士とか。あたしが言いたいのはそんなことではないの

です。言いたいのは要するにあたし達の大事なところを盗み見たら、大和殿が

あんなに平静でいられる訳がないってことなんですけど」

大和のことを信頼しての言動かと思ったら違った。定延は実に明快な判断基

準で、大和の行状を切って見せる。

「確かにそうですわ。私達の肝腎なところを盗み見て、大和様が顔色も変えず

誤魔化しきれるはずありませんわね」

定延の言葉に納得し、キャサリンがようやく胸をなで下ろした。

「そうか、大和だもんね。顔が赤くもならないし、何の動揺も見せないなん

て。あいつがそんな平常心なんか持っているはずもないか」

続いて腑に落ちた飛鳥も大きく頷く。とんでもなく評価を下げていく統合旗

艦だった。

「……確かに短パンの前も膨らんでいなかったし」

最後に扶桑はトドメとばかり小悪魔の笑みを見せ、その場を締めくくった。

「とにかくこれでわかってくれたな。俺は見えていない。というより見ることが

できるチャンスがあっても、絶対に覗いたりはいしない」

正直に言えば全く納得などできない推移だった。しかしここで反論をしたら

また泥沼に落ちかねない。

自分の正当さを強調することでよしとする大和だ。

「そうしてください。どうしても見たいのならみんなに内緒で、そつとあたし

だけに耳打ちをしてくださいね？」

糸の目に媚びを凝らせ、定延は何とも色っぽく微笑むのだった。

「気をつけ。前にならえ」

久々の大和の号令が戦艦娘達の耳を直撃した。

「構え、筒！」

大和の目の前、対面。国連軍基地の片隅に二十九名の戦艦娘、巡洋艦娘、強行偵察艦娘が居並んでいた。

手には国連軍制式銃器の自動小銃が握られている。

「ハッ。教官殿」

号令と同時に戦艦娘達が一斉に胸の前で銃を構える。旗艦の飛鳥とキャサリン。さらに副旗艦の定延、ゴールドバが先頭に四列縦隊。一列約七名で彼女達は編成されていた。

軍事学校は午前中だけ。これではやることがないので国連陸軍の教練マニユアルに従い、旗艦の大和を教官代わりに、自主的な軍事訓練をすることにしたのだ。

本来は戦艦の彼女達に陸軍の訓練をしたからといってあまり意味はないのだが、士気の維持と規律の引き締めをねらったの特別訓練だ。

「戻せ筒！」

再び叫ぶ大和に従い自動小銃が戦艦娘の胸元に戻された。

「右向け、右！そのままランニング開始」

「ハッ。教官殿」

号令いっか、陸軍の制式迷彩戦闘服と多機能ヘルメットに身を包んだ戦艦娘達が、足をそろえて大和の目の前、ランニングを開始する。

「いっちに！いっちに！」

アイドル顔負けの彼女達が声をそろえて走る様は、軍事訓練と言うより、まんまアイドルタレントの大運動会だ。

「チンタラするな。速度を上げろ」

戦艦娘の後ろから細長い棒を持った大和も後を追う。甘やかして
いては士氣

の維持も心許ない。

「ハッ！教官殿！」

見守る大和の目前、丸いお尻が同じリズムで揺れる。厚い生地
の戦艦娘だが

女と男では骨格自体が違う。

軍事訓練の真っ最中。厳しい教官を演じるはずの大和だが、眼福
な眺めにつ

いつい胸が高鳴ってしまう。

それは何も大和一人のことではない。

「可愛いよ、飛鳥ちゃん」

「綺麗だよ、キャサリンちゃん」

弾む大きな胸や汗に濡れた顔。いつの間にかこの時間に戦艦娘達
が走って

ることが基地内に知れ渡って、手の空いた兵士やら職員がギャラリ
ーと化し応

援を送るのが通例となってしまうていた。

「ありがとうございます」

「がんばります」

声をかけられればつい返事をしてしまう。可愛い声が返ってくる
と知ればさ

らにギャラリーの数は増してしまう。

「いらない声を出すな」

俺自身が浮ついているのに、これ以上ギャラリーを集めてたまる
か。

訓練マニュアルに従い、戦艦娘達に対して当然の注意をする大和
に、ギャラ
リーの陰しい視線が突き刺さる。

「教官、横暴だぞ」

「定延ちゃん、気にすることないよ」

すっかり悪役の大和である。と、前を走っていた戦艦娘達のスピードが落ち

た。

「何をしている。勝手にスピードを緩めるな」

怒鳴る大和達だが戦艦娘達の足はどんどん遅くなっていく。

「反乱されているぞ、教官殿」

「そんなに信頼されていないかい、教官殿」

何とも嬉しそうにギャラリーがはやししたてる。

「ギャラリーがうるさい。おまえ達も俺の言うことが聞けないのか」
つつい声が荒くなる大和。その間に足を緩めた戦艦娘の最後尾がついに大

和に追いつかれてしまった。

「申し訳ありません。やはり言うことを聞く訳にはいきません」

最後尾の戦艦娘、多少骨太で逞しい印象。アジア連合宇宙艦隊所属、艦隊序

列四位、戦艦娘愛宕は困ったような顔で大和に頭を下げた。

「……そんなに俺は信頼されていないのか」

心底情けなくなり大和は小さく呟いた。

「悪いわね、大和。今さっきキャサリン達と相談したのだけど」

前方、戦艦娘達の先頭に立つ飛鳥の声が大和の耳に届く。

「やはり大和様は私達の旗艦」

「一人にしておいたら、あたし達が一緒にいる意味がなくなっちゃうよ」

「大和様をお守りするのが私達の存在意義ですから」

「あたし達の全ては大和殿のもの。身も心も」

続いてキャサリン、扶桑、ゴルドバ、定延達の声が耳に届いた。

「何でい？そのモテモテぶりは」

「こんなところでハーレム作っているじゃないよ」

ギャラリーの耳にも届いた戦艦娘達の言葉に、大和に嫉妬した男達の間から

一斉にブーイングが巻き起こる。

「うるさいぞ。フラレ男ともが」

揺れる胸、明るい笑顔。足を緩めた戦艦娘達に囲まれ、思わず目尻が下がる

大和。

別の意味での悪役になってしまった統合旗艦だった。

「大和様、こちらの席が空いてますよ」

アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊旗艦キャサリンの高い声が地球連合軍日本基

地に隣接した宿舎内の大食堂に響いた。

「大和はあたし達と一緒に食事をするって決まっているの知らないの？」

続いてアジア連合艦隊旗艦飛鳥の元気いっぱいの声も食堂に響く。

「寝言は寝てからになさったら」

すかさず瞳をあわせるキャサリンと飛鳥だった。

「あれだけ走ったらお腹が減っちゃった」

「この体になっての楽しみは食事だな」

さらに扶桑やゴルドバの声も後に続く。

「おっ！お姫様達の入場だぜ」

「華やかでいいな。これまではむさ苦しいだけだったからな」

とたんに巻き起こる基地所属の男性兵士達のだみ声。

「あたし等女もだっているんだけどね。まあっ、可愛いのは認めるしかないけど」

ど」

苦笑しつつ、同僚をみる女性兵士達の声も混ざる。

「確かにあたし達が食事ができるなんて、今まで考えたこともなかったです」

わ」

序列五位の扶桑の言葉に序列二位の戦艦娘、定延が頷く。元々は戦艦の対

人インターフェイス。姿は人間でも所詮はホログラフィ。

ものを口にできるはずもなかった。

「みんなこのテーブルで食事をもらおう」

飛鳥が食堂の一角にしつらえられた誰も座っていない大テーブルを指さす。

二個艦隊全員が座れるここが、戦艦娘達の指定席。

やはり艦隊は同一行動が基本だろう。

「あんまり騒ぐなよ。周りに迷惑だからな」

戦艦娘達に言うと、大和が一番最初に大テーブルの壁側真ん中、一番の上座

に座る。これは統合旗艦としての当然の権利だ。軍隊は序列が一番大事だから。

「私達も座りましょう」

いつもの順序に従いキャサリンが大和の左側に着席する。

「……そうだね。立っていても仕方がないし」

飛鳥は珍しく一瞬口ごもった。

「何んなのです、あなた」

いつになく堅い飛鳥の表情に、キャサリンは訝しげに小首をかしげる。

「食事をお持ちしました」

旗艦である飛鳥達に艦隊序列の低い強行偵察艦娘や巡洋艦娘が食事運んできた。

「ありがとうございます。いつも済みません」

「俺のが持ってきてないけど」

大和が眉を潜め不満そうに言う。キャサリンや飛鳥の前には食事

の皿がきた

が、大和の前には来ない。

統合旗艦である大和は通常時、最初に食事の皿が運ばれる。序列として一番

最初だから当然の権利であり、規律の証明でもあった。

「何をしているの。大和様に早く食事をお持ちしなさい。飛鳥、今日の大和様

に食事を運ぶのはそちらの番でしたでしょ？不手際ですわ」

飛鳥をにらむとキャサリンはきつい声を出す。

「大和の食事は今運んでくるから」

目をそらしながら飛鳥はキャサリンの問いに答える。

「大和殿、食事をお持ちしました。十分に味わってお食べください」
その時になってようやく定延が食事を運んでくる。定延はアジア連合艦隊の

副旗艦、序列では飛鳥に次ぐ。

艦隊内の序列が高いので、普通は運んでもらう側だ。

「飛鳥さん、何ですかこれは」

大和の前に出された食事をみてキャサリンの表情が険しくなる。

「えっと、あたし達手作りのご飯だけ」

飛鳥はキャサリンから目をそらす。飛鳥達の目の前に出された食事は食堂の

当番兵の作った質実剛健、見た目を気にしない内容と量で勝負の料理だ。

そして大和の目の前の食事は妙にチマチマした女の子然とした料理だった。

「なぜこんなことをするのです」

「やっぱりあんな軍隊式の飾り気のない料理ではなく、あたし達の心のこもつ

た手作り料理を食べてもらいたいじゃない？女心よ」

キャサリンの追求に飛鳥は思いつきり瞳を泳がせる。

「私の言いたいのはなぜ黙ってあなた方だけで事を運ぶのかと伺っているのです

す。こういった抜け駆けは困ります」

苦り切った表情で飛鳥をにらみつけるキャサリンだった。

「何よ。そこまで言われるほどのこと？」

「ま、まあっ。いいじゃないか。明日はキャサリン達の手作り料理を期待して

いるから。それでいいだろう」

ついにキャサリンをにらみ返す飛鳥に艦隊決戦の悪夢がよみがえり、大和は

急いで仲裁に入った。

「大和様がそうおっしゃるのならいいですけど。間違いなく明日は私達の料理を召し上がっていただきますから」

統合旗艦の大和に言われては仕方がない。渋々キャサリンは矛を収めた。

「さて、食事にしようか」

言う和大和は目の前の料理に視線をやる。見た目はおいしそうだっ。しか

しこれまでホログラフィだった戦艦娘達には当然だが調理の経験はない。

果たしてどんな味がするのか？艦内で男の兵士が初めて彼女の手作り料理を

食べさせられひどい目にあったという話はよく聞いていた。

彼女は人間だろう。しかし目の前の料理を作ったのは人間ですらないのだ。

「美味しいよ大和。あたし達の手作りなんだから」

瞳をキラキラさせ飛鳥が弾んだ声を出す。

「食べてよ。食べてよ、大和」

小柄な戦艦娘、扶桑もワクワクと胸をふくらませ大和にせかして

くる。

「大和殿みんなで作ったのだ」

定延の視線が期待を込めて、大和の指先を見つめる。

「……」 「……」

声には出さないが残りのアジア連合艦隊の戦闘艦娘達の視線も大和に集中していた。

「じゃあ、いただくよ」

いずれ食べなくてはいけないし、そんなに待たせておけもしない。覚悟を決めた大和の指先が動く。

スプーンにのせられた料理がついに大和の口の中に消えた。

「……味はどうですか」

キャサリンがアジア連合艦隊所属の戦艦娘の料理の腕は？と大和の表情を注視する。

「……美味しい」

大和は低く呟く。正直に意外だったが口の中に嬉しい衝撃が走っていた。

「初めての料理だったのか？」

大和と同じ危惧を抱いていたのか、彼の感想にアメリカ・ヨーロッパ連合軍

宙艦隊副旗艦、序列二位ゴールドバが大きく目を見開く。

「大和殿はあたし達のことをどう思っていました？ 仮にも仮想人格ですよ。調

理用コンピュータからレシピをダウンロードしてきちんと作ったのです」

アジア連合艦隊の副旗艦。ゴールドバと同じ序列二位の定延は糸の目をさらに

細めると、誇らしそうに大きく胸を張った。

「どうキャサリン。あたし達の腕は。明日のあなた達の料理が楽しみじゃな

い」

飛鳥は勝ち誇った様子でライバルであるキャサリンに視線をやった。

「とりあえず毒は作らなかったようね。ええ明日を楽しみにしていただきます
い」

少しでも怯んだ様子を見せてたまるかと、キャサリンは不敵な笑みで飛鳥を
迎え撃つ。

もっとも意外なライバルの奮戦に内心は不安でいっぱいだ。これで絶対に失
敗は許されなくなったのだ。

「これでは凡庸なできはおろか、少しくらいできがよくても、向こうの後塵を
拝しかねない状況に陥ってしまいました」

先攻のできをみて対応できる以上、後攻はより相手に勝る結果が求められて
しまう。

序列三位、スージーは冷静に彼我の戦況を分析して見せた。

「嫌なことはおっしゃらないでください」

味方の言葉にキャサリンの眉が曇った。せめて引き分けに持ち込めるよう

に、今夜は眠れないかもしれないと思う戦艦娘だった。

「本当に明日は期待しているからね」

飛鳥は明るい笑顔をキャサリンに投げかける。これが相手にどれほどのプレ

ッシャーになるか熟知しつつ。

「もういいから。本当にやめてくれ定延」

「いいではないですか大和殿。どうです、もう一口」

全員の視線が飛鳥とキャサリンに集まっていたさなか、大和の悲鳴じみた叫

び声が食堂内に響く。

みれば二人の対決を避け大和は料理を持って別のテーブルに移動していた。

「どうです大和殿。美味しいでしょう」

そしてその大和の腿に腰をかけ肩に左手を回した定延が、しきりと右手で統

合旗艦殿に料理を勧めていた。

ほとんど言うより、ズバリ酒場の膝乗り姉ちゃんだ。

「重いだろ？あまりお尻を揺らすな」

「そうでしょうか大和殿。あたしそんなに重くないと思うのですが」
「重いぞ、十分。俺の太ももは椅子じゃない」

「確かに椅子にしては大和殿の座り心地は今ひとつ。でもこの堅さに大和様の

逞しさを感じてしまいますわ」

大和の抗議を柔らかく受け流し、定延は蕩ける笑顔でさらに大和に甘える。

「だからそんなに動くなと言っているだろ」

腿に感じる定延の熱と柔らかさ。口はともかくやにさがった大和の顔を見れ

ば、一目で彼がこの状況を楽しんでいるのは明白だ。

「何をしているの定延。そして大和」

飛鳥の瞳が鋭く絡み合う定延と大和を見据える。この裏切り者とその鋭い

瞳が叫んでいた。

「何って。定延が勝手に」

頭にのぼった血が一気に下がり蒼白になる大和だ。

「大和殿が暇そうだったので、あたしがお相手を務めていました

一方の定延は悪びれもせずしなを作ると、ホウツと熱いため息を漏らす。

「何なんですか？これはいったい。まさか私達を引きつけておいて、定延が大

和様を籠絡する手はずだったとか」

目を眇めるとキャサリンは厳しい視線を飛鳥にたたきつけた。

「何を言っているの。あれは定延が勝手に。あたしにだってあんな暴挙を許せ

るわけないでしょ。どうせやるのならあたし自身が」

飛鳥は懸命の弁明を試みようとして、逆に口を滑らせてしまう。

「なるほどね。飛鳥さん自身が大和様の膝で甘えるわけですか？」

不気味な笑いを浮かべると、ついにキャサリンは体に縦線を走らせた。戦闘

態勢を急速に整えていく。

「こっちはやる気はなかったけど、戦いを挑まれて逃げるわけにも
いかない
か」

目の前で繰り出されるキャサリンのクワガタムシ状の角。追い込まれた飛鳥

は対決を決意し、自らの体を戦闘状態に持って行く。

「飛鳥、助太刀をするわ」

「キャサリン戦闘指示を」

扶桑とゴルドバが旗艦の危機に急いで駆け寄る。それをきっかけにして両艦

隊が一気に決戦態勢に入った。

「逃げろ。速く逃げないと命の保証はできないぞ」

大和は周囲の国連軍兵士に撤退勧告を発令した。ここは今から地獄になる。

もう人が立ち入れる場所ではなくなるのだ。

『非常事態発生。食堂にシールドの展開が決定されました。各員は

すぐさまに

脱出を願います』

軍学校の惨事は既に宿舎にも伝えられていた。移動式のシールド発生装置が

青白い光を放ち、各員に避難指令が下されるのだった。

「もう許しませんわ、飛鳥さん。姑息な行いの報い地獄の底で反省しなさい」

言い放つと同時にキャサリンの角の間からビームが発射された。

「こっちこそ冤罪をそのまま受け入れるほどお人好しじゃないわ。こうなった

ら、返り討ちよ。返り討ち」

即座に飛鳥も撃ち返す。食堂は即座に灼熱の炎に包まれる。

「やめてくれ。このままじゃ俺達の居場所はどこにもなくなるぞ」

一瞬で燃え尽きるテーブルと椅子。用意された料理は誰の口にはいることも

なく、あっさりと消し炭と化する。

必死に戦闘の停止を訴える統合旗艦大和。しかし彼の命令を聞く戦闘艦はた

だの一隻もなかった。

「せっかくのお風呂です。今までできなかった入浴の楽しみを存分に堪能しましょう」

「日本のお風呂は深くて熱い。少し苦手です」

宿舎地下にある大浴場付属の脱衣場にキャサリンとゴールドバの話し声が響

く。彼女達はすでに下着姿だった。

「でもずいぶん大きいお風呂場なのですね？」

部屋から持ってきたタオルの内一枚を脱衣籠に目隠しとしてかけながら、

スージーは脱衣場内を見回す。

ここは女風呂だがいくら同性でも下着をもろに見られるのはやはり恥ずかしい。

「楽しみです」「初めてです。こんなに大勢でなんて」

あちこちから姦しく、何人もの娘達の声も響いてくる。彼女達は言うまでも

なく、アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊の戦艦娘達だ。

元々知識としてしか入浴のことは知らないけれど、地域的な習慣としてお風呂

呂は一人ではいるものだと思っていた。

たまたま日本で暮らすことになったが、大勢での入浴も悪くはないなとこの

ごろは思っている白人種戦艦娘達である。

「キャサリン様。こちらをご覧ください」

と、序列が低い戦艦娘の一人が旗艦キャサリンにとある場所、脱衣籠が並

んでいた隅の一角を指さす。

「結構な人数が先に入っているようです。おそらく十数人かと」

「……十数人？」

妙な数の符号にキャサリンが一瞬考え込む。

「なかなか広いお風呂じゃない。それもあたし達の貸し切り」

旗艦の沈黙に他の娘達も静まる。その時だ。脱衣場と浴室を遮る扉から騒々

しい声が響いてきた。

「飛鳥もこうしてみると結構色っぽかったりして」

「扶桑だってなかなかのものよ。でも、やっぱりあたしだってこう肌が桃色に

染まっていればね。この姿なら大和も一撃必殺」

ケラケラと笑うその声はアジア連合艦隊旗艦の戦艦娘飛鳥のもの

だ。

「嫌な巡り合わせもあったものね。正直な話、あの子達と一緒に入浴は勘弁し

てほしいものだわ」

思わず顔を曇らせたキャサリンはおとがいに指を当て考え込んでしまう。

「ならば引き返しますか。今ならまだあの連中も気づいていないと思うのですが」

ゴルドバはキャサリンに目を合わせると撤退の具申をする。

「それは駄目です。確かにあの娘達と一緒に入浴は、私達にとって気持ちのよくない結果に終わる可能性もあります。しかしだからといって私達があの娘達

に背を向けるのなんて絶対にだめです」

……引き下がる。それもあの小生意気な小娘に背を見せて。それは自分のプライドをひどく傷つけるに違いない。

即座にキャサリンはゴルドバの提案を却下した。

「ならば正面から乗り込みましょう。あのような貧弱な小娘。私達の完璧なプ

ロポーシヨンの前では敵ではありません」

いつになくスージーが挑発的な提案を持ち出してきた。基本的に冷静な彼女

だが何度となくの交戦がスージーを攻撃的にしていた。

「そうですね。背を向けるなど論外である以上、真正面から堂々と乗り込むのみです」

キャサリンはスージーにまともに視線を合わせ大きく頷いた。「では参りましょうか。全艦、前進。これより敵を撃破します」

キャサリンはタオルを肩にかけると櫓を飛ばす。通常なら前をタオルで隠し

て浴室にはいるのだが、これは既に戦い。

あえて小娘達に自分の肢体を見せつけてやる覚悟だった。

「全員キャサリン様に続け。これより入浴を行う」

「ようし、あたしのプロポーションも小娘に見せつけてやるわ」

「決戦よ。決戦」

全員が肩にタオルを肩にかけると整列。堂々と浴室に入っていくのだった。

「あらっ。あなた達もお風呂？」

「あなた達も暖まっているようね」

小さめの公衆浴場ほどもある浴室に二組の戦艦娘達が対峙した。

強ばった面持ちの白人種戦艦娘に多少の訝しさを感じたものの、

飛鳥は湯船

から首を伸ばすと、特になんと言うこともなくキャサリン達を迎える。

「なかなかいいお湯です。温泉でないのが少し残念ですが、これはこれで十分に気持ちいいお湯です」

奥に大きな湯船が二つ。両側の壁には鏡やシャワー。ごく普通の
大浴場。

鏡を前に濡れ髪で体中泡まみれの定延が気持ちよさそうに呟く。

「そうみたいね。西洋式のバスタブとは違うけど、これはこれで風情がある

わ」

定延の脇を通るとキャサリンは悠々と湯船に向かう。

「ちょっと。まずかけ湯をしてから湯船に。これはマナーだから」

飛鳥と一緒に湯船につかっていた扶桑はキャサリン達が全く足を止めないの

で、慌てて説明を始めた。

「それから湯船で石けんを使うのも駄目だよ。それが日本式だから」
「わかってるわよ。私達だって初めてここのお風呂にはいるわけじゃないんだから」

キャサリンは軽く手を振ると扶桑に続いて説明を始めた飛鳥の言葉を遮り、
冷たく飛鳥達アジア連合艦隊の戦艦娘を見据えた。

「前も隠さないの。ずいぶん挑発的ね」

タオルを肩にかけ、その姿のまま見下ろすキャサリンに飛鳥の口調も冷たい。
い。

「私達はそちらのような、貧弱お子様体型じゃないから」
大きな胸を見せびらかすように突き出すと、キャサリンは冷たく微笑む。

「確かにお子様はいるけど」

飛鳥は小柄な戦艦娘扶桑にチラッと視線をやる。体も小さいが各部も未発達。

達。特に胸は洗濯板の一言ですませられる憤ましさだ。

「余計なこと言わないでよ。飛鳥だって大きいとはお世辞にもいえないじゃない」
ん」

味方の裏切りに、プンと小鼻をふくらます扶桑。

「まあまあっ。ここは体と心の疲れをとるところなのですから、穏やかに、穏やかに」

「……そうね。私も悪かったわ」

割って入った定延。東洋人にあるまじき結構な胸のふくらみに気圧され、キ

ャサリンは手桶をとるとザバッと体にお風呂の湯をかけた。

「熱っ！何なのよ、この熱湯は」

途端に巻き起こる絶叫。

「何よ、大げさな。食堂で何千度という高温のやり取りしたばかりでしょ？」

冷たくキャサリンをさげすむ飛鳥。確かに戦闘状態では何千度という高熱で

も平気な戦艦娘達だったが、通常時は常人と大差はない。

つまり熱いものは熱いのだ。

「水を入れて。少しさまさないと、とても入れない」

「軟弱ね。あたしなんてこれでも温いくらい。胸ばかり大きくても、肝心の克

己心とかはどうなっているのかしら？」

キャサリンの悲鳴をあっさりと無視。小気味よく鼻を鳴らし、飛鳥は思いつ

きり顔をあさつての方角に向けた。

「何ですって。あなたは江戸っ子親父ですか？」

「おいっ。あまり無理をするなよ。我慢してもいいことはないぞ」

憤激のあまりか？メモリーのどっかからおかしなたとえをだしたキャサリン

の耳に意外な声が届いた。

「大和様」「大和」

飛鳥とキャサリンの声がハモる。

「隣の男子浴室だ。ちよつと騒がしいぞ。風呂くらい仲良く入れよ」
旗艦らしく落ち着いた口調で大和が苦言を呈してくる。

「私は悪くありません。こんなに頼んでいるのに意地悪をしている飛鳥さんが

問題なんです。第一こんな熱湯に平然と入っていること自体が異常なんです」

キャサリンは大和に同情させようと涙混じりに訴える。

「大切なところも丸出しの破廉恥女が何を？最初にこれ見よがしな態度をとっ

て挑発してきたキャサリン達にこそ問題があるんじゃない。そもそもこんな程

度、自制心があれば平気です」

対して飛鳥もキャサリンの軟弱を切って捨てた。

「……全部丸出し」

ポツリと大和が漏らす。

「大和様も立派な男性。どうやら私達の立派な体に興味がありのようです

わ」

思わず大和が黙り込んだのをみて、キャサリンは別の方向から飛鳥に揺さぶ

りをかけてきた。

「何よ。全裸なのはあたし達だって一緒じゃない。だいたいあなた達みんな似

た体型で画一的なのよ。こっちはロリに豊満にバランス型と色とりどり。大和

がみて興奮するのは、絶対にあたし達よ」

ここまでできたら負けられない。扶桑、定延、自分と次々と指さす飛鳥だった。

「何とでもおっしゃい。こうなったら実力で勝負よ」

「実力って男風呂に乱入ってこと？」

どちらに興奮するか大和に選んでもらう？ 過激な提案に驚き、飛鳥はキャサ

リンから一步遠ざかる。

「違うわ。それでは私達が有利すぎ。結局私達に残された道と言ったら、真っ

向からの力勝負だけ。そうじゃない」

言いながらもキャサリンの体に縦線が走る。

「どっちが有利かは知らないけど、それは確かに」

納得し飛鳥も体に縦線を走らせた。第何次目かの艦隊決戦だ。

「待ておまえ達。すでに食堂を破壊した後だぞ。今度やったらさすがに宿舎だ

って追い出されかねん」

不穏な空気に大和があわてた。もはや肩身が狭いなどという状態ではない。

実は先ほどまで浴室には先客がいた。

それが大和が入ったとたんに我先に逃げ出してしまう始末。もはや完全にシ

ヤレになっていない。

「確かにそれは望ましくない事態ですわ」

「ここを追い出されたら寝る場所の確保だって難しいわ」

両者の縦線が消滅する。キャサリンの言葉に飛鳥が頷く珍しい事態だ。

「火力が駄目なら残されたのは腕力勝負ですか？」

「それはあたしも嫌いじゃないな」

ゴルドバの提案に定延が乗った。両者の体格はにている。

向き合う二人。案外と好敵手かもしれない。

「いいですかキャサリン様？」

「少なくともビーム砲を撃ち合うよりは平和的です」

ゴルドバと定延。それぞれの副旗艦は旗艦に視線を向けた。ゴル

ドバは真剣

な、定延はどこか面白がっているような。

「それは単独。それとも乱戦？」

「乱戦の方が面白くない。人数的にも大体釣り合うし」

ジリジリと接近する両陣営の戦艦娘。全員やる気満々だ。キャサリンの問い

に仲間を見た飛鳥が答える。

「じゃあ、そういうことで。ゴーツ！」

「みんな行くよ！」

水しぶきを上げ浴槽から飛び出す戦艦娘。浴槽の中で迎え撃つ戦艦娘。さら

に浴槽に飛び込む戦艦娘。

乱戦が始まった。

「それっ。はやく沈みなさい」

「撃沈するのはあなたよ」

「壊れろ。壊れろ」

浴槽内で組み合う戦艦娘。洗い場で蹴りを放つ戦艦娘。筋肉がきしみ、打撃

が両者の間を行き交う。

全裸のまま大きく股が開かれる。どうせ女の子同士だ。羞恥心は宇宙の彼方に吹き飛んでいた。

凄まじい打撃音が浴室内に響く。実は彼女達は肉弾戦でも馬鹿にできない攻撃力を誇っていた。

質量慣性制御システム。あまり知られてはいないのだが、体内に大型の火器

を内蔵する戦艦娘の体重は優に数十トンを誇る。

それをシステムが調整し、普通の女の子並みの体重に制御していたのだ。

本来は大型化が進みすぎ機動力の低下を招いた戦闘宇宙観の機動力を回復するための機構だったが、使えるものは何でも使ってしまう。

戦いに役立つのなら尚更だ。

「死になさい。飛鳥さん！」

「死ぬのはキャサリン、あんただ！」

戦艦娘達は一瞬だけ制御を緩め百トン単位の打撃を繰り出す。陸軍に制式採用されているロボット兵器だって彼女達の前では無力だろう。

それほどの乱戦が広いとはいえ、所詮は浴室内で繰り広げられたのだ。とて

も無事で済むはずがなかった。

壁にヒビが走り、シャワーノズルが粉碎。浴槽からは大量のお湯が吹き上がる。

「意外にしつこい！」

「そう簡単にはやられません！」

その中で特に激烈な戦いを展開していたのは両艦隊の副旗艦、ゴールドバと定延だ。体格が同格で力量も拮抗していた。

しかも戦艦娘は全員国連軍式格闘術をダウンロードして使用していたので、持っているスキルすら互角。

「しかしこれはこれで結構面白い」

「かも知れませんわね」

洗い場を戦場にした二人の長い手足が鞭のようにしなり鋭い打撃を放つ。

お互いの打撃を流れるような動作で優雅に受け流す。

攻守は瞬時に入れ替わり、戦いの行方は未だ判然とはしない。しかしここは浴室内。

「えっ。何」「もらった」

ゴールドバの足が転がっていた石けんを踏んでしまったのだ。さすが定延の長い足がゴールドバの腹部に突き刺さった。

「くそ畜生！」

踏ん張りが効かず、派手に吹き飛ぶゴールドバ。そのまま男子浴室との壁を突き破り、男風呂に飛び込んでしまう。

「……ゴルドバ、おまえ」

呆然と呟く大和。ゴルドバは吹き飛んだ姿勢のまま大きく股を広げて大和の足下に転がり込んでしまった。

「……見ましたね」

お互いに全裸。見たくもないもの、内心見たくてたまらなかったもの。とも

に丸出しのままのご対面であった。

「……破壊します」

固まった大和、そして両艦隊の戦艦娘達。一人ゴルドバの体に縦線が走りクワガタムシの角状の主砲がゆっくりと突きだし、そして浴室は消し飛んだ。

「やっと今日も終わりか。何というか波瀾万丈な一日だったような」
ゴルドバの暴発の後始末も終わり、飛鳥は大きく口を開けあくびを漏らしていた。

「始末書の提出ですむとは正直思わなかったな」
隣を歩く大和も似たようなものだ。

「しかし酷い言われようですわ」
落ち込んだ様子でキャサリンが呟く。

「おまえ達のような疫病神は即座に追い出したいが、下手に外に出せばどんな

惨劇を引き起こすか。そう考えたらとても追い出せないだからな」
さすがに苦々しく大和もキャサリンに同調する。

「それでもここから出て行かされたら正直困るから。何とか居残れてあたしは
ホッとしているけどね」

「とりあえず新しい部屋につきましたわ。今日はこのまま寝てしま

いまし
う」

キャサリンが大きな両開きのドアの前で足を止めた。ここが大和達の新しい部屋というか隔離所。

元は大倉庫。ここくらいしか全員の収納は難しいに違いない。

これまでは数人で分かれて居室していたのだが、それだとかかなりの部屋数と

それに伴うシールド発生システムが必要とされとても数が足りない。これまではそんな必要性など認識されていなかったが。

シールド発生システムの数が足りないなら、部屋数そのものを減らせばいい。

い。実に合理的な判断ではあった。

「危険物は一括管理が原則だが、下手に集めすぎると臨界量を突破してしま

い、かえって危険という気もするが」

統合艦隊居室。脇に書かれたドアを一瞥し、大和は大きく息をつく。

「学校と宿舎。両方で何カ所もビームで灼いたら、この程度の扱いは仕方ないよ」

あきらめを込めて飛鳥が大きく肩をすくめた。

「それは分かりますが、何でこんなことに。今までは何とかうまく折り合いを

つけてやってきたというのに」

自分で自分が信じられないと言いたげにキャサリンも肩をすくませた。

「人型になって我々の自己抑制は明らかにゆるんでいる。そもそも人型になっ

た原因すら分からない現状では自己管理を徹底するしかないだろう

な。頼むか

ら飛鳥とキャサリン、おまえ達もしっかりと頼むぞ」

「分かっているけど、人型になってなまじ肉体を手に入れ、本当の意味で大和

と結ばれるかもしれないと思うと」

「つつい熱くなってしまうです。それに飛鳥達とのけんかも実は楽しくて、

つい歯止めがきかずにエスカレーションしてしまうのです」

「そうだったの？ 実もあたしも。ドタバタとキャサリン達とやり合うのが本当に」

「だからやめろと言っているだろ。注意している矢先から瞳をキラキラさせる

な。自己管理を徹底させてくれ、頼むから」

「大和殿お帰りなさいませ」

入り口で大和が意気消沈していると、ドアが内側に開き、黒っぽい色合いの

上着にズボン。国連陸上軍の軍服を着用したアジア連合艦隊副旗艦の定延が姿を見せた。

「お帰りなさいませ！」

直立不動で同じく軍服姿。ずらっと居並ぶ戦艦娘、巡洋艦娘、強行偵察艦娘

が一斉に声をそろえる。

「お帰りなさいませ。お疲れ様でした」

アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊副旗艦のゴールドバが静かに頭を下げる。彼女

も又地球連合陸上軍の軍服に身を包んでいた。

「ただいま。何だ、その格好は」

「先ほど使いの者が見えまして規律はまずスタイルからということ

で軍服の着

用を命じていかれました」

「本当なら直接の命令系統にない者の命令は受けたくなかったけど、これまで

の騒動を考えるとさすがに断り切れなくて。大和殿達の軍服も預かっています

から」

大和の問いにゴールドバと定延が答えた。

「一応、私達にサイズが合っているか着用も命じられたので。違っていたら後で取り替えに応じるそうです」

「なるほどこうしてみると少しは軍人らしいか」

正直、なぜ陸軍なのかの疑問は残るが、あまり宇宙軍としての存在を見せた

くないのかも知れないのかと思い、とりあえず大和は我慢することとした。

「一番奥真ん中に大和殿の布団。後は序列に従い艦隊別に布団を敷きました。

これでよろしいでしょうか」

さすがに元は倉庫。板敷きの床はどこか埃っぽい。そんな中にずらりと敷かれた布団。

悲しくなるくらい安っぽい雰囲気だ。

「私としてはベッドがよかったのですが、入りきらないから不許可だそうです」

ゴールドバが少し悲しそうに付け加えてきた。

「いいのじゃないか。こんなものだろう」

大和は鷹揚に頷く。贅沢を言ったらきりがない。

「どう大和。あたし達も着替えてきたわ」

「これは華やかさにかけます。私の好みではありません」

双方の旗艦。飛鳥とキャサリンも陸軍の軍服に着替え、それぞれの感想を述べた。

「大和様もお着替えをどうぞ」

「体に当てればだいたい分かる。こんなものだろう」

黒っぽい軍服に袖を通すまでもなく軍服を受け入れることを決めた大和は、

改めて全戦闘艦娘の顔を見回す。

「仕方がない明日からに備えて今日は寝るか」

「分かりました統合旗艦殿！」

今日はさんざん恥をかいてしまった。こんな様では？明日からの自分達の命

運に思いを寄せる大和の目の前で戦闘艦娘達の着替えが始まる。

「な、何をやっているのだ？」

焦った口調で大和が聞いたです。

「統合旗艦殿が寝ると命じましたから」

「寝るときにパジャマなんかに着替えるのは当然でしょ？」

馬鹿丁寧な口調で言う戦闘艦娘も含め、クスクスと忍び笑いを漏らしながら、

手早く戦闘艦娘たちの着替えは続く。

「だからと言って」

必死になって目を背けながら、なおも焦る大和の顔が赤い。

「どうせお風呂であたしたちの全部を見せちゃたし、今更ね？」

「覗かれるのは嫌ですけど、見せる程度なら平気かなって？」

いざという時の度胸は女の子の方があつた。これだけ人数。数を頼りに大和を

押しまくる戦闘艦娘達だ。

当然の結果だが、それなりに華やかな下着が一斉に咲き乱れ思わず目を閉じ

た大和に、定延が思わぬ決定を伝えてきた。

「それからあの時一緒にお使いの者に言われましたが、通学は一時停止。簡単

に言うとは停学です。理由は分かるだろうと言っていました。尚その間、あたし

達は陸軍に一時入隊させられるそうです」

「な、何だって？ 陸軍に入隊。……しかし、さっきまで俺達は司令部に？」

軍服着用を命じられたときに気づくだろう普通、俺。下着の乱舞は魅力的だが、そんな場合ではない。思わず大和は声を詰まらせた。

「正直に言って停学で済んだのは奇跡でしょう。退学にならなかったのがむしろ不思議です。お礼参りを恐れたのかも知れません」

冷静にゴールドバが評論をする。しかし今日起きたことを見ていれば、艦隊娘

のお礼を怖がるのは当然だろう。

「どうもメインで暴れていた飛鳥やキャサリンには直接伝えたくなかったよう

です。宇宙軍の最高司令部の合意は既にだされたそうですけど」

完全に言葉を失い固まる大和に、定延はさらに明細を伝えてきた。

「……仕方ない。明日に備えて体を休めておくか？」

諦めきった大和は改めて就寝を命ずる。

「大和様。軍の一時入隊ですが後日日程を伝えてくださるようです。準備があ

るので少し時間が必要で、明日から即という訳では」

覚悟を決めた大和に定延が水を差す。しかしもうどうでもいいとばかり大和

は何も言わなかった。

艦隊の面目を失い、迷走を始めたアジア連合艦隊とアメリカ・ヨ

ーロッパ連

合艦隊の統合艦隊。

何はともあれ明日はもうすぐやってくる。

町の中の戦艦

第三章 町の中の戦艦

数日後、国連軍基地のある浮き名市の駅前に一団となった美少女の姿があった。

「うわー！町の中ってこうなっているんだ！」

お上りさん丸出しで国連宇宙軍アジア連合艦隊旗艦序列一位の戦艦娘、飛鳥

が驚嘆の叫びを上げる。彼女は元々が対人インターフェース。生まれてこの

方、所属する戦艦の外に出たことはなかった。

当然町の知識などない。確かにネットから情報を引っ張ってくることはでき

るが、やはり現実はその体で体験しなければ実際のところはわかるはずもない。

「恥ずかしい人ですね。田舎者の具現化ですか？」

飛鳥の狂態に眉をひそめながらもアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊旗艦序列一

位キャサリンも彼女同様、つつい周囲の風景に見とれていた。

ものを知らないのは何も飛鳥だけではない。

「人がいっぱい！それも着ているものが人によって全然違う」

「店ですか？あれが店なのですね」

序列五位の飛鳥や序列二位のゴールドバも目を丸くしていた。この間まではそ

れぞれの艦艇に常駐。人型になってからも軍学校と基地とその宿舎の往復の

み。

「こんな日が来るなんて思ってもみなかった。」

「何をしようか？迷うけどそもそも何ができるかもわからないし？」

一団となった両艦隊所属の戦闘艦娘のほぼ全員が興奮した声を漏らし、視線

は何をみてみようかと周囲を迷いまくっていた。

「確かに珍しいです。でも艦の中にもそれなりに店はあったと思いますが」

ただ一人落ち着いていたのがアジア連合艦隊序列二位、副旗艦の定延。大本

になった娘の人格のせいなのだろう。

実は容姿と性格はお手本となった人がいる。センサーで取り込み各種の方向

性の指標にただけなのだが。

「店と言っても単なる購買部じゃない。こんな色々の品物なんて全然置いてなかったし」

飛鳥が唇をとがらせ定延に抗議。もちろんその間も店から人から周囲の建

物。視線はあちこちに飛びまくっていた。

「はい皆さん。気をつけないと迷子ですよ。はぐれないようにしてください」

ほとんど幼稚園の園児に対する保母さんといってもよい態度でこの集団の中のたった一人の人間、立木ゆかりは懸命にみんなをまとめようと奮戦していた。

本当は停学処分なのだから宿舎で謹慎しているべきなのだろうがあまり押さえつけるような形で暴発するか？

戦艦娘達がたった一人の人間の知り合い立木ゆかりを頼りに外出を申し出

てきたとき、軍上層部は苦渋の決断。

陸軍編入の日時も正式に決まり最後の息抜き。一度だけという条件で外に出

るのを認めたのだった。

「ねえっ。ゆかりさん。あたし達のスタイル変じゃありません？今まで軍服と

か学校の制服とかそんなものばかりしか着たことがないものですか
ら」

心細そうにキャサリンはゆかりに聞く。どこから調達してきたのか、つばの

広い帽子に真っ白な膝丈ワンピース。避暑地のお嬢様か、お前は？
といったく

なる、ある種典型的なスタイルであった。

「綺麗ですよ。皆さん綺麗な方ばかり」

小さく溜息をつきながらゆかりは周囲の戦艦娘達を見渡す。

地味めなあたしじゃ勝負にならない。何を着ても似合うのだろう。

アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊の白人少女達は全員がモデルとい
われても瞬

時に信じられるほどの見目麗しいとしかいようのない美少女。

画一的かもしれないが上品な雰囲気であとめられた彼女達は下手
に近づくの

もはばかられるほどの高貴なオーラを放っていた。

「あたし達も綺麗？男の子が放っておかない？」

対抗心丸出しで活発な雰囲気満載の旗艦序列一位の戦艦飛鳥が聞
く。ブラウ

スにジャケットに短めのキュロットスカート。

悪戯っ子然とした煌めくような笑顔だ。

「あたしはどうですか」「私は似合っているかな？」

次々に聞いてくる他のアジア連合艦隊の娘達は序列二位の戦艦定延のチャイ

ナ服、序列十三位、強行偵察艦娘の若竹のホット・パンツ姿、序列五位、戦艦

扶桑のお嬢様ルックなど統一感など無用と雑多な姿。

声をかけやすいかは微妙だが、目立ちまくっていたのは確かだ。

「本当に皆さん綺麗。逆に綺麗すぎて男の子も近づけないというか？」

ゆかりの声が少し湿る。華やかな集団の脇であたしだけが地味。色鮮やかな

熱帯魚の群れに一匹だけ赤いだけの金魚が混ざっているというか。

実はゆかりとて結構な美少女ではあったのだが、キャサリンや飛鳥達のパワ

ーに完全に圧倒されていた。

「そう口々に質問をぶつけるな。立木さんが困っているじゃないか」

ゆかりの声が沈み気味なのを困惑と誤解し、統合旗艦大和が戦艦艦娘達を遮

るように彼女に声をかけた。

「あっ！いいんです。ちょっと驚いただけ」

端正な顔にまともに対面。ゆかりの鼓動が一気に高鳴る。気になる男の子、

大和がいればこそ戦艦艦娘達の町中案内も引き受けた立木ゆかり。

動悸の解明は間違っていたがゆかり的には完全にクリーンヒット。

「顔が赤いね。熱ある？」

心配そうに大和が聞く。頬を朱に染めたゆかり。これは脈ありか？

実践はまだだが知識だけは豊か。通称むつつりスケベ。膨らむ下心を隠し、

ナンパモードに入る大和だった。

「いいの。大和君が心配してくれただけで」

対して気だけはあるが相手に不自由していたゆかりも現実の男に

一気にお近

づきにと、心を高ぶらせた。

見つめ合う目と目。

「馬鹿をやっているのじゃありません」

「案内役でしょ、あんた。単なる」

大和の肩にキャサリンの、ゆかりの肩に飛鳥の、強い握力を発揮しつつ力強

く二人を引き裂く手が置かれた。

「恥ずかしい。ナンパをまともに目撃してしまった」

「ホテルにしけこむにはまだ日が高いですよ？」

扶桑と定延。ニヤニヤと意味深な目が大和とゆかりに無遠慮に注がれる。嫉

妬混じり。生温かいというのが一番正確だろう眼差しだ。

「人というのはどこまでも自分中心にしか考えられないものなのだな」

「周りが全く見えていない」

ゴルドバとスージーが冷徹に漏らす。こちらの眼差しはまさに南極大陸のブ

リザードそのものだ。

「そんなじゃない！」

「男が誰を選ぶかはその男の自由です。それがあたしだとしても」

キャサリンや飛鳥が怖く誤魔化しに走った大和。対してゆかりは欲しいもの

は欲しいと自分を隠そうとはしない。

「忘れておられるのかもしれませんが、大和様は人間じゃありませんよ？」

「最後には宇宙に帰るってわかってる？」

「いいではないですか、恋は自由。先のことなどどうでも。泣くのも人生で

す。もちろんそれはこのあたし定延ですけど。大和殿とても夜ま

で待てない
というのなら、定延にお任せを。あたしなら日の高いうちのホテルも平気です
からね？」

半高圧的にゆかりに迫るキャサリンと飛鳥。諦めさせるのに必死だ。

しかし定延はそんな二人などものともせずゆかりの大和争奪戦の参加を認め、同時に自分の参戦を表明してみせる。

強かというか底の見えない定延だった。

「それなら扶桑も改めて。大和、あたしを選んでくださいね」

「この私も忘れてもらっては困る」
「まさか大和さんは序列低位の娘を相手にしないとは言いませんよね？」

「差別はいけません。強行偵察艦は確かに非力です。艦隊序列だって低い。」

でも女の子としては同格ですから」

扶桑、ゴルドバ、針葉、エリカ。

「定延だけではなく、このあたし来延も日の高い間の情事もありですから」

両艦隊の戦艦、強行偵察艦。さらにアジア連合艦隊序列八位巡洋艦娘の来

延。

「お、おいっ！ちょっと待ってくれ、俺はまだ何とも」

慌てて制止に走る大和だが女の子達は聞いちゃいない。

「あたしもいつだって大丈夫！」「学校の体育倉庫で待っています」
続々参戦を表明する残りの戦艦艦娘達。頭を抱える大和の目の前、
数を頼り

に乙女達の爆弾発言が次々に飛び出す。

何だ何だと集まる群衆。無数のギャラリーが見守る中、浮き名市

駅前には乙女の戦場と化していた。

「見てみて！あの服とってもかわいい！」

浮き名市駅前メインストリーム。無数の店が軒を連ねる大通りにそぞろ歩

く戦艦娘達の姿があった。

店の一軒のショーウィンド、そこに飾られた洋服に飛鳥が歓喜の声を張り上

げる。極端に丈の短いキャミソールドレス。

薄い草色、ほとんど半透明、着るにはかなりの勇気が必要だろう。

「相変わらず飛鳥さんの趣味は理解できません。男の方全員にショーツ拝見の

機会を与えるつもりですか？」

冷たい声。キャサリンの指摘の通りマネキンに着せられたドレスの丈はぎり

ぎり。少しでも動けば下着が見えてしまうだろう。

「かわいいとは言ったけど着るなんて言っていないでしょ？着るとしたら部屋で

大和の目の前かな？それならあんだって」

悪戯っぽく瞳を煌めかせながら飛鳥はキャサリンに言う。

「破廉恥ですわ。でも落とすためなら」

即座に飛鳥に反論しようとしたキャサリンだがあのキャミソールドレスを着

て大和の前に立つ自分の姿を想像しトーンが低くなる。

「艦隊旗艦だと言っても、あんだだって女の子。男の視線を釘付けにするため

だったら何でもしちゃうでしょ？」

「飛鳥さんもしようけど」

二人の旗艦は顔を見合わせ頬を赤く染めてみるのだった。

「この店は小物にかわいいのが多くてつい買っちゃうんです」

「艦の中にかわいいなんて言葉なかったから興味深いです」

「あたしはかわいい系は少し苦手です。キリッとした雰囲気のもの
がいいので

すが？」

小間物屋の店先。ちょっとした化粧品を手にとって立木ゆかりが
ニコッと笑
う。

軍艦の中、さらに人でもない。今まではお洒落に何の縁もなかつ
た。目を輝
かせアジア連合艦隊序列五位の戦艦、扶桑もゆかりの手の中の化粧
品に見入
る。

隣では僚艦の定延が香水の香りを楽しんでいた。

「……落ち着かないな。男にここの空気は毒だ」

ただ一人の男性。統合旗艦大和は少女の群れの中一人肩身が狭い。
土地勘も

なく、集団行動は艦隊の宿命。

完全な女所帯。本人には不条理だが、必然として大和は普通男が
立ち寄らな

い店にばかりに足を運ばざるを得ない。

駅前にはいた無数のギャラリーはここにはいない。うつとうしいと
感じた数隻

の戦艦娘が主砲を展開、威嚇した時点で全員が逃げ散ってしまった。

学校や軍宿舍での砲雷撃戦。戦艦娘達の破壊行動の凄まじさは多
数の学生や

軍人等を通じて浮き名市内に轟いていた。

「この店には縫いぐるみがいっぱい!」「リボンがリボンが何種類
も!」

針葉、若竹の強行偵察艦コンビ。

本来の年頃から言ってもかわいいものには目がない。性格の中には元の少女の瑞々しい感覚も混ざっていた。そこに何でも徹底的に調べなければ納得できない偵察艦独特の性格がプラス。

今、偵察艦娘の目の前にこれまで縁のなかったかわいいものが無数に転がっ

ている。熱狂してしまうのも当然だ。

「子犬よ！子犬がいる！」「子猫だっているわ！」

ペットショップの店先。押し合いへし合いしながら仲間を呼んでいるゴールド

バとスージのアメリカ・ヨーロッパ連合宇宙艦隊の上位艦。元々のモデルが

貴族階級のお嬢様なのでペットには目がないのだ。

久方ぶりの小動物に我を忘れた二人に、店としては迷惑極まりないところ。

「見て見て、これ面白い」「こんなに試食の種類が！」

程度差はあってもその他の戦闘艦娘だって騒々しさでは引けをとらない。

全員が初めての興奮と体験なのだから、町の人には勘弁してもらうしかないだろう。

「このお店とても綺麗でかわいくてセクシー！」

そのとき戦艦娘の一人が一軒の店を見つけた。それは大型のランジェリーショップ。

「この店で大和様の気を引くための下着を」

「見えないところのお洒落が真のお洒落」

「下着は消耗品。少し買い込んでおかないと」

男のために、美意識のために、そして戦闘艦娘だけの必要性。シ

ールドの媒体として。

迷わず数人が店に足を踏み入れ、全員が後に続いた。何と大和まで含めて。

人の流れは強い。興奮した女の子集団は強い。いくら必死になろうと大和一

人では抵抗は不可能だった。

「俺は後に残る。放せ」

声だけが後に残った。

「なかなか品揃えのいいお店ですね」

その店は小型の商業ビルの一階分をそのまま占めていた。広いフロアに並べ

られた数々のランジェリー類。

ブラにショーツ、キャミソール。その他にもボディースーツやペチコート。

目移りするほどの数々の品物にアメリカ・ヨーロッパ連合宇宙艦隊旗艦序列

一位、戦艦キャサリンも圧倒されていた。どう言い繕おうと所詮は戦艦の中の存在。

口では余裕があるかのごとく言っていたが、これほどの色々の品物が？と内心では舌を巻いていた。

「凄い。艦の中で売っていたのとは種類も数も桁が違う」

アジア連合宇宙艦隊旗艦、艦隊序列一位戦艦飛鳥は口を開いたまままなかなか

閉じられなかった。

目の織細なレースや光沢のある生地など、事実上実用性一辺倒だった艦内

のショップとの違いに声も出ない。

「……何か、場違い？」「……ちよつとね」

旗艦の緊張を感じ取り残りの戦闘艦娘まで物静かになってしまう。
「試着してみる？扶桑？」

その中で平然としていたのは立木ゆかりだ。彼女にとってはいつも入っている普通のショップでしかない。

固まったままの戦闘艦娘達の方がよっぽど不可解だ

「試着してもいいの？」

「試着しないでどうするの？体に合わないランジェリーなんて辛いだけじゃない？」

硬い表情で聞く序列五位の扶桑にゆかりは小さく頷く。

「ならばあたしはこのあたり試着してみようかな。ちよつと試着お願いします
す」

硬い表情の戦艦娘の中で唯一落ち着いていたアジア連合艦隊副旗艦、序列二

位の定延が扶桑に先んじ付近にいた店員に試着室の使用を申し出る。

「ではこちらにどうぞ」

気軽に応じる店員。次の瞬間、

「あたしはこつちとこつちを試着します！」

扶桑が二、三着ランジェリー引っ掴むと、勝手に試着室に飛び込んでいく。

考えてみると軍事機密の固まりである戦闘艦娘の外出のチャンスは多くはない。

い。もしかしたら今回が最後かもしれない。

「私はこちらをお願いしたい」「でしたら私はこちらで」
それを見ていたゴールドバとスージーが素早く後にく。

「そうか。ゆっくりとしていたら」「後がなくなってしまうかも？」

試着室は次々とうまっっていく。針葉と若竹も気付く。今回を逃したらお洒落な下着とは二度と縁がなくなるかもしれない。第一なぜ人型になったのかも未だ判然としない。理由がわからない以上いつまた戦闘艦に戻ってもおかしくない。

そうなら最後だ。この先何年待とうと絶対に外出などできなくなってしまう。

というより戦艦にお洒落な下着など無用の長物。ホログラフィー。実体のない対人インターフェイスにも同様だ。

「ここで買っておかないと一生の後悔になるかもしれません」

「二度と高級な下着は着られなくなる。せめて肌触りを知る最後のチャン
ス？」

キャサリンと飛鳥が気付いたときには完全に後手に回っていた。
いくら旗艦
でもこんな時に優先順位など存在しないだろう。

ごり押しは無理だし、可能だとしても後の信用は完全に失われる。
とても実行はできない。

「次はあたしだからね」「順番はちゃんと守ってよ」

すべての試着室に戦闘艦娘が群がっていた。大きいショップだけに十カ所も

試着室があったが全員が手に持てるだけのランジェリーを持っているので、試

着に時間がどれほどかかるか全くわからない。

「このまま閉店時間になりましたら？」「困るわよ、そんなの！」
キャサリンと飛鳥も困惑しつつ手近な棚からサイズの合いそうな

のを選ん

で、行列の最後尾につく。

「早くしなさいよ!」「まだ半分も試着してないのにでられるはずがないでしょ?

よ?」

あちらこちらで言い争いが起きていた。

「あらっ、もしかしてこれは?」

と、飛鳥は店内に自分達と店員しかいないことに気付く。

「すいませんが、この店内私達しかいないようですが?」

同時にキャサリンも同じことに気付いたらしく店員に尋ねていた。

「いえ、なんだか今までいた方達、急用ができたらしく」

……下手にいて戦いに巻き込まれないためという急用でね。できればあたし

らも逃げ出したい。店員なんかなるものじゃないわ。

内心に猫の大群をまといながら店員はにこやかに答える。

「ならばこのショップ私達の貸し切りにしてくれませんか?店の扉もシャッター

ーも全部閉めて。皆さんたくさん買おうと思いますから」

キャサリンはさすがのように店員を見る。

「そうですね。店長に聞いてきますが、おそらく大丈夫だと思います」

……誰だつてあえて危険地帯には近づかないでしょうから。

大きく頷くと店員は店の奥に消え、すぐに戻ってきた。

「構わないそうです。その代わりたくさんのお買い上げを期待しています」

言うと店員は扉に鍵をかけ、壁のスイッチを操作。すべてのシャッターがお

り店内は完全に外界から閉ざされた。

「皆さんここには私達しかいません。外からの視線も一切ありません。これか

らは店内すべてが試着室です」

高らかにキャサリンは宣言をした。奇策。試着室が足りないなら試着室の必

要性そのものをなくせばいい作戦だ。

「やりましたね、キャサリン。さすがにリーダーです!」

「有り難う、キャサリンさん。これでゆっくり試着ができます」

ゴールドバと扶桑が全裸で試着室から飛び出しキャサリンを誉めそやす

「店のもの全部試着しようよ」「それは面白い考えじゃないの」針葉と若竹も試着室から出てくる。

「みんな頑張って店の売り上げに貢献しようよ」

「というより着たいものをこの際だから全部着よう」

全員が試着室から出て来て、手当たり次第に店内各所で自由に試着を始める。

「このショーツかわいい」「このキャミソールは透け具合が絶妙」全裸が店内にあふれていた。

「皆さんこれこれ。向こうにちよつとしたパーティションがあつて色々と激し

いランジェリーが置いてありました」

店の隅を漁っていた定延が妖艶な笑みを見せながら店内中央に歩み出て

くる。身に纏った紫色のそのランジェリーは完全に透け股間の陰りまで丸見え状態だ。

「そうと聞いたらさっそく調べなきゃ」「偵察艦の使命だよね」

「私も行きます」

さっそく好奇心こそ命の強行偵察艦の本領を発揮し、アメリカ・ヨーロッパ

連合宇宙艦隊所属の三人。

序列十三位のエリカ、序列十四位のクールベ、序列十五位のローレヌは定延

の出てきたパーティションに急行、着いた途端に激しい嬌声を周囲に響かせた。

「やだ、ここ。アダルトコーナーって書いてある！」

「十八歳以下はご遠慮くださいだって！」

さらに嬌声は続く。

「これって凄い過激！でも着ちゃう」「こっちはエロ過ぎ！エリカ、これを着てみて」

「これですか？凄いですね」

クールベとローレヌそしてエリカの問答が残りの戦艦娘の耳に届く。

「ではお披露目しちゃいます」「この過激ファッション、目にも見よ！」

パーティションから転がるようにクールベとローレヌが出てきた。

「何よそれ？」「全裸よりもエロいじゃん！」

二人とも紐に小さな半透明の三角布を付け、肝腎な所だけは隠した気分にな

れ、しかし実は丸見えの過激下着だ。

「エリカもおいでよ」「全員がお披露目しなくちゃ！」

「……あたしはこちらです」

躊躇しつつ少し間をおいて続いて出てきたというかクールベとローレヌに呼

びつけられたのはアメリカ・ヨーロッパ連合宇宙艦隊序列十三位。

強行偵察艦娘エリカだ。

大人しい性格なので序列の低い二人の押しつけに抵抗できなかったのだろ

う、そのランジェリーは紐しかなかった。

前も胸も事実上丸見え。正直、下着と言うより冗談グッズの類だ。
「おっかしー！何よ、それ？」「破廉恥過ぎ！」

ケラケラと笑う戦闘艦娘が数人。もっともそういう彼女達自身も既にアダル

トコーナーに乗り込んだのだろう前が開閉し、陰りが丸出しのランジエリー姿や
もっと過激な下着姿なのでエリカも苦笑するしかない。

男の視線が一切ない時のみに発揮される完璧な女子校乗り。そしてそれは完全
に間違っていた。

「みんな揃って馬鹿ばかり。戦艦娘なんてと構えていたけど結局は同じ女の子か。でもこうしてみると同じ女の子お嬢さんといっても胸も下も全然違う。」

あなたもそう思いませんか」

立木ゆかりは店の片隅に立ち、中央で繰り広げられていた馬鹿騒ぎをケラケラと笑いながら見ていた。

脇にはカーテンの膨らみ。下着姿だが外とはシャッターで区切られているので、恥ずかしさはない。

それなのに隠れているなんてよほど内気な女の子？自分も内気だけれどと思いながらカーテンを掴んでいた手を引っ張ってみる。

……何この大きな手？まるで男の子？

「し、失礼します。駄目？」

大和が転がり出てきた。

「……！」

完全に固まるゆかり。下着姿を見られたと言うよりも今も目の前にいるまま

だ。

驚きが過ぎると声も出てこない。

ゆかりが思うに不可解な膨らみだった。妙に高さが低かった。

目立たないように腰を屈めていたのだろう。だから膝に力が入らなくなり、

この状態につながった。

「その気はなかったんだ。みんなに店内に押し込まれて。出て行けばよかった

んだが姿をみられること自体が恥ずかしくて」

必死に大和は弁明を続ける。

「隠れていたらそのうちシャッターが閉まって完全に外に出られなくなってる」

何度も頭を下げる大和に次第に戦闘艦娘が集まってきた。

「みんなが全裸になって、妙な下着を着けた変なショーまで始まってる」

誰も一言も発しない。沈黙が支配する店内に大和の弁解だけが流れる。

「余計出るにでられなくなって、閉店したらこっそり抜け出そうと」
全裸の娘。スケスケ下着の娘。ごく普通のランジェリー。お洒落な下着。ど

ちらにしろまともに服を着ている娘はいなかった。

たと思着たいと思ってもこの混乱状態では、自分の脱いだ服の位置を把握し

ている娘などいなかった。

「あたしだけだったならそれこそランジェリー姿どころか、体の奥深くまで見ら

れてもよかったんですけど。ほかの皆さんはそうは行かないようで。それで大

和殿。この激しいランジェリーどう思います？」

定延がいつそ優しいと言っているいい穏やかな声を出す。

「その過激だと思いました」

何度も頭を下げ続ける大和。

「完全にあたし達の体、御覧になっていたようですわね。本当にま
ずいと思っ

たら、なぜ目を閉じておかなかったんですか？」

穏やかに言うキャサリンの体に縦線が走った。

「壁に向かってこちらを見ていなければ情状酌量の余地もあったの
に、残念」

飛鳥の体から禍々しいクワガタの角が突き出す。

「手の空いている娘でいいけどゆかりさんを守ってあげて。ゆかり
さん、後ろ

に行ってもらいましょ。これから先は女の子は見ない方がいいわ。

……とても

恐ろしい惨劇が始まるのだから」

そして飛鳥の宣言通りのことが起こった。

「時間が余ってしまったわ」

「まだ日が高いし、とても宿舎に帰る気になれないね」

小さな公園。芝生に腰を下ろしたキャサリンがつまらなさそうに
呟く。珍し

いことに飛鳥も同調する。

二人の元気はない。何か重いものを飲み込んだかのような表情だ。
思ったよりもランジェリーショップでの買い物の時間は短かった。
有り体に

言えば追い出されてしまった。

「たまにはゆっくりするのも結構な時間の過ごし方とは思いますが
ど」

「パワーも使ったし。……それも結構精妙な使い方が必要だったし」
飛鳥の対面の芝生に同じく腰を下ろした二人。定延が細い目をさ
らに細く

し、気疲れしたらしい扶桑が軽く自分の肩をたたく。

仕方がないだろう。狭い室内で大出力の光学兵器が使用されたのだ。全員で

シールドを展開し被害の軽減を図ったのだが今ひとつ力不足。

結局は店の品物の半分が燃えてしまった。店そのものが焼失しなかったのが

唯一、救いといえば救いだ。

それでも店の怒りは大きく、戦闘艦娘の手持ちだけでは足りなかったので、

軍そのものにツケを回し店内すべてのランジェリーを購入し、手打ちは何とか

済ました。

「このランジェリー、いい布を使っていますね」

「裁縫だって丁寧」

「こっちはレースの使い方が素敵」

少し離れて五人の娘が車座。両艦隊の強行偵察艦娘。エリカ、針葉、若竹、

クールベそしてローレヌだ。

観察力と好奇心が強行偵察艦の命綱。

全員が両側に大きな紙袋を置き、その中に入っていた大量のランジェリーを

地面一杯に広げ嬉しそうに下着評論会の真っ最中だ。

買い込んだというか、買い込まされたランジェリー類は大きな段ボール箱で数十個。

さすがに全員で持っても持ちきれないので、特に気に入った品物以外は直接

軍の寄宿舍に送ってもらった。

寄宿舍に帰れば間違いなく叱責を受け始末書の提出も要求されるだろうが、

今そんなことを考えても仕方がない。

それはほかの戦闘艦娘も同様だったようで、

「それって紐下着！ あんた過激なのが好きなんだ」

「よほどしっかりとムダ毛の始末しないと、そんなの着られないよ」

「余計なお世話！」

こちらでも強行偵察艦娘同様、買い込まされた色とりどりの下着類を地面で御

開陳。あちこちで姦しく騒ぎまくっていたのだ。

結局は色々のランジェリーが着られることになったわけで、キャサリンや飛

鳥のように直接上層部に叱られるだろう娘を除いて、戦闘艦娘達の機嫌は決して悪くはなかった。

「しかし今回こそ本当に壊されるかと思った」

戦闘艦娘達とは少し離れ、大和は立木ゆかりと一緒に座り込んでいた。小さく

く溜息を吐き大和は空を見上げる

「……あいつらは容赦がなさ過ぎると思わない？ 見たのは確かに俺が悪かったけどさ」

疲れた面持ちで大和は心配そうなゆかりの顔を見る。不満そう唇が尖っていた。

大和の服は焦げ、体のあちこちに傷が残っていた。顔に真っ黒な煤が付き、

髪の毛も乱れまくり、まるでコントの登場人物だ。

「確かに大和さんは不運ですね。間が悪かったんですよ」

小さく忍び笑うとゆかりはちょんちょんと大和の頬に付いた煤をはらう。

「私が事前に知っていたら、絶対、あの娘達には黙っていてあげた

と思います

す。あのときはいきなりだったから、凄く驚いちゃって」

済まなさそうにゆかりは頭を下げる。

「じゃあっ。一度二人で会ってみない？」

ゆかりの言葉に大和はいきよりの爆弾発言をかました。

「……はいっ？何なんですか、一体？」

一瞬の沈黙。次の瞬間ゆかりは大きく目を見開く。

「い、嫌。そんなことではなく、またこんなことがあった場合の合図とか」

自分の中でも、俺はなぜこんな唐突なこと言ってしまったのかと驚きつつ、

大和はしどろもどろ何とか言葉を続けていく。

立木ゆかりに優しく頬の煤をとってもらった途端、カッと頭に血が上り、反

射的に言葉が出てしまった。

知識はあっても所詮は知識だけ。実際のスキルが不足していた男の悲劇だった。

「……変な大和さん？」

訳がわからないがやたらじたばたと手足を振り回す大和にゆかりに好意を持

った。これでうまく話を作ってきたら、逆に不信感を持ってしまうたかもしれない。

……大和さん、女の子に囲まれて自分では女のあしらいがうまくつもりかも

知らないけど、結局ウブなんじゃない

「いいですよ、一度くらいなら二人で会っても」

余裕を持ってクスクスと笑いを漏らすゆかりだった。

軍の中の戦艦

第四章 軍の中の戦艦

「第一集団、第一分隊、集合しました」

「第一集団、第二分隊、集合しました」

「第二集団、第一分隊、集合しました」

「第二集団、第二分隊、集合しました」

青空の下、四人の戦艦娘の声が次々に申告していく。

アジア連合艦隊旗艦飛鳥、副旗艦定延、そしてアメリカ・ヨーロッパ連合艦

隊旗艦キャサリン、副旗艦ゴルドバの計四人である。

真剣な表情の飛鳥達の後ろにも、それぞれ複数の戦艦娘達が従っていた。

両艦隊はほぼ同編成で戦艦が五隻、巡洋艦が七隻そして強行偵察艦がそれぞれ

二隻と三隻所属。

多少アメリカ・ヨーロッパ艦隊の方が多く、計十四隻と十五隻からなる。

各艦隊。序列順に奇数偶数で二編成。計四編成。戦場では非常に重要な意味

を持つ序列だが、ここまで変化をってしまったのでは、さすがに有名無実。

せいぜいが食事当番の目安。艦隊序列、久し振りの有効活用だった。

人数は各分隊七人、七人、八人、七人の合計二十九人。

「諸君らは非常に特異な事情で入隊してもらった。いつまでこの状態が続くか

不明だが、現状でがんばってもらいたい」

初老の基地司令が重々しく頷く。場所は国連軍浮き名基地中央ゲートの近

く。大駐車場の一角だ。

「第一集団、第一分隊。通称飛鳥分隊はこちらに。これより市街パトロールに
でる」

「第一集団、第二分隊、通称定延分隊はこちらに。これより疑似市街地での戦

闘訓練を行う」

「第二集団、第一分隊、通称キャサリン分隊はこちらに。これより基地内のパトロールにでる」

「第二集団、第二分隊、通称子ゴールドバ分隊はこちらに。これより基地内にて各種特殊車両運転訓練をしてもらう」

基地司令の言葉を受けいかにもなの大柄で厳つい軍曹が四人、控えていた司令官の後ろから一歩進み出てきた。

「総員、前に！」

太い声が四重に響く。

「全員、前進開始！」

戦艦娘達の足音が青空の下に響いた。一斉に動いた娘達は分隊ごとに四本の筋となって分かれていく。

戦艦娘達の陸軍最初の日が始まろうとしていた。

「どうかな。浮き名市は？」

指導教官のライス軍曹の質問が第一集団第一分隊分隊長である飛鳥の耳に届く。少し自慢たらしくもあった。

「いろいろと変化があつて面白いです。どうこう言っても艦内とは違いますか
ら」

大型の軍用車両。広い車内にうきうきした声音の飛鳥の声が響く。
屋根のな
い車内に涼しい風が通っていく。

国連軍アジア連合艦隊序列一位の旗艦飛鳥の黒髪は後ろに流さ
れ、いかに
も気持ちよさそうに戦艦娘はため息をつく。

「結構大きな市ですから、浮き名市も」
満足そうな指導教官。飛鳥も含めて戦艦娘が市街に出るのはこれ
で二度目。

軍事機密など色々あつて一回だけを除いて、これまでは学校と宿舎
の往復に終
始していた。

それ以前は戦艦のインターフェイス。当然艦外にでたことなどな
い。

「艦の中に緑などありませんから、正直、珍しいです」
初めての経験に飛鳥の胸は高鳴っていた。

六輪のタイヤに支えられた車内は広く、三列の座席には真ん中に
戦艦飛鳥と
指導教官のライス軍曹。

前列の運転席に運転手役の若い兵士、助手席に序列十三位の強行
偵察艦若

竹。後列に序列五位、戦艦扶桑と序列九位巡洋艦那智。
合計六人が座っていた。

後ろにもう一台一回り小さい車両が続き、序列三位の戦艦ランヴ
イ七位巡洋
艦ジョティ十一位巡洋艦ランジット、そして運転手役の兵士の計四
人が乗って

いる。

「さすがに人が多いわ」

「それも見知らない人ばかり」

「船に乗っているメンツはどうしても固定されちゃうから」

気持ちとは同じなのだろう。騒がしい声が後ろの車両から聞こえていた。指導

教官などの煙たい人間が乗っていないからか、遠慮会釈がない。

この時代でも普通の車両はタイヤ式が主流だ。エネルギーの効率や整備が容

易な点など優位性は今でも失われていないからだ。

エアカーなどの半飛行式と違って、窓を開けての走行が容易な点も好印象

だ。開放感が違う。

「本当に緑の香りが強い。気持ちがいい」

「何なら中央公園にでも行ってみるか。この市で一番緑が濃いいし、買い物など

にも便利なんだが」

目を細める飛鳥にライス軍曹が聞いた。

「いいんですか、本当に？」

「構わないよ、初日だし。町を見たり人と接するのも、君達にはいい体験だろうから」

「それは楽しみです」

「知りたいことを全部調べちゃいましょう」

ライス軍曹の言葉に扶桑と若竹が素早く反応した。特に若竹は偵察艦だけに

好奇心旺盛らしく実に嬉しそうだ。

「では進路の変更をします。」

「大きなビルがいっぱいですね」

運転手がハンドルを切ると、前方に威圧感すら感じる周囲より一

段高い高層

ビル群が重なるようにそびえ立っているのに飛鳥は気づいた。

「中央公園を周りを取り巻くように建てられている。あそこは大きな集会や重

要な会談が開かれることも多いから。人が覗きやすいように、それにいざとい

う時には周りを固めやすくする役目も持たせてある」

ビルの陰を回り込むように車両は進んでいく。複数のビルの間を回り込みな

がら二台の車両は進む。

「だから道もまっすぐにしてないのかな？」

テロリストに警戒し、車による突入を防ぐためだろうと飛鳥は思った。ビル

群が邪魔をし、これなら空からの進入も難しいだろう。

次第に国連主導による政治が進行してはいるが、反抗する国家もまだ多い。

大きい国は国連に強い影響力を持っているが、弱小国家の意見は無視されることも多い。

国家独自の権利が抑圧されつつあるのに、国連に対する意見も通らないとなれば、国としての立場が危うくなってしまう。

国家をまとめるはずの国連の立場が強まれば、逆にテロの脅威も増してしま

う。強い国しか参加できない宇宙と違って、地上の統一はまだまだで

きそうにな

い。皮肉な話ではあった。

「ここが中央公園だ。今日は存分に楽しんでくれ」

車が止まった。広大さすら感じる森。直径が一・五キロほどある

森の中に何

カ所かの大会議場やコンベンション・ホールが点在している。

「すごい広さ」

「下手をしたら大人でも迷いそう」

「それに散策している人の数も多い」

さすがに驚き、飛鳥達も開いた口が閉まらない。

「周囲のビルにいろいろなショップやレストランが入っている。見て回るだけ

でも面白いと思うが」

「とは言っても、オシャレなショップに軍服では？」

「正直、ゾツとしません」

「それ以前にあまり手持ちがありません」

ライス軍曹の言葉に一瞬目を輝かせた戦艦娘達だったが、こんな大きなビル

に入っているショップだ。

それなり的高级店だろう。現実を思い出すと、一気に興奮が冷めた。

実際この間の騒動による借金まであるのだ。

「我々はイレギュラーだが、この公園は常に軍のパトロールが見回っている。

森の中には警備の軍人相手主体の店もあるし。中にはなかなか面白い店もある

ぞ。そこなら後払いでも買い物ができるし」

落ち込む娘達にライス軍曹は懸命の持ち上げをはかった。かれとて軍宿舎の

惨劇は知っていた。

戦艦娘には明るく笑っていられた方が、まさかの事態が起こる可能性が低

い。それ以前に見目麗しい娘達の落ち込む姿は正直見たくなかった。「何かおみやげでも買って行って、大和様に渡すのもいいかしら？」

「今度の休日に大和様を連れてきてもいいかも？」

「ここで下調べをしておいたら大和様を退屈させずにすみませよ」
次第に戦艦娘達の興奮が復活してきた。

「外に出ているあたし達はすでに有利。基地の中ではどうしたって
おみやげ

も、そのデートの下調べも絶対に無理だから！……でも？」

飛鳥は顔を輝かせ一瞬、自らの勝利を確信した。しかしすぐに伏
兵の存在を
思い出してしまう。

大和と立木ゆかりが会う約束していた。相手はただの人間だから
たぶん釣り
合いはとれないだろう。

大丈夫とは思うが油断はできない。

「そうと決まったら、すぐにでも中に入ってみましょう？」

「探検の開始です」

飛鳥の気持ちに斟酌することなく、若竹が目を光らせ、今すぐに
でも先陣を

切ろうと一歩踏み出す。

「軍曹はついてこなくていいのですか？」

飛鳥が気づくとライス軍曹はその場を動いていなかった。

「この公園にいるのがはっきりしているのなら私がついて行かなく
てもいいだ

ろう。ゆっくりとパトロールしてくるといい」

飛鳥達には言っていないが、指導方針は各指導教官の采配に委
ねられてい

た。そしてライス軍曹の方針はストレスの発散だ。

知らないとは恐ろしいことで、初めての環境によるストレスによ
って飛鳥達

の暴走が引き起こされている、とライスは考えていた。

実際には単なる男の争奪戦だったのだが。

「わかりました。飛鳥分隊ただいまより中央公園のパトロールに移ります」

とりあえず煙たい指導教官がついてこないのなら飛鳥に異存はない。軍曹に

敬礼をすると仲間に向き直る。

「総員に告ぐ。ただいまより公園の散策に移る。偵察艦若竹が先行。残りはあ

たしを中心に隊列を編成。移動開始」

飛鳥の号令が飛ぶ。全員が森に入っていく。

「中央公園ガイドマップをダウンロード。店の位置を確認。迷うといけませ

ん。総員あたしに続いてください」

高らかに若竹が叫ぶ。

「店ってどんなのかな？」

「軍人ならツケが効く店なんだから、高望みすると失望するよ」

「それより森の一角に開けた空き地で座りやすそうところとか、大和様とゆ

っくりできそうなところを探した方がいいと思うけど」

だが誰も若竹の言葉など聞いてはいない。口々にかしましく騒ぎ立てながら

きよろきよろ辺りを見回すのに夢中だった。

「あっちの方アベックが多そう。ついて行ってみようか」

「まず買い物を済ませてから。店が閉まったらおみやげを大和様に届けられな

いわ」

「何かお腹に入れませんか？少し落ち着いた方が」

完全な烏合の衆。隊列など一瞬で崩れ、戦艦娘達はてんで勝手な方向を目指

していた。

「どうする飛鳥？みんな気持ちがバラバラだけど。分かれた方が効

率的に動けるかもしれないし、ばらけてしまう?」

すっかり浮かれ気分仲間を見て、小柄な戦艦娘の扶桑が決断を求め飛鳥を見上げた。

「確かに常にリンクしている以上ばらけても問題はないし、効率的かもしれないかも」

いけど、今はこのまま一緒に動きたい気持ちが強い感じかな?」

「……なぜ?」

「楽しいから。こうやって統制も何もなく、ごちゃごちゃで行動するのが外出

の醍醐味じゃない?」

「確かにそうかも」

飛鳥の言葉に納得し扶桑は明るく笑う。

「みんな店はこっちだよ。迷わないでついてきてください」

若竹が何度目かの声を張り上げた。元になった娘の記憶がよみがえったの

か、緑の中でなぜか懐かしそうな雰囲気だ。

「あっちのアベックが森の奥に行くよ」

「昼間なんだから、ついに行っても仕方がないじゃない?」

「あたし等は覗き魔か?」

「違うって。落ち着ける場所があるかもしれないじゃない」

口々にやかましく騒ぎながらも一同は若竹の後を追っていく。

「木の匂いに花の匂い。目に優しい緑。こうしてみると艦の中はやっぱり殺風景

景なんだと心底から感じるね」

飛鳥も一緒に移動しながら心休まる心持ちを味わっていた。

「本当に広いし」

扶桑も仲間とそろそろ連れ立って歩きながら強い開放感を感じていた。

飛鳥も扶桑もほぼ同型艦だ。全長は五百メートルほど。一見広そうだが艦の内部はぎっしりとエンジンや機材が詰まっている。

通路は数人が並んで歩ける程度。乗組員も多いため、正直な話、かなり狭苦い。

扶桑自身はホログラフィなので本来問題はないのだが、それでも前から人が来れば、思わず気を遣ってしまう。

「お店を発見しました。早速入りましょう」

引率係と化した若竹が手をバタバタと振って前方を指し示す。

「案外と綺麗な感じ」

目の前のお店は結構大きく周囲がガラス製。煌めく光に飛鳥が目を細めた。

「喫茶店でしょうか。周りに座りやすそうなベンチもあるし、居心地は良さそうです」

嬉しそうに戦艦娘の一人が目を輝かせた。

「ここなら大和一緒に休むのに最適な感じ」

同調し飛鳥も声を弾ませる。

「お前達、ここで何をやっている？」

と、店の裏から自動小銃を持った十数人の男が姿を現した。国連陸軍の軍服

だ。男達は飛鳥達の姿に一瞬驚きの色を浮かべた。

「女兵士、何者だ？ 国連軍の者か。今日の中央公園のパトロールは我々の管轄

のはずだが？」

長い髪に美しい顔立ち。地味な軍服に包まれながらも衰えない飛鳥達のその美しさにさらに驚きの色を深めながら、男の一人が誰何の声を発し

た。

「今日付で国連軍浮き名基地に配属されました者です。今日は特別に公園パト

ロールを命じられました」

素早く表情を改め飛鳥は敬礼の姿勢をとった。

「よろしく願います」

残りの戦艦娘も一斉に居住まいを正す。

「浮き名基地所属第十二パトロール分隊の者だ。こちらこそよろしく」

男達も銃を片手に敬礼を返してきた。

「今日付というと例の艦隊娘か？今のところは異常は何もない。特に行事の予

定もないから安心していいだろう。君達も気楽にやってくれ」

隊長と思われる男は飛鳥達にそう言い残すと残りの兵士達に視線を向けた。

「……」

艦隊娘と言い捨てられ飛鳥達はカチンときたのだが、男は何も感じていな

いらしく、平然と部下に命令を下す。

「それではパトロールを続ける。全員ついてこい」

「了解です、分隊長殿」

「パトロールお疲れ様です。我々もがんばりますから」

そのまま男達は一団となって木の陰に消えていく。飛鳥達は見送るしかない。

い。

「安心という割にやけに緊張しているようにも見えましたが？」

訝しげに序列三位の戦艦娘ランヴィが飛鳥に声をかけてきた。

「どうせあたし達の悪評を聞いて、もしかして直接見るなりしてるんじゃない？」

い？」

飛鳥が何かを言う前に序列五位の扶桑が割り込んできた。

「……確かに宿舎では危うく人死にがでるところでしたから」

扶桑の言葉が腑に落ちたらしくランヴィは大きく頷く。

「とにかく早く休もうよ。ちよつと疲れちゃった」

飛鳥のがんばるといふ言葉が聞こえなかったのか、序列十三位の若竹は平気

な顔で森の中の喫茶店に入っていく。

「自分だけずるいじゃないの」

「分隊の行動は全員一緒でしょ」

扶桑の後に数人が続く。

「一時小休止をとります。一時間後に再度パトロールに移りますから」

扶桑の後には続かなかったものの恨めしそうな表情になる戦艦娘達に飛鳥は

仕方なく休憩を命じた。ここで休まなかったらまともに自分の後に付いてこな

いのではと飛鳥も考えざるを得なかった。

それほど娘達の表情は迫力に満ちていたのだ。

「休憩、休憩」

「あたし甘いものを頼もうかな」

「この前の時はゴチャゴチャしていて無理だったけど、パフェを一度は食べて

みたかったんだ」

騒がしく話しながら戦艦娘の一団は喫茶店の中に吸い込まれていたのだっ

た。

「第一集団、第二分隊整列」

指導教官であるモス軍曹の声が響く。ここは国連軍浮き名基地内に作られた

戦闘訓練用疑似市街地。

全部で十棟ほどのビルと一般家屋。市街地が一ブロックまるまる再現されていた。

「全員整列しました。指導教官殿に敬礼」

教官であるモス軍曹の前に事前に渡された自動小銃を構えた七人の戦艦娘達。

一番前に国連宇宙軍アジア連合艦隊序列二位の副旗艦定延、その後ろに二列縦隊で同四位戦艦愛宕、同六位巡洋艦夏、同八位巡洋艦来延、同十位巡洋艦海龍、同十二位巡洋艦海情、同十四位強行偵察艦針葉、計七人が並んでいた。

「よろしい。これより市街戦訓練を行う。訓練内容は前方市街に敵を摸した標

的が一体約五秒間出現するから、第二分隊はこれを撃破するように。なお無関係の市民も出現するからこれを撃てば減点とする。以上だが質問はないか？」

モス軍曹は定延達を見渡すと険しい表情を作った。

「合否判定がありましたらお教えください」

「どうやら定延達をしごこうと目論んでいるらしく厳しい面持ちを崩さない軍

曹に、定延が臆することなく質問をぶつけた。

「まず時間は五分。出現する敵数は教えられない。減点分を引いて撃破数二十

体で合格とする。以上だ。では訓練開始」

「針葉サーチ開始。第一級戦闘態勢。全員リンクを強化せよ」

モス軍曹の号令とともに第二分隊は散開。銃を構え標的の出現を

待つ。

「右、左、右、右、左！」

針葉が素早く呟く。その瞬間、戦艦娘達の銃が閃光を放つ。

「左ダミー、右、左、左ダミー！」

針葉のセンサーには標的の出現場所とタイミング。さらに敵とそれ以外も全

て判断可能らしく、言われるまま戦艦娘達は標的を撃破していく。

それも敵の出現場所により対応する戦艦娘も事前に決められているらしく――

発の無駄撃ちもなく、戦艦娘達は敵標的を完全撃破してしまった。

「敵標的二十五体を撃破しました。教官殿ご確認を」

敵それも民間人に偽装した敵にすら一切惑わされずに完全撃破。

幾分誇らし

そうに定延はモス軍曹に申告した。

「こ、これは凄いな」

モス軍曹にはそれしか言えなかった。

「針葉のセンサーは本来五千キロほど離れた敵艦の武装や装甲でも識別できる

ように作られています。我々の武装はその情報に基づき約千キロでの誤差プラ

ス、マイナス二メートルの精度を持たされています。今はかなり制限付きです

が、それでもこの銃の精度や弾のばらつき程度なら何とかカバーが可能でした」

定延の言葉は自慢ではなく単なる確認だった。

「何だと。よくもそれだけの大言壮語を」

しかしモス軍曹はそうと取らなかつたらしく、改めて標的を全部だし再確認を行う。

「……全ての標的の顔面が撃ち抜かれている？」

「頭部や胸部はヘルメットや防弾ベストに守られている可能性があるかもしれませんが」

呆然と呟くモス軍曹に定延は平然と答える。

「なるほど。どうやら私は君達を新兵と思っていたが、実はそうではなかった

らしい。最精鋭の部隊を持ってきたもこれだけの成果は出せないだろう」

「これで我々は合格と言うことですね？」

モス軍曹の言葉に定延が改めて確認を求めた。

「当然だが合格だ。しかし訓練はこれで終わりではない。これから君達の限界を見させてもらおう」

定延の言葉に対しモス軍曹の形相が変わった。これまでの目下の者という雰

囲気がまったく消え、顔つきがいつそう厳しくなったのだ。

「実は今日ビル群の中での訓練予定のある部隊がいる。

少し早いが彼等との実戦訓練をしてもらう」

言うど軍曹はヘルメットにつけられた無線機に何事か連絡を入れ始めた。

「いきなりな展開です」

若竹と同型の偵察艦針葉が呆れたように呟く。

「これで終わりなら時間が余りすぎだから、仕方がないわ」

軍曹との会話と明らかに口調を変え定延が応じる。

「実戦というと主砲もありなんではようか？」

早くも体に縦線を入れ序列四位の戦艦愛宕が聞いてきた。

「無理だと思いますけど。主砲なんか使ったら市街地そのものが消

えますし」

「待たせたな。対戦車ミサイルが届いた。今度の敵は四足歩行型戦車や機動歩

兵が参加しているから、その程度の装備は必要だろう。一応自律型だが君達な

ら自分達で無線誘導も可能かもしれないな」

定延が仲間と話している内に準備が進んでいたらしく、モス軍曹が呼び寄せ

た輸送車両が到着した。

「攻撃の速度は速いけどショックの大きい対戦車ライフルに、速度は遅いが破

壊力は大きい対戦車ミサイルか？」

「帯に短しタスキに長し。中途半端というか両極端というか？」

「精度は落ちるけど対戦車ロケットもあるよ」

定延達が中を改めるとミサイルのほかにも各種武装が出てきた。

思わず目移

りがしてしまう。

「どれでも好きな武器を選んで欲しい。選んだら十分間で配置につき、後に戦

闘を開始。一応模擬弾だが壁や床を撃ち抜く程度の威力はある。君達ならシー

ルドを張れるから特に問題はないと思うが」

本部に問い合わせたらしく、今回はモス軍曹も定延達のスペックを理解して

いた。

「機動歩兵ならこの程度は平気と言うことですか。まあっその位でないにあた

し達も実力の発揮など無理ですから」

モス軍曹の言葉に頷くと定延は対戦車ライフルを手にした。

「これは当然戦車の装甲を撃ち抜けるんですね？」

「一発では難しいが、連射すれば装甲の破壊は十分に可能だ。相手がそれまで

待ってくればだが」

「ならば問題はありません」

さすがに大口径の対戦車ライフルは単発だ。定延は三十発入りの弾丸箱を手にし、胸元に押し込む。

「あたしはロケットでいいかな？確かにライフルの貫通力も面白いけど、破壊

力ならロケットだし」

愛宕は五、六本の対戦車ロケットを脇に挟むと、白い歯を見せニカッと笑う。

「ロケットかな？多少精度は低くても、接近すれば問題はなし。構造が簡単なら故障も少ないし」

「ミサイルよ。うまく追尾して確実に撃破が基本でしょ？」

それぞれに好みの武器を手にして他の戦艦娘達も準備完了だ。

「では戦闘訓練を開始する」

モス軍曹は再度の訓練を宣告した。

「針葉サーチを始めて。各艦展開。今度は本気で行きます」

定延の号令に全艦が針葉のセンサーにリンクし敵の配置情報の取得を始め

た。全ての艦にセンサーは搭載されていたが、もっとも高性能なのが偵察艦である針葉のセンサー。

針葉でも誤魔化されるなら他の艦のセンサーでは通用しないだろう。

「前方右三番目のビル二階に三体。内二体が機動歩兵、一体が歩行戦車。各ス

ペックを照会します。判明」

針葉の報告に全艦が耳をそばだたせた。

「愛宕、夏、来延に撃破を命じます」

「愛宕行きます。夏と来延は後に続け！」

さらに詳しい位置情報を針葉から取得しつつ、序列四位の戦艦愛宕が序列六

位の巡洋艦夏と序列八位巡洋艦来延を引き連れ移動を開始する。

高速で当該ビルに殺到し三人はそのまま宙に舞う。

「夏、来延。突入を開始！」

空中で次々と取り替えながら対戦車ロケットを発射。壁に大穴を開け、愛宕

は夏と来延をビル二階に突入させた。

「あたしの獲物も残しとけよ！」

ロケット発射の反動を利用し対面のビル壁面に跳んだ愛宕はそのまま強い足

のバネを使用し、二人に続いて敵の潜むビル二階の大穴に飛び込んでいく。

質量と慣性を完全に制御した戦艦娘の機動力は誰にも止められない。

「機動歩兵を撃破！」

「歩行戦車を撃破！」

夏と来延の声が次々に響く。

転がるごつい人型。機動歩兵だ。戦車に近い重武装そして高機動バーニヤに

より意外なほどの素早さを誇っていたのだが間近で壁が粉碎されセンサーが混

乱していたのでは戦艦娘の相手は無理だった。

大型のテーブルほどの寸詰まりの戦車。横に突き出す四本の足。一人乗りの

超小型歩行戦車だ。見た目の鈍重さと違い、足の先端の爪で垂直な

ビルの壁も

移動できる優れた機体だったが、やはりセンサーの混乱が致命的だった。

たやすく二人の戦艦娘の足下に転がるしかない。

「油断はするなよ。これは？」

愛宕の飛び込んだ先では碎かれたコンクリートの破片を全身に浴びたらしい

機動歩兵が完全に動きを止めていた。

まだ識別コードが発信されていた。戦闘可能な機体だ。

「よしこいつはあたしの獲物！」

愛宕は歓声を上げながら敵機動は歩兵に対戦車ロケットを直撃させた。

「左一番奥のビル一階に敵兵五体を確認。歩行戦車二、機動歩兵三」

「海龍と海情はあたしに続け！」

続く針葉の情報に定延達も別のビルに展開していた敵の集団に突撃。

彼女は仲間のあまりのあっけない最後に呆然としていた数体の敵に何本の腕

を持っているのか？残像すら確認できない速さで機関銃のように対戦車ライフルを連射。

一気に圧倒してしまう。

「あんた達はあたし達がお相手」

「いくら美人だからって愛宕に見とれていないの」

さらに海龍と海情が愛宕の凄まじいまでの攻撃に、味方の援護もできず立ち

尽くしていた敵残存機動歩兵を始末。

戦いは三十秒もたたないうちに終結した。

「海龍も海情もよくやったわ。愛宕達も御苦労様。針葉、情報をありがとう。」

戦闘はこれで終了！」

リンクした全員の状況をチェックした定延の勝利宣言が大空に響く。

敵を完全に殲滅し、味方は全員無傷。定延分隊はここに完全勝利を収めたのだった。

「何と言うか。退屈よね」

国連宇宙軍アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊旗艦、序列一位の戦艦キャサリン

は必死になってあくびをかみ殺していた。

「分隊長自らの、そういう態度は慎んで欲しいな」

キャサリン達の指導教官バーガー軍曹は苦笑を交え後ろに着いてきていた軍

服姿の戦艦娘達を振り向く。

基地内のパトロールを始めて少々の時間が経過していた。しかし何も特別な

ことは起こらない。それは異常がないこと。

望ましいのかもしれないが刺激に乏しいことは確かだ。

基地は広い。大部分は舗装のない単なる地面。緑はそれなりにある。今キャ

サリン達は二重になった鉄条網の内側を歩いていた。

普段持ちなれない銃の感触にとまどう。重くはないが煩わしい。

一見大昔と変わらない風景だが二重の鉄条網の間にはシールド発生装置が設

置されていて緊急時に備えていた。

「申し訳ありませんでした。以後気をつけます」

指摘にキャサリンはあわてて敬礼を返す。半分塞がっていた瞳が大きく見開かれた。

「……でも退屈なのも事実よね」

指導教官の目を盗み、序列十五位の強行偵察艦ローレヌが小さく
呟く。

「ものは見方よ。その気になれば空気の流れの中にだって情報はあ
るわ」

序列十三位同じ強行偵察艦のエリカが耳を澄ませる。確かに宇宙
空間は真空

なのだが、宇宙船の遭難時など救援のために音響センサーだって搭
載してい
た。

『昨日は彼が激しくて睡眠不足なのよね』

『若いから仕方ないわ。あんたがうらやましいくらい』

風の音をサーチしようとしたエリカだが実際に耳に到達したのは、
遠くの女

兵士達の会話だった。

『若い男は弊害も多いの。変なところに興味を持つし』

「……もしかして夜の秘め事？」

あけすけな会話がエリカの耳に届く。自然にエリカの顔が赤くな
った。

「何々、若い男はか。もしかして大和様も」

序列三位戦艦スージーが素早くエリカに体をすり寄せてきた。

「……なぜその事を？」

「お互いリンクしているから。特に上位の私ならね」

言外に強制だって可能と匂わせながらスージーはエリカに少し怖
い笑顔を見
せた。

「続きは聞かせませんよ。これはプライバシーですから」

「大丈夫、私にだってセンサーは搭載されているから。」

スージーはエリカに習って耳を澄ませた。

『……………』

多少はレベルが劣る。だが機能的に大差はないはず。しかしスー
ジーが音響

センサーを最高レベルにしてもすでに会話は聞こえなくなっていた。
「どっかいつちゃったか、残念」

面白くなさそうにスージーが肩を落とす。

「変なことを考えるからです」

そしてホッと息をついていたのがエリカだった。

「全く気を抜いているのにもほどがあるぞ」

再び後ろを向きバーガー軍曹が呆れたように言う。若い娘はこんなものかと

思いながらも、一応の注意はしておかなくてはいけない。

「他にも面白いことも話していないかしら」

「何かあったら主砲を発射できたりして」

「こんなところに特攻する馬鹿はいないでしょう。兵隊も戦闘車両も売るほど

あるし」

「兵隊のたぐいは基本的には使えないしね」

「あそこの兵隊なんか強そうじゃないの。立派な体をしているわ」

「筋肉ダルマの称号を私が授けましょう」

序列五位戦艦メアリー、序列七位巡洋艦オルサ、序列九位巡洋艦
マツジョー

レ、序列十一位巡洋艦フランセス。

そして残りの戦艦娘だって騒々しいことには人後に落ちない。指導教官はい

るが、人見知りするようでは対人インターフェイスは務まらないのだ。
だ。

「……………」

……こいつ等間違いなく口から先に作られたのだろうな。

さすがに今回はバーガー軍曹の口は動かなかった。砂漠をジョウ
口で緑地化

しようとするにも等しい徒労感が軍曹を襲う。

「ようっ綺麗な娘を引き連れているな？」

突然バーガー軍曹に声がかかった。軍曹と同じく中年の入り口から数歩入っ

たような男性兵士だ。

やはり数人の若い兵士を引き連れていた。

「こっちは男だぞ。色気も何もない」

「女と言ってもこいつ等はな。そんなに嬉しいものじゃないぞ」

白い歯を見せると軍曹は男の方に視線を移す。

「大和様よりだいぶランクが落ちているような」

「キャサリン、それを言ったら」

「やはり別格というのはありますから」

礼を失しないように、しかしきっちり兵隊達に観察眼をとばすと戦艦娘達

は容赦のない感想を漏らす。

「おいっ、こいつ等は例の暴発娘じゃないのか？」

「宿舎の食堂と風呂場を破壊した」

「いくら顔が綺麗でも、あまり近寄らない方が賢明だな」

しかし観察をしていたのは戦艦娘だけではなかった。兵士達も眉を潜めなが

ら結構失礼な感想を漏らしていた。

「……余計なお世話」

「自分の顔もまともにみていらっしやないのかしら？」

ここまで近づいたらいくら声を潜めても戦艦娘のセンサーにとっては耳元で

の会話と大差はない。

自然とキャサリン達の視線は険しくなる。

「もっと好意的な意見はないの？」

「耳を澄ませてみましょうか」

強行偵察艦のエリカとローレヌは周囲の話し声を逃さないよう音

響センサー

の精度を上げてみた。

「破壊娘か？あたし等がやったら即座に懲罰房行きじゃない」

「相手はその気になったらこの基地を丸ごと全滅させられる戦艦娘よ。上だっ

て馬鹿じゃないわ」

「見た目の良さと行状の恐ろしさが反比例か？」

「だから結構狙っている男だっている訳よ」

「チャレンジャーね。確かに結構な美人揃いだけど」

隅に固まる若い女性兵士は戦艦娘に容赦がなかった。自分の男をとられるか

も知れない危機感にライバル意識をむき出した。

「どんな男でも大和様になう訳がないのに愚かなことです」

大和至上主義のキャサリンが簡単に切って捨てる。

「とにかく見栄えはいいわね」

「スレンダーに傾いてはいるけど、男好きのする体も油断できないかしら」

「息子の嫁にするには派手かしら？」

別の隅には中年の女達。軍服は着ておらず出入りの軍関係者らしい。どんな

に危険な娘かはよく分かっていなかった。

「見栄えだけではないのです。美人なのは確かですが」

スージーが低く感想を漏らす。取りあえずは好感触だった。

「危険な女だ。手を出すのはまずいな」

「関わらないのが一番。君子危うきということだ」

「こっちの手の中に入れられたらだが。大事の前には慎重にしなければ」

さらに別の方角には突き刺すような視線の男達。

「勇気があるような、ないような」

「絶対に手には入らないのですが」

若い娘としてはものの扱いは気に入らない。少しだけ不機嫌な偵察艦のローレ

又だった。

「軍にあんな綺麗な娘が群れをなしているとはな」

「全員ミス何とかに選ばれても不思議はないね」

「息子も年頃だが、嫁より俺の愛人にだ」

「無理だって。落とすにはどれだけ金がいるか？競争率はとんでもなく高いぞ」

最後に言葉はともかく穏やかな中年男達。こちらも中年女同様出入りの業者

なのか、軍服は着ていない。

「綺麗な娘だって」

「ミス軍艦にならエントリーしてもいいかも」

「愛人かぁ？大和様とは違うけど贅沢はできそう」

「実際に維持費は年に数億は必要なんですけど」

素直な賞賛によりやく溜飲が下がったらしく、戦艦メアリー達は満足そうに

頷いていたのだった。

「いいからいくぞ。パトロールはまだ終わっていないのだから」

少しの間、男との会話に興じていたバーガー軍曹だったが何とか任務を思い

出した。ガヤガヤと騒がしい戦艦娘達に顔を向け出発を促す。

「分かりました軍曹。各員移動するわよ」

仲間の耳を通じ最後に好意的な言葉が聞け、それなりに不満を解消したキャ

サリンは弾む声でみんなに声をかけたのだった。

「また色々な機種が」

国連宇宙軍アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊序列二位戦艦ゴールドバ

はずらりと

並ぶ各種車両に驚きの視線を向けた。

「どうしても搭載量に限度のある艦艇と違って、地上では目的に応じて各種の

車両が作られるからな」

指導教官コーン軍曹は満足そうに目を細めた。同時に集められるだけの車両

を集めた甲斐があったと心の中で呟く。

歩行タイプ、車輪タイプ、キャタピラタイプ、ホバータイプ。戦闘用、補修

用、支援用とさらに輸送用。

大きさも十数人もの搭乗要員が必要な超大型から、屋内での活動すら可能な

一人乗りの超小型まで。

計百数十両以上が広い空き地に並べられていた。

「これは全て現行機種なのですか？」

小首を捻ると序列四位戦艦テルビッジがコーン軍曹に顔を向けた。

「もちろんだ。もっとも使用頻度に差はあるが」

コーン軍曹は川を渡るときに使用する巨大な橋を乗せた特殊車両に視線を向

けながら、テルビッジの質問に答える。

「まずは乗りたいものを申告するように。俺の部下が教えてくれるからな」

一人で七人もの運転の指導はできない。十数人の部下が必要だ。

集団お見合いのように向き合っていた男女はそれぞれの上官、序列二位ゴル

ドバとコーン軍曹を一瞥。一斉に動き始めた。

「私は歩行タイプで」

「確かに地上専用といった感じ」

序列六位巡洋艦バルティモラと特に好奇心の強い序列十四位強行

偵察艦クー

ルベは一人乗り超小型歩行戦車に興味を示した。

「何か可愛いわね」

「でも全員同じものは芸がないですし」

序列八位と十位ともに巡洋艦のアイバンとヴィットリ。二人は機

動力と打撃

力の有りそうな大型ホバー戦車に目をつけた。

「基本は車輪タイプでしょうか？」

「キャタピラタイプも古くからね」

「射撃時の安定性は一番でしょうし」

残った三人。戦艦ゴールドバと戦艦テルビッジそして序列十二位巡

洋艦カミー

ルは他の四人と重複しない車輪およびキャタピラタイプを選ぶ。

後日、戦艦娘達だけで教えあう時もくるのかもしれないと序列上

位のゴールド

バとテルビッジは考えてもいた。

「よし、お前等。しっかりと新兵に操縦法を叩き込んでやれ」

コーン軍曹は散り散りになって戦艦娘達に向かう部下に声をかけ、

自分はア

メリカ・ヨーロッパ連合艦隊副旗艦ゴールドバに向かう。

「ゴールドバ君。この戦車は操縦手と砲手そして車長の三人で操縦するものだ

が？」

主力戦車を選んだゴールドバだが、彼女は本来複数で搭乗する戦車にたった一

人で乗り込むところだった。

その間にテルビッジとカミールはそれぞれ四輪駆動車とトラックに乗り込ん

でいたが、こちらは元々一人で乗り込むタイプなので問題はない。

「軍曹殿。軍曹殿からも注意してください」

見守っていた部下が困惑した様子でコーン軍曹に視線を送ってくる。

「見たところほとんどコンピュータ制御で動かせるようでしたので、直接私と

リンクして動かしてみようかと思います」

十数トンある戦車の制御はとも人の力だけでできるものではない。昔から

モーターや油圧で人の力を増幅して制御していたのだ。

初期ですらコンピュータの支援はあった。現在の戦車は尚更だ。

「元々戦艦も並行処理しながら一人で動かしていましたから、戦車の扱いも一

人で何とかなると思います。当然ですが誰かに一緒に搭乗して頂いて見てもら

う必要はありますが」

何ら気負った様子もなくゴールドバは言う。

「なるほど君達は人間ではなかったな」

微苦笑しながらコーン軍曹は頷く。

「では乗り込みます」

「それなら私が見よう」

相手は副司令クラス。搭乗ハッチをくぐるゴールドバに続き軍曹が自ら戦車に

乗り込むことにした。

「……では動かしませう」

操縦席に着き一息吐くと、ゴールドバは緊張気味にメインジェネレーターを始

動。

「あっ、あらっ」

とたんにギヤが噛むカガツという耳障りな音が発生。戦車はエンストを起こした。

「直接、制御しようとしたら。戦艦にギヤチェンジはありませんでしたから」

「意気込みすぎだな。そういうことは車載のコンピュータに任せておいた方が

無難だ。一応は本職だから」

コーン軍曹は冷静に指摘をした。

「なかなか面白い乗り心地。一人乗りでなければ大和様を乗せたのに」

「でも自分の足で動いた方が早い気がします」

ゴルドバが苦心していたその時に一番楽しんでいたのがクールベ。同じ歩行

戦車を選んだバルティモラと一緒にそのあたりを駆け回っていた。

「待て。勝手に動くな」

「遊びじゃなくて訓練だぞ」

響き渡る怒号。駆ける戦艦娘。後を訓練係の兵士が同タイプの歩行戦車で追

いかけていたがうまく追いつけない。歩行戦車の操縦ではプロの二人だが素人

の戦艦娘に後れを取ったままだ。

「だって遅いから」

「それは認めましょう」

ヒョイとジャンプ。追っ手と化した訓練係をかわしながらクールベとバルテ

イモラは気楽そのものだ。

「いい加減にしろ」

「止まれと言っているだろが」

フラフラになりながら追う訓練係。実は訓練係が追いつけないのには訳があ

った。今や戦闘艦と一体化した元対人インターフェイス。

内部には艦の中枢コンピュータ。その演算能力を使って歩行戦車

のコンピュータ

ータをサポートし、本来の運動機能を大幅にアップしていたのだ。より精妙な動き。エネルギー分配の最適化で、エンジンすらスペック以上に

稼働。もはや本来の機体とは似て非なるものと化していた。

「さあっ、行くよ!」

「追いついてみなさい?」

近くの大型車両を足場に二体の歩行戦車が大きく宙に舞った。

「派手にやっているわね」

「はた迷惑です」

動きの予測がしにくい二体の歩行戦車が周囲を跳ね回り、大型ホバー戦車を

選んだアイバンとヴィットリの二人が苦々しく呟く。

堅実に二人で一台だ。もっとも彼女達もスペック以上にホバー戦車を駆動し

てはいるのに代わりはなかったが。

「しかしこれでは我々が訓練係として乗り込んでいる意味があるかどうか?」

「とりあえず歩行戦車の連中と違って、我々から逃げ回ってはいないから」

ホバー戦車の後部席。訓練係のぼやきが聞こえてくる。空中を移動すると言

う点で戦艦娘達の適性に一番合っていたらしい。

教え始めて数分で戦艦娘の操縦技能が訓練係を上回ってしまった。

「でも大きいのが小さいのがいっぱい」

「何種類の軍用車両があるのかしら?」

ほとんど観光気分。ずらりと並ぶ車両は壮観の一言だった。

「一番小さいのはやはり君達の仲間が乗っている歩行戦車。一番の大物はこれ

と同じホバータイプの超大型戦車。陸上戦艦の異名もある百メー

級ホバー戦

車だな」

「百メートルで戦艦は大げさじゃないかしら？」

「陸上ならば別だ。道路を走ることも不可能。無駄にでかいとしか言いようがない」

「使う場所を考えれば限界の大きさ？」

訓練係の指さす方向に巨大な影。アイバンとヴィットリはその大きさに息を

呑んだ。宇宙でなら小さいと言えるのだが対比するものが違う。

最大でも十メートル程度の周囲の車両とはやはり格が違っていた。

「確かにあれは戦艦かもしれないわ」

「攻撃力と防御力は恐ろしいほど。よほどの戦力を集中してもほとんど傷もつ

けられないだろうな」

方向を変えたホバー戦車の視界全部を覆いそうな巨大な影。アイバンは訓練

係の言葉によりやく納得した。

「みんなはいいな。外に出られるんだから」

大和は事務室の片隅に座らされていた。彼が戦艦娘達の対立の原因。だから

戦艦娘は室外。そして大和は基地内。

女の子達から引き離しておいた方がいいと言うことでの処置だ。

「暇なら書類の処理を頼むぞ」

大和がぼんやりとしていたら男の事務官の一人がフロップイデイスクを十数

枚目の前に積んできた。

真四角でペラペラした黒い板。昔同じ名前の記録媒体があったという。しか

し容量も記録速度も数万桁は違う。

「事務は始めてか？特に期限はないから」

遊んでいる姿は目障り。だから半分は嫌味だ。かなりの仕事量。しかし急ぐ

仕事ではない。任せた本人は数日中に処理してもらえばいいやという程度だ。

「ええと中身はと？」

大和は仕事は嫌いではない。任せた本人は嫌味だったかもしれないが、暇よりはいい。

大和は新聞を読むように両手でフロッピーを広げる。電子情報。人間ならば機械にかけて読み取らねばならない。

しかし大和は自体がコンピュータ端末のようなものなので、普通の人間が紙に書かれた情報を読むようにフロッピーを直接読むことが可能だった。

「これはこれで、これはこれでいいか？」

読んだものを体内部のスーパーコンピュータで処理。リンクした出力装置からそのまま出力していく。

「……まるで魔法？」

見ていた女性事務官が呆然と呟いた。見ていた人間からするとフロッピーを

見ただけで何の端末もいじらないのに、ある書類はプリンターで勝手に印刷。

未整理のデータは整理した形で別のフロッピーになぜか記録できてしまったように見える。

「さすがに統合旗艦。すごい情報処理能力！」

「メディアをスロットに入れなくていいの？」

あまりの効率にみんな驚きの色が隠せない。

「悪いがこの書類も頼む」

「あたしのも頼んでいい？」

「いいですよ。置いていってください」

普通の人間が一日かけて処理する量を大和は十数秒で処理していく。調子に

乗って事務官の全員が手持ちの仕事を大和に押しつけた。

たまりにたまっていた数日分の書類仕事が三十分で消滅した。

「今日は定時で帰れるぞ」

「連日の徹夜でしたからね」

事務官達が自らの肩をたたきながらホッとため息を漏らす。

艦隊娘の出現は無数の書類仕事を生んだ。破壊した学校や宿舍、各種施設の

後始末は連日徹夜しても終わらないほどだ。

「さすがに疲れたかな」

久し振りの事務仕事は戦艦娘の指揮とは違うが、強い緊張を強いた。思わず

大和は深い息を吐く。

「部下の後始末は上官の仕事だけど」

「艦隊娘が思わず争うのも分かるような？」

女性事務官達の熱い視線が吐息を漏らす大和に集まる。艦隊統合の必要性も

あって選ばれた大和の容姿は女性の視線を釘付けにするのに十分なものだっ

た。

「どうっ、今夜あたし達につきあわない？」

「あんな小娘と違って後腐れはないわよ」

半分はからかいだが妖しい笑みを浮かべ、女子事務官の内容姿に自信のある

数人が大和に詰め寄る。

確かに美しさでは戦艦娘に劣るが、男相手の実戦経験が違う。蠱惑的な雰囲気

気は戦艦娘を優に上回っていた。

「だ、駄目ですよ。彼女達に知られたら？」

戦艦娘の攻撃力は冗談ではすまない。シャレでなく命に関わる。

大和の顔が引きつった。

「妊娠させてもいいから？」

「女は体のどこでも男をね？」

女性事務官は大和の反応にこれはチェリーボーイだと見抜き、さうにからかいのボルテージを上げる。

大人の女の楽しみ。裏ではクスクス笑って大和の狼狽する様子を楽しんでいる

たのだが、焦る大和にそれを見抜く余裕はない。

「だから駄目ですってば！」

思わず腰を浮かせる大和。逃げだそうにも周囲は女性事務官に囲まれていた。

「つきあいなさいよ」

「今夜は楽しいよ」

「勘弁してください」

迫る女性事務官に縮こまる大和。大和が無理矢理にでも脱出しようと思った

瞬間、それは起こった。

ドーンと言う爆発音。それに続く怒号。

「テロリストの襲撃だ！」

「何だと。まさか？」

窓の外から聞こえてきた叫び声に事務室も騒然となった。

「どこだ。何が起きている？」

「見ろ外に煙が！」
立ち上る大量の煙に窓に駆け寄った男性事務官達が呆然となった。

戦いの中の戦艦

第五章 戦いの中の戦艦

「総員、出撃準備！」

「いつでも出られるよう急げよ！」

国連軍浮き名基地にはいくつもの怒号が飛び交っていた。多数の兵士が急ぎ足で歩きまわり、同じく多数の軍用車両が出撃の準備を急ピッチで進めていた。

少し浮き上がり最後のバランス調整を行うホバー車両。関節やシヨックアブソーバの微調整を進める機動歩兵や歩行戦車。

多数の兵員の搭乗を待つ大型トラック。さらに対戦車を含む地上の掃討を行う攻撃ヘリや攻撃機などの航空戦力も発進の時を待っていた。

「第一目標はテロリストの制圧。第二目標は奪われた超大型ホバー戦車の奪回」

誰かが怒鳴っていた。事務処理にいそしんでいた大和の目前で起きた爆発は基地のシールド発生装置の破壊活動に伴うものだった。

しかも一部の兵士がテロリストの手引きをしていた。

テロリスト達に言わせれば公正に国連行政が行われないための対抗処置だと言うが、だからといって暴力行為が許されるものではない。

さらにその混乱に乗じ超大型ホバー戦車まで奪われてしまった。陸上戦艦の異名すら持つ大型の破壊兵器。正当な軍以外が手にしていないものではない。

破滅的な事態が起こるまえに取り戻す必要があった。

「目標は浮き名市中央公園。ホバー戦車は公園中央に現在展開している。戦闘力はかなりなものだぞ」

大型輸送ヘリ数機によって浮き名基地から持ち出されたホバー戦

車は途中でヘリが撃墜されながらも最後は自らのホバー能力によって中央公園に着陸した。

そして元々潜入していたらしい百名近いテロリストの本隊と合流。捕らわれていた仲間の釈放と周囲のビルに確保していた人質の身代金金の二つを要求。

自らの武装と人質の存在で追撃していた国連部隊の撤退を余儀なくさせたテロリスト達は現在も浮き名市中央公園を占拠していた。

「全艦隊出撃準備はいいか？」

国連陸軍の軍服を着た二十九名の戦艦娘の前に大和が立つ。強力な火力を誇る戦艦娘。当たり前だが戦力としての戦艦娘の存在は無視できない。

基地の指揮系統に組み込まれた統合旗艦大和麾下の国連宇宙軍アジア連合艦隊とアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊の両艦隊も出撃の準備を進めていた。

もっとも破壊力の有りすぎる統合艦隊は、今回後方を固める役割を担わされていたが。

「第四大隊出ます」

「第十四狙撃小队出ます」

何台ものトラックや兵員輸送車が重装備に身を包んだ満杯の兵士を詰め込んで次々に浮き名基地を出撃していく。

「第十六戦車中隊出ます」

「第三ホバー大隊出ます」

キャタピラーの駆動音にホバーのタービン音。耳に刺さるような騒々しい音とともに多数の戦車も基地を離れていく。

空には遊弋する各種のヘリコプター。輸送に戦闘。様々な用途のヘリが厳しい緊張感を秘めて大空を舞っていた。

彼等も次々に浮き名基地を離れていく。

「お待ちどう。出撃してもらいます」

整列していた艦隊娘の横にモスグリーンに塗られた大型トラックが止まった。防弾能力を持つ幌式の軍用トラックだ。

「よし。お前達は荷台に乗り込め。俺は助手席に乗るから」

大和は素早く前に回る。運転席にいたのは壮年の逞しい男。

「ライス軍曹です。本部との連絡係も務めさせていただきます」

「大和です。艦隊司令を務めています」

本人は知らなかったが、かつて飛鳥達の指導教官を務めたライス軍曹に大和は頭を下げた。高い戦闘力を誇る戦艦娘を率いていても、大和も元は対人インターフェイスなので正式な軍の階級はない。

だから曖昧な階級抜きの司令官と名乗るしかない。

「なんか狭いし臭い」

「乗せてもらえるだけでよしとしなさい」

幌の中には小さな明かりしかなかった。薄暗い光の中に四列に並ぶ薄いクッションの座席。色が車本体と同じモスグリーンなので華やかさなどかけらもない。

最初に乗り込む両艦隊の序列一位、旗艦である戦艦飛鳥と戦艦キヤサリン。心の沈みそうな車内に早速口争いを繰り広げ始めた。

「入り口で止まらないで、さっさと乗り込め。時間は有限だぞ」

耳に届く聞き苦しい口論に大和の怒声が飛ぶ。実戦態勢で余分な気遣いをする気など大和にはない。

「早くしてください。総司令が怒っていますよ」

「とりあえず座りましょう。これでは出発ができません」

口を閉ざす旗艦の背中を押す序列二位の副旗艦の定延とゴールドバ。

「座席がほとんど鉄板」

「堅いし鉄臭い」

「いいから座ろうよ」

後からは続々戦艦娘が続く。堅い椅子に不満を漏らしながらも、ここは座るしかない。「あたし達が最後か」

「センサーで調べるまでもなく男臭いです」

「ろくに洗っていないと見ました」

最後に乗り込んだのは両連合艦隊の強行偵察艦。若竹と針葉、エリカ等は臭気センサーの精度を少し落とす。

「全員乗ったか？では出撃だ」

荷台からの戦艦娘の黄色い声が静まるのを待ち、ライス軍曹はゆつくりとトラックを発進させた。

「それでは現場に到着するまで状況の説明を行う」

大和の声に戦艦娘達の背筋がピンとなる。運転室の鉄板で隔てられた助手席からの声だが戦艦娘の音響センサーにとっては隣席からと大差はない。

「まずは偵察衛星からの画像だ」

戦艦娘達のメモリー領域に直接画像データがインストールされた。一見分かっているようだが大和や戦艦娘達の内部に元の戦艦艦がどう収められているかははっきりしていない。

容量から考えてそのままと言うことはあり得ないから、次元的に折りたたまれているのでは？とは言うものの、結局ただの言葉遊びのようなもので現実としてどこに頭脳である艦のコンピューターが入っているのか、そもそも身体の内部に入っているのかもすら分かってはいない。

とにかく実際に頭脳や武装、センサーが働いているのだから、本人的には問題意識はなかった。

「まずは浮き名市全図だ」

「宿舎と学校の往復。市内を出歩いたことがほとんどなかったのですが、かなり広い市だったのですね？」

市内のパトロールに出たのは飛鳥の分隊だけ。基地の内のパトロールを担当したアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊旗艦のキャサリンが低く呟く。

市街外縁部に広がる基地施設。学校や寄宿舎は市内に入っていた。そのままではあまりに雑然としていたので、画像データに地図情報を重ね合わせる。

「十四の区。一つの区で小さな市に匹敵する大きさ？」

「肝腎の公園は本当に市の中心部にありますのね」

定延とゴルドバは地図の確認を進めていく。

「現在国連軍は公園の包囲を進めている。ルートは四方にあって基地本体から主力の二本が、輸送ヘリからの空挺部隊が抑えの二本を展開中だ」

矢印が地図に重なった。

「我々は現時点でこの場所にいて、この方向に進んでいる」

その矢印の一部分が点滅を始めた。

「そしてここがあたし達の配置される場所？」

大和の言葉に戦艦娘の一人が頷く。矢印の向かう先にあった広大な空き空間が極限まで拡大されていく。

地図から生データに戻され緑の木々の間にホバー戦車が鎮座しているのが分かる。広大な森林の前では超大型といえども、さほど大きくは見えなかった。

「見た目は緑が多くて健康に良さそうな感じ」

嬉しそうに国連宇宙軍所属アジア連合艦隊の序列十四位、強行偵察艦針葉が口調を弾ませる。

本来はそんな場合ではないのだが、見たことのない緑の大集団に興味津々だ。

「確かにそのその通りだが公園の守りを考えてのビル配置が今回は仇になった」

針葉の興奮を大和はあっさりと流す。

偵察衛星のカメラに写る浮き名市中央公園。

大きな公園だが警備の都合から通じる道そのものの数が少なく、さらに数十棟のビルが重なり合い中央公園に直線で向かう道は一つもない。

「こちらが動員できる戦闘車両は道幅で規制される上、道なりに進撃する以上、出現位置は簡単に特定されてしまう。確かに巨大ホバの居場所は特定しているのだが、火力で劣る上、動きながらの攻撃を強いられる分攻撃の精度が落ちる。全体としての情勢は明らかにこちらが不利だ。……ただ」

「目的地に着きました。ご降車を願います」

大和が情勢分析の続きを言おうとしたときトラックは止まった。ここまで来たら直接目で見た方がいいだろうと大和は思う。

「全員降車。直ちに後方支援に移る」

「みんな降りるわよ」

「こちらでも降りますわ」

大和の言葉に両艦隊の旗艦、飛鳥とキャサリンが応えた。

「早く情報の収集を」

「分析も必要だし」

「何よりこんな狭いところから出たいですし」

若竹や針葉、エリカ達の強行偵察艦がまず飛び出す。唯一、実際に中央公園を見たアジア連合艦隊序列十三位、強行偵察艦若竹はともかく針葉やアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊の強行偵察艦娘達の瞳は物珍しい風景の期待に輝いていた。

「とにかく出ましょう」

「いつ実戦に投入されるかも分からないしね」

さらに戦艦娘や巡洋艦娘が後に続く。

「案外と殺風景だね。もっと公園に近ければいいのに」

「ここは後方ですから仕方ありません」

トラックから最後に降りた飛鳥は周囲を見渡し軽く肩を落とし、対してキャサリンは呆れたように肩をすくめて見せた。

「ここですばらく待っていてくれとのことだ」

大和は周囲に視線を送ると飛鳥達を改めて見渡す。幅のある超高層ビルが壁のように建っている。手前から奥に、公園に近いほどビルは高くなっていく。

ビルに阻まれ公園の緑は全く見えない。

道路そのものにビル付属の庭。多数の車両やたくさんの人影を飲み込んだテントが立錐の余地もなく展開していた。

「一番奥のビル群にテロリストが人質を取って立てこもっている」

「ここからでは全く見えませんが、それが一番頭が痛いところですわ」

「やっぱり人道があるから。単純に潰していいのなら、楽なんだろうけど」

ひしめく人々の邪魔にならないよう小型のテントの一つに入った後、大和がビル奥を見通すように視線を陰しくさせた。

キャサリンと飛鳥も大和の視線の後を追う。

「本気で潰すだけなら、攻撃衛星のビームで灼けばいいし」

「地上戦艦と気取ったところで所詮は戦車。一発で殲滅しちゃえますから」

「絞って灼けば多少周りの木が燃える程度で、乗っている人間こそ丸焼けだけど、周囲にそんなに大きな被害は出ないだろうし」

ダウンロードした超大型ホバー戦車と攻撃衛星のスペックを参照しながら、戦艦娘達は結構非道なことを口にする。

「でもそういう行動に出たら人質もただでは済まないから」

「簡単だけど実行はできないか？」

「そういうことですわ。それにテロリストだけでもいきなり衛星からの攻撃は無理でしょう。それぞれに所属する団体やバックアップしている国家もあります。それに人道主義者の存在。問答無用で全員を抹殺では、いくら軍事的には正しくても政治的には大混乱は必至でしょうから」

仲間の戦艦娘を横目に、さらに言葉を続ける飛鳥に大和とキャサリンも同意をした。

「申し訳ないが奥のビルに何人程度立てこもっているか分かるかな？」

大和達の問答に割り込むように壮年の兵士が顔を覗かせた。定延達の戦闘訓練につきあったモス軍曹だった。

訓練で知った知った強行偵察艦、針葉の索敵能力に期待しての来訪だ。

「我々も偵察兵を出しているが敵も軍人。こちらの手の内が見透かされているかも知れないからな」

「分かりました。若竹、針葉、エリカ、クールベ、ローレヌ」

大和も定延から情報は得ていた。モス軍曹の意図を察し、こちら
も素早く集まってきた強行偵察艦娘達に視線を走らせる。

「分かっているな。手分けをしてテロリスト達の手の内を探っ
てくれ」

「分かりました大和様」

「分担地域の指示を」

「完全にデータはそろえて見せます」

「人質に犠牲は出さないよう」

「ビルの壁に張り付いてでも情報は手に入れます」

大和の要請に力強く応え、若竹達はモス軍曹に視線を移す。

「では彼女達を借りますから」

「うまく使ってやってください」

「では偵察艦艦隊、出撃します」

モス軍曹の後ろについた若竹やエリカ達、両艦隊の偵察艦娘五人
は大和達に手を振るとゾロゾロとテントから出て行くのだった。

「行っちゃった」

「何とかやってくれるとは思いますが？」

「大丈夫ですよ。こと偵察に関しては専門家ですから」

「ですね。失敗はしないでしょう」

信頼はしていても実戦では後がない。不安を隠せない飛鳥とキャ
サリンを定延とゴルドバが思いやる。

「そうそう。千キロ離れた敵艦だって易々見破るんだから」

「たかが数百メートル。それも機動歩兵相手ですから」

「電子戦のレベルも桁違い」

「むしろ間違う方が異常？」

副旗艦を後押しして残りの戦艦娘が気楽な声を上げた。

「問題は敵の配置が分かっても人質の解放ができるかは別問題と言
うことか？」

見ていた大和の視界に手前のビルに入っていく兵士達の姿が映っ
た。

「どうやら前のビルに配置しておけるほど敵の持ち駒は多くないようですね」

「奥に戦力を集中しているようです」

強行偵察艦ほどでなくても戦艦娘にもセンサーは搭載されていた。定延とゴールドバが険しくビル群を見つめた。

『勝手な接近をするな。こちらには陸上戦艦がある。たとえ見張りの者を倒しても人質が無事に済むと思うな』

途端に軍用周波数に割り込みテロリストの声が響く。

「当然ですが敵にも索敵能力があるようです」

「機動歩兵の電子戦能力でごまかせる相手ではないと言うことですね」

苦々しくキャサリンとゴールドバが呟く。

「これでは強襲は難しいし、たとえ成功したとしても人質ごと敵の主砲で粉碎されてしまうじゃない」

苦しそうに飛鳥も呟いた。

「人質の安全確保が急務か。こうなったら我々が出るべきだろうな」

「あたし達の電子戦能力なら陸上戦艦のセンサーをだませるでしょうし」

「人質を解放した後もシールドが張れるし」

大和の言葉にキャサリンと飛鳥も頷く。向こうが戦艦ならこちらも戦艦で立ち向かうのが正解だろうとみんなが思う。

「我々がでるとしたら陸上戦艦もなるべく早く潰すべきでしょう。」

敵の主砲は人質以外に対しても有効です。我々が人質を確保したら自暴自棄に陥って市街の破壊を企てるかも知れません」

アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊序列三位、戦艦スージーは怜悯な風貌で大和を見据えながら大きく頷く。

「大和殿。軍司令部にあたし達の出撃申請を」

「申し訳ないが君達を後方で使っている事態ではなくなってきました。人質の確保そして敵の手にある大型ホバー戦車の奪還を頼みたいとの基地指令の言葉だ」

大和達の決意が固まり定延が軍司令部へ出撃許可の申請を要望したその時、まるで機会を窺っていたようなタイミングでモス軍曹が入ってきた。

「我々の出番ですか？」

「この間の訓練で君達の実力の高さは十分に分かっていた。しかし学校や宿舎でしばしば君達はやりすぎていたから。しかし先ほどのテロリストの宣言。私達だけでの作戦の遂行は無理と司令部が判断した」

大和達の耳に少し痛いモス軍曹の言葉。しかし今はそんなことに構ってはいられない。

「分かりました人質の解放及び、戦車の奪還をお引き受けします」
ピシッと敬礼をすると大和はモス軍曹に視線を合わす。

「頼んだ。では失礼する」

大和に敬礼を返すとモス軍曹はテントを出て行く。

「大和、人質の解放はともかく戦車の奪還まで大丈夫なの？」

「そうですね。集中砲火を浴びせれば潰すのは簡単ですが、取り戻すというのは？」

モス軍曹がテントから出た瞬間、待っていたように飛鳥とキャサリンが心配そうな表情で大和の顔を見た。

「四方八方から出力を押さえた砲撃でテロリスト達を攪乱する。動きがとれなくなればそのうちに降参せざるを得なくなるだろう」

「そんなにうまく行きますでしょうか？」

荒っぽい大和の作戦にアジア連合艦隊序列二位の副旗艦戦艦定延が疑念を漏らす。

「所詮は戦車。俺達の攻撃を受け続けられずれシールドも破綻するはず。そうなったところでエンジンを撃ち抜く。それで終わりだ」
「大丈夫だよ。こっちは二十九隻もいるんだよ。大きくても相手は戦車でしょ。スペックから言えば若竹達強行偵察艦だってパワーは遙かに上なんだから」

珍しく引かない大和にアジア連合艦隊序列五位、戦艦扶桑が後押

しをする。

「大丈夫でしょう。一対一でも互角以上なのに多勢に無勢。負ける要素はありません」

さらにアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊序列三位、普段は物静かな戦艦スージーも大きく頷いて見せた。

「全員出撃、とにかく作戦を遂行する。まずは人質の確保と戦車攻撃に担当を分ける。手が足りないから出ている強行偵察艦も呼び戻してもらおう」

司令部にリンクを繋ぎながら戦艦娘を引き連れた大和はテントを後にした。

「攻撃班、配置はいいか？」

『展開を完了』

『いつでもでられます』

『こっちも準備できてるよ』

『戦車の位置。最終確認を終了』

人質を連れテロリストが立てこもるビルを横目で見ながら大和は戦艦娘達に最後の確認をする。対して戦艦娘からの返答が返ってきた。

電波を介しての連絡では無意味なのだが、大和も戦艦娘達も自然に声を潜めてしまう。

「奪還班も準備はいいか」

続いて大和は巡洋艦娘と強行偵察艦娘に連絡を取る。

『人質の位置を確認』

『テロリストの位置も確認』

『突入いつでもできます』

十人の戦艦娘が戦車の攻撃要員なら、そのほかの戦艦娘は人質の奪還要員だ。やはり攻撃力が売りの戦艦娘、当然の配置だった。

「夏も準備はいいな？」

統合旗艦大和は視線を正面に戻すと、相棒であるアジア連合艦隊

序列六位の巡洋艦娘の険しい横顔を伺う。

「大丈夫です。いつでもできます」

端正な大和に至近距離から見つめられ巡洋艦娘は気押されたように何度も頷く。

「分かった」

元々が戦艦娘達の気を引くために選抜された大和だ。少し顔を赤くした夏だが大和は気づかず再び横目でテロリストの潜むビルに視線を向けた。

奪還班は大和を含めて二十名。十のビルに分散していた人質を一気に奪還するため一班二名でタイミングを計っていた。

全員が非武装だ。下手に武器を携帯すると乱戦で人質に被害が出るかも知れない。どうせテロリストの武器で戦闘艦の装甲を撃ち抜けるわけもないし、武器がない方が動きもよくなる。

それに状況にもよるが質量慣性制御装置の活用で百トン単位の打撃技を繰り出す戦闘艦娘に、下手な手持ち武器など不必要だ。

「奪還要員はテロリストの位置の最終確認。攻撃要員は合図と同時に行動開始」

作戦は決まっていた。攻撃要員が主砲で砲撃。動揺したテロリスト達を人質奪還要員が強襲し制圧。

一気に決着がつくはずだった。

「突撃！」

陽動もかねる総攻撃。各所のビルの屋上に身を隠していた戦艦娘に大和の指令が飛ぶ。合図と同時に数十メートル離れた戦車が直視できるビルの屋上に向け、飛鳥達、戦艦娘の肢体が宙に舞う。

「敵を発見！」

「撃ち落とせ！」

途端に巻き起こるテロリスト達の怒号。高く舞う戦艦娘達の姿を国連軍の航空戦力を恐れ見張っていたテロリスト達に発見されたのだ。

「しまった。高く飛びすぎた」

対戦車ヘリよりも遙かに小さな戦艦娘。まさか発見されると思わず狼狽してしまう。

「これでは攻撃できない」

ビルの屋上に取り付いても主砲を発射するには身体を縦に開き、クワガタムシの角状のビーム発信器を露出しなくてはいけない。

そんな姿では機動力が発揮できないので通常の姿で空を舞った戦艦娘達。攻撃にはそれなりの時間が必要だった。

「主砲を発射！」

狼狽する戦艦娘達。しかし全員が見つかったわけではなかった。低く飛んだ何人かがそれぞれ攻撃を始めた。

「反撃だ」

しかし奇襲はすでに成立していない。猛烈な反撃が起こった。

「全員突入。人質を救え」

巻き起こる銃声。ビームが煌めきロケット弾が突進していく。テロリストそして人質を問わず耳をふさぎ床に身を伏せた。

その隙を見逃す大和ではない。身を潜めたビルの窓ガラスを粉砕しテロリスト達の潜むビルに突入していく。

『人質を奪還』

『テロリストを制圧しました』

『人質の保護にシールドを展開しました』

それは他の突入班も例外ではなかった。次々に作戦の成功が知らされてくる。

「動くな。死にたいか」

勢いを落とさず対面のビルの窓ガラスを粉碎し、大和はそのまま床に伏せるテロリストに蹴りを浴びせる。

戦艦娘と同様、大和も本来の艦船の能力を秘めた存在。やろうと思えば超人並みの能力は持っていた。

「抵抗しないで。しなければ殺さずに済ませます」

恐ろしい言葉をまき散らしながら夏も次々にテロリストを昏倒させていく。

「……大和さん。助かりました」

人質の中から見知った声を聞き分け大和は思わずたたらを踏む。

「……ゆかりさん？ どうしてここに？」

内気そうな雰囲気少女立木ゆかりがそこにいた。

「今度大和さんと会う約束をしていたので。……その下見を」

恥ずかしそうに目を伏せたゆかりに大和は一瞬の感動を覚える。

「統合旗艦殿、今はそんなことをしている場合では」

夏の固い声に大和はハッと我に返った。

「直ちに撤退します。全員ついてきてください」

「怪我人は助け合って。あたし達はこのテロリストを連れて行かねばなりませんから」

両肩にテロリストを担ぎ上げた大和と夏はゆかりを含む人質を前後に挟んでシールドを展開。未だ砲声の響くビルを後にするのだった。

『大和、こちら飛鳥です。どうします』

『このまま撃ち合っていたら公園の周囲のビルは全て倒壊しますわ』

『撤退命令を。被害が大きすぎます』

道を急ぐ大和に飛鳥達の連絡が届く。大和と夏のいたビルに戦艦娘はいないはずだが流れ弾が次々に着弾していた。

最初からテロ攻撃も想定し強化をしていたビルだが所詮は民間施設。さすがに崩壊は始まっていらないが軽く考えられるほど被害は小さくなかった。

「撤退を許可する」

……いくら人質の奪還はしても、これでは。

作戦の失敗を確認し、大和は苦々しい口調で飛鳥達に返答を返す。その間にも公園を取り囲むビルに砲弾の轟音が響いていた。

「結局は作戦は半分成功したわけですか？」

いつの間にか大和達と司令部の連絡係を任されていたらしいモス軍曹は眉をひそめ軽く嘆息した。

「それにしてもあれだけの砲撃戦を繰り広げて、人的損害が皆無だったのはたいしたものです。人質は全員を救出し、あなた達も無事に撤退。さすがにテロリスト達の損害までは知りませんが」

皮肉に唇をゆがめると再び嘆息した。

「今は何とか膠着状態ですが。それにしても今後はどうします？」

「とにかく奇襲は失敗しました。これからはテロリスト達は油断を絶対しないでしょう。それに交渉は望み薄。直接対決しか道はありません。人質には悪いですけど、一種のクッションになっていた側面は否定できません」

何とか気を取り直すとモス軍曹は大和の顔を見た。自責の念に駆られた大和は顔色も悪くモス軍曹を見返す。

「ここまで来たら仕方ないでしょう。人質はもういません。ホバー戦車は諦めました。攻撃衛星のビームで一撃ですか。それにしても人型から戦闘態勢に移るまでのタイムラグですか？あなた方にも意外な弱点がありましたな」

「宇宙では距離がありましたし。後はひたすら乱戦ですか？そうなら敵の投降は」

こんな戦い方もなかったと言外で匂わせ、大和は話を続けていく。「戦車に乗っていた乗員は丸焼け。残った者は意地にもなるでしょう。まだ武器を持っています。よほどの被害。全滅しかなかったら降参もあるでしょうが」

「駄目だよ、そんなの。町中にミサイルやロケットの雨が降るじゃない」

「私達が頭上からビームの雨あられを降らせたらテロリスト達もそれどころじゃないでしょうが」

こちらにも景気悪く飛鳥やキャサリンが会話に参加してきた。

「一人残らず殺してしまうわけですか？世間の目が厳しくなりそうですね」

定延が皮肉たっぷりな嘆息した。もっとも彼女にもいいアイディアがあるわけでもなかった。

「要するに人死に出さずに戦車の動きを止めちゃえばいいのよね」
「だと思えます。彼等の切り札が手もなく無力にされてしまえば意地の張りようもなくなるでしょうから」

「私達が集中砲火を浴びせれば不可能ではありません」

「最初に言ったようにシールドを過負荷にさせるよう調整しながら砲撃。弱ったところでエンジンに直撃。動きを止めさせる。力の差を思い知らせつつ、乗員も無傷。これなら投降もしやすいわけですが」

「それができないから苦労しているのでしょ。何しろこちらが攻撃モードに入る前に攻撃を受けます」

「落ち着いて砲撃ができないのですから、手加減どころではありません」

次々に戦艦娘が会話に加わってくるが、全員が頭を抱えたままだ。

「方法はあると思います」

この場にもっともいるべきではない少女が頭を突っ込んできた。

「方法って何？」

アジア連合艦隊序列一位の旗艦、戦艦飛鳥はさがるような視線で恋敵になるかもしれない少女立木ゆかりの顔を見た。

「みなさんも見たから知っているじゃありません？最初の頃だっけ、軍学校の校庭で飛鳥さんとキャサリンさんが対決をして」

ゆかりは戦艦飛鳥の顔をスウツと見渡すと、何でこんな簡単なことをと言う表情で話を始めた。

「全艦戦闘配置につきました」

ビルの谷間にアジア連合艦隊旗艦序列一位、戦艦飛鳥の声が響く。隣には序列八位、巡洋艦来延が付き従っていた。

「こちら準備は完了です」

飛鳥から数百メートル離れた位置に立っていたアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊旗艦序列一位、戦艦キャサリンの声が大和にも届く。隣には同艦隊の序列八位、巡洋艦アイバンが立っていた。

ここからは見えないが浮き名市中央公園を一周する円内に飛鳥達を含め十四組二十八人の戦艦娘達が立っているはずだ。

『敵ホバー戦車の位置確認。公園中央に展開。前回より動いていません。シールド出力も安定。今のところ作戦変更の必要はない模様です』

唯一ペアに入っていない艦艇。アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊所属序列十三位、強行偵察艦エリカが状況の報告をしてきた。

『定延及び那智準備できています』

『ゴルドバそしてマツジョーレ配置につきました』

次々に二十四組の戦艦娘から報告が上がってくる。

『オルサとローレヌ戦闘配置につきました』

最後にアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊序列七位、巡洋艦オルサそして同序列十四位、強行偵察艦ローレヌから報告が入った。

「これよりテロリストに奪取されたホバー戦車の奪還作戦に入る。

上位艦攻撃態勢に入れ！」

大和が号令を発する。

「行くわよ。リターンマッチよ」

「今度はとどめを刺します」

飛鳥とキャサリンの身体に縦線が走った。見えないが定延や扶桑、ゴルドバなど全戦艦娘が砲撃戦態勢に入ったはずだ。

『巡洋艦夏、砲撃の準備よし』

『ジョティいつでも撃てます』

『オルサ射撃よし』

そして巡洋艦の内、上位艦も砲撃戦の準備を整えているはずだ。

巨大なクワガタムシ状の対になった角が凶悪な姿を現す。

「エネルギー充填開始」

「チャージ完了」

角の間にエネルギーの塊が形成されていく。ホバー戦車から姿は見えない。これなら確かに敵の先制攻撃は受けないだろう。

しかしビーム兵器の特性上曲射ができないからこちらの攻撃も届

かないはずだ。

「シールド艦展開開始。位置および強度は事前の計画を遵守！」
再び大和の号令が飛ぶ。

「行きます！」

瞬間砲撃準備をしていなかった巡洋艦達の姿が消えた。当然だが消えたのではなく素早く動いただけだ。

「こっちです」

次の瞬間一番公園に近いビルの壁面に巡洋艦娘達の姿が現れた。

「撃てっ！」

さらに次の瞬間戦艦娘達の砲撃が始まった。攻撃目標は巡洋艦娘。
「曲がれ！」

強度と位置を計算した巡洋艦娘のシールドにビームは弾かれた。
そのまま方向を変えたビームは公園の中に飛び込んでいく。

軍学校の校庭で飛鳥のビームをキャサリンが弾いたことの応用だった。

「ビーム、敵ホバー戦車に直撃」

強行偵察艦エリカが大和に報告する。

「計画終了。撤退します」

低くビル壁面に取り付いた巡洋艦娘は素早く壁面から離れる。戦艦娘と完全にタイミングを合わせたコンマ数秒の早技だ。

下位は巡洋艦と強行偵察艦のペアだが、調整しての砲撃なら巡洋艦でも戦艦と大差はないのだった。

「何だこれは、攻撃だど？」

戦車を襲う衝撃に叫ぶテロリスト。

ホバー戦車のテロリスト達には何も分からなかった。センサーに捕らえられた高エネルギー源はビルの向こう。ビーム兵器は曲げられない。

移動してと思ったら、次の瞬間だ。結果として直撃されたのだから、いきなりビームが進路を変えだろう。

「急いでシールドの強度を上げろ」

突き刺さったビームは十四本。シールドがあつという間に不安定になった。これでは反撃に回すエネルギーなどない。

「テロリストを休ませるな。次々に済射を続けるんだ」

再び戦艦娘からビームが発射された。同時に巡洋艦娘が移動、ビームをシールドで反射し、ホバー戦車にビームを直撃させていく。とにかく気づいたときにはビームが飛んでくる。そのたびに反射する場所は違う。

ときには超高層ビルの上近く。ときには人の背の高さと大差ない高度。場所は瞬間的に移動し予想も不可能。

ホバー戦車の周囲に展開し対空ミサイルを構えていたテロリストは何もできないまま虎の子がボロボロにされていくのを見ているしかなかった。

「右側面にビームが集中し直撃。どんどんシールドが不安定になって、このままではシールドの展開が不可能になります」

「蹴られているんだ。最初より明らかにビームの強度が落ちている。しかし敵が弱くなっている訳じゃない。正確にこちらのシールドの強度に合わせ調整している」

「このままではシールドが消滅してしまう。その後はこっちのエンジンをやって身動きを取れなくさせるつもりだ」

「だからといって防ぐ手段がない」

ホバー戦車の中のテロリスト達は地団駄を踏んで悔しがる。不吉な予想が開陳された。

生きながらオオカミに生肉を食られる大型の鹿。いやな連想ばかりが心の中に広がっていく。

実態は大型恐竜の群れに襲われていたのだから、ホバー戦車には何の救いもなかった。

「敵ホバー戦車のシールドが消えました。エンジンに直撃可能です」
強行偵察艦エリカが何度目かの報告を大和にあげる。

「できる限り簡単に修復が可能な場所はどこだ？」
すっかり余裕のできた大和がエリカに問う。

「継ぎやすいと言えば、戦車中央のエネルギー伝達管ですが？」

「聞いたか飛鳥？なるべく細いビームで切断しろ」

エリカの報告を飛鳥はそのまま飛鳥に伝えた。

「ま、待ってください。エンジンが稼働中に」

「主砲を発射しろ！」

何かを言いかけたエリカだが勝利を確信し浮かれきった誰もエリカの言葉など聞いていなかった。

「分かった。一撃でぶった切る」

当然のように大和と飛鳥も。

「エンジン稼働中に切断したらエネルギーの行き場がなくなって」

「伝導管粉碎。……行き場がなくなってる」

ビームを発射。少し興奮が収まった。何とかエリカに注意を戻した飛鳥は絶望的な表情のエリカに気づいた。

「行き場がなくなってエンジンが暴走。爆発します」

何とか言いたいことを言い終えたエリカだが前とは反対の理由で誰もエリカの言葉を聞いていなかった。

「爆発って、戦車がおシャカ？と言うことか」

天国から一瞬にしての地獄行きだった。大和の表情が暗転する。

「い、いいじゃない。元々ビームで灼いておシャカにする予定だったんだし」

もはや誰もが忘れていた設定を飛鳥が口にするが、それで場の空気が元に戻るわけではない。

「これまでの苦労を考えなければ、みんなが抱いた希望がなければ、それはその通りなんでしょうけど？」

消沈の面持ちでキャサリンが飛鳥に同意した。もっともここまで来ては、何の意味はなかったが。

「エンジンの内圧上昇中。もうすぐ爆発します」

何もかも終わった。淡々とエリカが報告する。

「エンジン暴走。総員待避してください」

その時戦車の内部でも同じような淡々とした声が響いていた。

「脱出だ。早く戦車から出ろ」

「くそ、陰険な真似をしやがって」

「わざわざシールドを無力したから命だけは助けるつもりかと思っ
ていたら、最後にはこれか」

口々に悪罵を口にしながら戦車内部をテロリストが走っていた。
さすが陸上戦艦。通路は長く、時間に余裕はなかった。

「結局、世の中なんてこんなものです」

そして戦車の外では定延が総括を終えていた。

「さっさと並べ。ぐずぐずしていたら日が暮れるだろうが」

若い国連陸軍兵士が目の手を挙げた男達に怒鳴る。戦いに敗
れ仲間の解放も人質の身代金も、結局、何一つ得るもののなかった
テロリスト達だ。

「全くパトロールのはずのお前達がテロリストの一員とはな。どう
りで手際よく迎撃してくれるはずだ」

薄汚れた国連陸軍の制服。飛鳥達も遭遇した第十二パトロール分
隊だ。

「これだけテロリストの中に我が軍の兵士が混ざっていたとは。あ
んな大きなホバー戦車だって奪取できるわけだ」

そのほかにもかなりの数の国連軍兵士の姿。元の仲間を拘束せざ
るを得ない国連軍兵士の表情も複雑だ。

「結局、戦車はこれか」

目の前の大破したホバー戦車に小さく肩を落としたモス軍曹が呟
く。

「まだ原型は残っていますし」

大和はできるだけ軍曹と目を合わせないようにして答える。

ホバー戦車の後ろ半分はまるで蒸しパンのよう膨れ、装甲がひび
割れていた。疲弊したエンジンにそれほどのパワーは残っていなか
ったらしく、戦車全体が吹き飛ぶほどの損害は出なかったのだが修

理にはかなりの日数を要しそうだ。

「それは確かにそうなのだが。途中での君達の活躍にもう少し被害が少ないかと？」

再び肩を落とすとモス軍曹は今度は戦艦娘達に視線を移す。

「確かに被害は大きかったのですが、ホバー戦車に乗っていたテロリストの命に別状はありません。バックの追求に何の問題もないでしょう」

「そうです。リーダーは一番安全なところでしょ？衛星のビームで灼いていたら今頃困ったことになっていたはずです」

自分達に矛先が向けられた。慌てて弁明に走るキャサリンと飛鳥だった。

「あれだけ壊れては、新しく作った方が金がかからないかも知れないな？」

モス軍曹の恨めしそうな視線に戦艦娘はさらに慌てた。

「だいたい飛鳥さんは落ち着きがなさすぎます。ちゃんとエリカの言葉を聞いてから行動に移せばこんなことにはなっていません」

我が身に累は及ばさない。ならば原因に責任を取ってもらおう。

飛鳥に皮肉な視線を向けるとキャサリンは肩をそびやかす。

「もっとはっきり言ってくればよかったのに。あんなトロい娘が強行偵察艦なんかやっているのが問題じゃない」

逆ギレ気味に飛鳥は叫び返す。飛鳥自身も自分の責任を痛感してはいたが、他人にはつきり言われるとやはり腹が立つ。

「ひどいです。人の言うことを無視したのは誰です？」

「あなたはアジア連合艦隊の旗艦でしょ。自分の非を棚に上げて」
エリカは当然だが反論に出た。キャサリンもアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊の旗艦としてエリカの肩を持つ。

「何ですって」

「やめろ、お前達。飛鳥は確かに悪い。しかしあのときは全員が興奮していて」

今にも主砲を撃ち合いそうにボルテージをあげる戦艦娘に大和は

危機感を覚え、両者の間に割ってはいる。

「何を他人事のように言っているのですの。そもそも最初にエリカに後で楽に直せる箇所をなどと、大和様が余計なことを聞かなければ」

「そうだった。あるとき大和が何も言わなければ、あたし達がそのままエンジンを撃ち抜いて終わりだったのに」

冷たい瞳のキャサリンと恨みのこもった視線の飛鳥。まさに藪をつついて蛇をだす、を地で演じてしまう大和だ。

「大和様って本当に頼りになるの？」

「なぜか逆に足を引っ張っているような？」

「ビーム反射作戦を考え出したのもゆかりさんだったし？」

「やっぱり兵器は実戦で使えてなんぼよ。カタログスペックだけじゃ？」

大和を横目で見、ヒソヒソと話す戦艦娘。

「ど、どうせ俺は駄目な奴だよ」

集中する戦艦娘達の冷たい視線に耐えきれず統合旗艦大和は喚いてしまい、さらに戦艦娘の冷たい視線を集めてしまうのだった。

友の中の戦艦

最終章 友の中の戦艦

「ここがアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊およびアジア連合艦隊の合同居室であります」

国際連合軍浮き名基地の寄宿舎内統合艦隊居室。大柄で年配の男性兵士に案内された立木ゆかりは大きな扉の前に立つ。

「色々と有り難うございます」

元々内気な方だ。厳つそうな男性兵士に緊張を隠せず、表情を強張らせたゆかりはペコリと頭を下げる。

「ここまでこられたお友達はあなたが初めてですよ」

「そうなんですか？」

意外に気さくな態度で接してきた兵士に、ゆかりの強張りが少しだけゆるむ。兵士の言葉にやはりとゆかりは少しだけ納得できた。

艦隊だけに戦艦娘は集団行動が基本だ。元々一人だけでも近付きがたい美人揃いの戦艦娘が三十人近くも固まって行動しているのだ。特に拒否する態度も取っていないが近寄る人間は現れず、本人達も人数がいるため、外に友人を求める必要性を感じない。

もっともそれ以上に接近しすぎては危険だからというのも事実だった。

……ここまで来る来ない以前に、あの娘達に友達と呼べそうなのは、あたししかないんじゃないじゃ？。

「……付き合ってみれば結構はじけてて、面白い娘達なんだけだな」

「……そうです。その通りです。どうか仲良くしてやってください？」

思わず呟くゆかりに、どこか父親に通じる雰囲気兵士も頷く。

「……………」

「いいえ。前に彼女達の教官をやっていたものですから。失礼しま

す」

戦艦娘とは縁の薄そうな年配の兵士の意外な言葉に驚くゆかりに軽く敬礼をし、男性兵士はそのまま歩き去っていく。

「本当に有り難うございました。さてと？」

とりあえず去っていく兵士に頭を下げた後、改めて大きな扉に向き直る。

「失礼します」

「いらっしやい、ゆかりさん」「よく来たね！」

扉を開けたゆかりに多数の返答が返ってきた。

「……何か凄い部屋？」

思わず一度はゆるんだ表情がまた強張る。

「良く来てくれたわね。基地内は広いから迷わなかった？」

少し甲高く良く通る声が室内に響く。

アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊旗艦序列一位戦艦キャサリンの金髪が、やけに細長い大広間の奥に見える。

レースをふんだんにあしらったネグリジェ。本人の風貌も相まってゴージャスそのものの雰囲気だが、そこまではいい。

しかし彼女が座っていたのは畳が敷かれた上の煎餅布団。金髪の外国人娘が洋室にベッドではなく畳に布団？

違和感がバリバリだ。聞いてみたいこの部屋は何？何で布団？

「何を驚いているの。早く入ってきなよ？」

続けて呼んでくれたのは澁刺とした雰囲気ハンサム系かもしれない美少女。やはり部屋の奥に座っていた。

こちらは軍学校の制服を着たアジア連合艦隊旗艦序列一位、戦艦飛鳥だ。当然というかこちらも煎餅布団の上だ。

「少し狭いけど悪いな。前はみんなベッドだって入った、もう少しまともな部屋で寝ていたんだけど」

申し訳なさそうに謝るあぐらをかいた統合旗艦大和。一番奥の布団に座っていた。

統合旗艦で名目上は一番偉いのであそこが上座なんだろう。

「何が悲しくてこの私がこんな地面で寝ないといけないのかしら？」
キャサリンが不満たらたらで漏らす。

戦艦娘達の布団は左右に分かれ、ブラツと並べられていた。布団の上にはその布団で寝ているのだろう様々な服装の戦艦娘達。

白人と黄色人、それぞれの艦隊別に寝ていた。両艦隊と均等の距離を置くため、大和の布団だけが真ん中だ。配置としては教室とにている。艦隊序列に従い、旗艦である戦艦飛鳥と戦艦キャサリンが一番奥の布団に位置していた。

「……牢名主？」

呆然と呟くゆかり。父親の見ていた古い映画。何となしに一緒に見ていた時代劇。牢屋の奥に何枚か敷いた畳の上。

デジャブがゆかりを襲う。ゆかり自身は知らないが、乱暴者を押し込んだという経緯を考えれば、実に言い得て妙のネーミングだった。

「大和は牢名主だったんだ！」

いきなりツボに入ってゆかりは吹き出す。

「何だよ牢名主って？」「一番偉い人ってこと」

間違っではないが、正確でもない答えをゆかりは返す。

「こっちにきなよ。お客さんなんだから隅っこにいちや駄目だよ」

飛鳥が自分の横を開けるとゆかりを手招きする。

「え、えっと。じゃあ失礼をします」

左右からの戦艦娘の視線が何か気恥ずかしい。ゆかりは急ぎ足で飛鳥の横に急ぐ。

「じゃあ、ここがゆかりの席ね」「楽しんでいてね」

「有り難うございます」

飛鳥とキャサリンに改めて挨拶を交わし立木ゆかりは腰を下ろす。

「それでは立木ゆかりさんをお迎えしての、第一回両宇宙艦隊合同パジャマパーティを始めましょう」

頃もよしと見てアジア連合艦隊序列二位戦艦定延、ちょっと艶っぽいお姉さんがゆかりの呼ばれた目的。

少女達の親愛の情を深めるためのパジャマパーティーの開催を宣言した。

「全員、飲み物、食べ物を出してよし！」

「あたしはジュース！」「こっちはポテトチップス」

無数の少女の歓声が沸いた。両艦隊所属の戦艦娘の黄色い声が部屋中に充満していた。

アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊序列二位戦艦ゴルドバ、キリツとした美少女の号令一下どこに隠してあったのか何十ものコンビニ袋が持ち出された。

「あなた達、何をやっているのですか？」

唐突に極寒の南極を思わせる冷たい声が一同の上に降り注ぐ。白人艦隊序列三位戦艦スージーだった。

ゴルドバに似ている冷たい風貌。ゴルドバが厳しさを前面に押し出しているのなら、スージーは理知的な冷厳さを押し出していた。

どちらにしても怒らせたくはない相手だ。

良くも悪くも軍人氣質。いつもは気の合う相手であり艦隊序列上位でもあるゴルドバの決定に異を唱えたことのないスージーの意外な剣幕に戦艦娘達が静まりかえる。

「……あんたも納得していたじゃない？」

今更文句を言うの？眉がひそめられ不機嫌が形作られた。

小さな声でアジア連合艦隊所属、艦隊序列五位、小柄で悪戯っぽい瞳の持ち主、戦艦扶桑が突っ込む。

「パジャマパーティーでパジャマに着替えないでどうするのです？」

スージーが冷たい声で再度告げる。もっともな提案だった。

非常にわかりにくい冗談だったが。

「この間のランジェリーショップで買った過激なやつ着ようっと！」
「私だって負けていられない！」

途端に一度は静まった大騒ぎが再燃した。普段着だった戦艦娘が勢いよく着ていたものを脱ぎ捨てる。

私物を入れたバッグを開ける娘。唯一の空き地。

大和の布団の横に積み上げてあった、まだ未開封のランジェリーショップの段ボール箱に駆けつけ手早く開けめばしいものを物色する娘。

華やかな下着姿の娘が部屋にあふれかえった。

「こうなったらあたしも？」

中には既にパジャマに着替えていたのに、新たなナイトウェアを求めて段ボール箱に突撃する戦艦娘までいる始末だ。

「ゆかりも着替えましょ。どんなパジャマ持ってきた？ 替えの下着だって持ってきたんでしょ？」

「何だったらショップからもらってきたのがだいぶ余っているから使ってみる？ 結構いいランジェリーやナイトウェアもあるから」

針葉と若竹のアジア連合艦隊所属の強行偵察艦娘がゆかりを囲む。二人とも学校指定のジャージという地味な格好だ。

序列が最下位とブービー賞なので、ゆかりの案内役として駆り出されたらしい。

「大和君がいるのよ。男の目が！」

あわててゆかりは手を振る。一度は見られてはいたが、いくら何でも自らは。

「大丈夫！」 「大和も毎日なんだから慣れているから」

平然と針葉と若竹はジャージを脱ぎ捨てると、強引にゆかりの手を取ってランジェリーショップの段ボール箱に小走りで向かう。

かわいらしいデザインとセクシーさを同居させたショーツとブラ。ブラのカップの上半分は半透明。

控えめながら、真っ白な膨らみが半分見えていた。

「ちゃんと大和は目を閉じています。あたし達がパジャマを着て、もう目を開けていいと言うまで目を開けませんから」

大和と段ボール箱に近くに寄ったとき、ゆかりに得意げに言ってきたのは序列五位の戦艦扶桑。

小柄な肢体を愛らしいピンクのパジャマに包んでいる。胸等が慎ましいので色っぽい格好はちょっとらしい。

「……本当？前はしっかり見ていたのに？」

ゆかりが見ると本当に大和は下を向き目を閉じていた。

「あのときは隠れていましたから、まだ。いくら何でも正面からはさすがに覗いたりはしませんよ」

「それは男なんですから当然、興味はあるのでしようが、まともに見るなんて、大和様にそんな度胸はありませんって！」

ランジェリーショップでの大和の行状を思い出すゆかりに、強行偵察艦娘達はケラケラと笑って見せる。

「本当にいいの残ってる？」

「いくらでも有りますよ！」「清楚なのも過激なのも選り放題です。」

「じゃあ、急ごうか？気に入るようなのを目の前でさらわれたら悔しいもの！」

すでに無数の戦艦娘がアリのようにたかっていた。負けてたまるか、三人は同時にショップの段ボール箱の山に飛び込んだ。

半透明、フリル、シンプル。派手な原色、清純な白、ベージュ、ベージュ。ブラジャー、ショーツ、スキャンティ、キャミソール、ペチコート。パジャマ、ネグリジェ、タンクトップ、ホットパンツ、ベビードール。

目移りと言うより、目が回りそうな量と質と種類のランジェリーが三人を待っていた。

「これなんかどうです？」「こっちは本当に素敵！」

「待ってよ。どれだけ出すの？」

針葉と若竹が次々とランジェリーを取り出し、困惑しているゆかりの体に確かめるように当てては、周りに撒き散らしていく。

下は畳。後で回収すれば何にも問題はない。

「このレースなんか感激です！」「どうしても決められない！」

「いいから、あたしはいいから。自分達の着るのを選んでよ！」

悲鳴混じりに二人に言うゆかり。完璧にハイテンション。その上、ゆかりとしてはパジャマなどのナイトウェアを見てみようと思って

いたのだが、針葉と若竹が取り出してくるのはショーツやブラがメインのランジェリーばかり。

ゆかりの目的と二人の選定に齟齬か生じていた。

「ああっ、もう！じれったい！これでは本当に似合うのか分からない！」「

「下着を直接身につけないでどうしようって言うのよ？」

ついに恐ろしいことを言い出す。まさか大和の目の前で裸になれと言うのだろうか？

実際、部屋の隅で仲間についたてを作ってもらっている戦闘艦娘もいるから、絶対にあり得ないとは言いがたい。

「あ、あたしこれがいいから！」

仕方がない。ゆかりは適当な部屋着的なものを選んで段ボール箱から離れる。

「そうなんですか？」「まだまだ品物はあるって言うのに。欲がないです」

あからさまに肩を落とす針葉と若竹。ゆかりは申し訳ないと思うものの、我が身が何より大切なのだった。

「じゃあ、あたしは戻っているから」

言い残すと再び飛鳥の元に戻っていく。

「分かりました。あたし達は自分の着替えを探します」

「針葉これなんかどうかな。着替えてみる？」

もう去っていくゆかりの方を見ようもしない。ゆかりが見ると若竹の手にあるのは漆黒のスキヤンティ。

あれを針葉に？似合わないかも。見ている間に針葉は深紅のスキヤンティを取り出し、二人で部屋の隅に向かう。

ああっ、チャレンジャー！最後まであの娘達に付き合わないで本当によかったと思うゆかりだった。

「改めて飲み物と食べ物を用意を！」

ゴルドバの命令いっか。混乱の中粉碎されないよう元の場所に戻

されていたコンビニ袋の大群が再び戦艦娘の前に並ぶ。

「あたしはポップコーンを広げるから」「こっちはポテトチップ」
戦艦娘達の声が大部屋に響く。パリンと言うスナックの袋が破られる音がさらに続く。

「あなた達ものが食べられたの？」

隣に座るアジア連合艦隊旗艦序列一位戦艦飛鳥にゆかりは首を向ける。いままで学校は午前中だけ。宿舎に来たこともない。

だから食事している姿を見たことがない。だいたい元が単なるホログラフィ。食事が出来なくても何ら不思議はなかった。

「元になった人間の生態情報に影響されているみたい。食事も出来るし味だって分かる。五感もあるし事実上人間と同じ」

小首をかしげ飛鳥は返答してくれる。

「もつとも、栄養とかカロリーとかは関係ないかもしれません。この体を維持していくには小型の原子炉程度のエネルギー源は必要だし、とても食事程度でまかなえるわけでもないですから」

大和の向こう側に座っていたアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊旗艦序列一位戦艦キャサリンが補足をしてくれた。

「見た目はともかくプラズマキャノンも使えるし。半端じゃないエネルギーが必要だろうな。それにゆかりさんは知らないだろうが、飛鳥やキャサリンは本来の体重が百トン近くあるから」

サラッ和大和がとんでもない事実を明かしてくれた。

「いまは質量管制をしているから普通に歩いていますけど、切ってしまうえば確実に床を踏み抜くでしょうね」

頷きながら言うキャサリンの再補足にゆかりは驚くしかない。

「それでも万単位であった元の体重からすれば一パーセント以下だから、ある種、凄いダイエットをしたようなものよ」

ニコツと飛鳥が邪気のない笑みを浮かべた。

「……申し訳ありません。みんなが待っていますから」

恐縮したようにゴルドバが言う。見れば戦艦娘達はパーティまだ始めないの？とばかりゆかり達を注視していた。

「ご免なさい。みんな待っていたのに話し込んじゃった」

ゆかりはあわてて両手を合わせ謝意を示す。

「では大和様、パーティ開始の合図を」「乾杯のリードをお願い」
頃はよしとキャサリンと飛鳥が紙コップを持ち、世話係の針葉が
ジュースを注ぐ。

「どうぞどうぞ」「お礼に注いであげる。」

それを見て戦艦娘達も乾杯の準備に入った。旗艦であるキャサリンと飛鳥はともかく、残りの娘達はお互いに注ぎ合っている。

「では大和様も」「あたし達が注いであげる」

「済まないな、頼む」

最後に統合旗艦の大和のコップにキャサリンと飛鳥が飲み物を注いで、全員の乾杯の準備が完了した。

基本として下位の者が上位の者に。今時珍しい律儀さだが軍として、序列は大切に行っている両艦隊だった。

「立木さんを迎えての合同パジャマパーティを始めよう。では乾杯！」

統合旗艦大和は手のコップを軽く前に突き出す。

「乾杯！」「乾杯！」

キャサリンと飛鳥が唱和し、左右から自分の紙コップを大和のコップに当てる。

「乾杯！」「こちらこそ！」

同時に大勢の女の声が華やかに部屋の中を飛び交う。戦艦娘と言えどこの辺りは、普通の女の子と何ら変わるところはなかった。

「このクッキーあたしが作ったんだ」「美味しそうだね」

さすがに戦艦娘の変化といえ、女の子の集まり。手作りのお菓子が回され、つまんだ女の子の黄色い声が飛び交う。

「大和様、このスナックをどうぞ」「こっちのジュースもおいしいよ」

華やかな空気。周囲の雰囲気負けじと、さっそくキャサリンと飛鳥は同時に大和に食べ物差し出す。

「さすがに一緒にはもらえないから」

有り難くはあっても一度には困る。目を白黒させている大和。

「大和どのあたしのスナックとあたし自身も召し上がってくださいな」

そこにさらにベタなことを言いながらにじり寄っていく定延。いきなりのハイテンションだった。

「ゆかりさん、さっきはちょっと冷たかったですよ?」

「せっかく色々と着てもらいたかったのに」

最初の給仕が終わり、後は自由とばかりゆかりの前に座り込み、さっそく愚痴を言ってくる針葉と若竹。

「いやっ、ちょっと過激だったし、趣味の方向があたしと違うというか?」

強行偵察艦娘の二人に迫られ、手を必死に振りつつ防戦に懸命なゆかり。

布団の上に座った三十人も美少女。その中にたった一人の男子。波乱含みのパジャマパーティの始まりだ。

ゆかりの歓迎パジャマパーティが始まって一時間が経っていた。

女の子三人で姦しいのなら、三十人ならどう言えばいいのだろう。

「楽しいな。人間になってよかったよ。酒は飲めるし飯も食える!」

満面の笑みで統合旗艦大和は高く酒の入ったコップを掲げていた。パジャマパーティだから大和もパジャマだ。

襟は大きく開き逞しい胸板が覗いていた。

前には十本近い酒の瓶とつまみとしてのスナック類が置かれていた。

「お酒はいいですわ。日頃の憂さがスーッと晴れていくようです」

大和の右隣でアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊序列一位、旗艦の戦艦キャサリンが頬を赤く染めていた。お嬢様っぽいフリル過多のネグリジェの裾は大きく乱れ、太ももまで顔を覗かせた真っ白く形の良い足が、ハの字となって広がっている。

吐く息が熱い。アルコールの匂いも強いが、それは全員なので誰も気にしていない。

「ちょっとしたことでも文句を言われてこんな元倉庫に島流し！お酒くらい飲まないとやっていけないわよ！」

左隣に侍っていたのはアジア連合艦隊の旗艦序列一位の戦艦飛鳥。こちらはまだきちんとパジャマを着てはいたが頬の赤さはキャサリン以上だ。

結構図々しことを言いながらつまみのスナックを大和の前からさらう。そのままバリバリとかみ砕く。

もはや遠慮という言葉はないらしい。さすがに熱くなってきたのか？しきりに手で顔を扇いでいた。

「……熱いし、もう脱いじゃお！」

飛鳥はいきなり立ち上がると首を左右に二度三度と強く振ってから、手早くパジャマを脱ぎ捨てていく。

上は普通だったが下は結構きわどい紐パンツ。大和の後ろにはまだまだランジェリーの在庫が眠っていた。

どうやら過激な品物から捌けていつているらしい。

「飛鳥さん、脱いで大和様にアピールですか？」

大和の頭越しにキャサリンが飛鳥に絡んでくる。目が据わっていた。

「だったらキャサリンも脱げばいいでしょ？あんたは体が自慢だったんでしょが？」

何のためらいもなく飛鳥は言っただけ。こちらもしっかり目は据わっていた。

「そうですね。格の違いを見せてあげるのもいいことですわ」

飛鳥に対抗しキャサリンも立ち上がった。

「ご覧なさい。女神の肢体を」

飛鳥より背の高いキャサリンは文字通りライバルを見下す。肩紐を外されたお嬢様ネグリジェがはらりと足下に落ちる。

「貧弱な小娘とは違うのですよ」

元々の背の高さも違うが、これまたフリル過多のお嬢様ブラジャーに包まれた胸のボリュームの差はそれ以上だった。

「お、大きければいいと思っっているの？そんなの下品なだけよ！」

怯みまくる飛鳥。圧倒的な戦力の差に、負け犬の遠吠えに走るしかない飛鳥だった。

「まあつまあつ、女の子は全員いいところがあるからな。二人とも酒を飲んで仲直りだ」

そこで大和が取りなしに入った。普段ならもう少し退いているところだが、酒を飲んで気が大きくなっている大和は頓着しない。

「そうね。都合の悪いことは酒を飲んで忘れてしまうのが一番かな？」

飛鳥は無駄な戦いを避け畳に膝をおろす。

「私も下手に追撃をしていても不毛なだけです」
続いてキャサリンも腰を下ろし酒盛りの続きが始まった。

「よし二人ともコップを出せ。注いでやるから。立木さんもしっかり飲みなよ」

「頂くね」「頂きますわ」

コップを突き出す飛鳥とキャサリンに手近にあったワインを注ぐと、大和はゆかりにもワインの瓶を向けてきた。

「い、いいのかな？あたし達まだ学生なんだけど？」

仕方なく手元の紙コップにワインをもらいつつ、飛鳥の横に座らされたゆかりは頭を抱えていた。最初は確かにジュースだった。しかし果実繋がりで缶チューハイ、缶繋がりで缶入りカクテル、さらにいまもらったワインが出て、今はもっと強そうな酒が戦闘艦娘達の間を行き交っている。

「大丈夫です。あたし達は人間じゃないから何をしてもいいんです」
「戸籍も出生届も関係有りません！ゆかりさんもっと飲んでくださいー！」

何の躊躇もなく針葉と若竹は言い切る。完全に目が据わった針葉と若竹。二人とも上半分が透明なブラ、下は履き替えマイクロビキ

ニショーツというこの二人にしては過激な下着姿だ。最初はパジャマを着ていたのだが酒が回って熱くなり、今はこの姿だ。

偵察艦娘ズはゆかりの前に女の子座りで座り込み、自分達も次々とお酒を開けながら、ゆかりに飲んだら一気に正体を失いそうな強い酒をしきりと勧めてくる。

「いいわよ。あたしはこのカクテルで十分だから」

大和からのワインを脇に置き、結局家から持ってきたごく普通のパジャマ姿のゆかりは辟易としながら、ちびちびとカクテル缶を開けていく。完全にお酒をシャットアウトするには場の勢いが強すぎた。

「針葉、あまり人にお酒を強要するのはマナー違反ですよ」

「あたしはそんなことが言いたいんじゃない！酒を酌み交わしてこそその友情じゃない！」

「大丈夫です。ゆかりさんはわかっています。今は調子を整えて、この後、このラム酒をラッパ飲みしてくれませう」

完全な酔っぱらいの論理。若竹は大きくラム酒の瓶を掲げ、針葉はそんな友を感激の面持ちで見つめる。全然大丈夫ではなかった。

「今夜はここで寝てしまおうでしょ？だったらいくら飲んでも大丈夫です！」

「いい葉が用意してあります。二日酔いなど過去のもんです。痛飲した者が宴会の勝利者なのです」

何とも幸せそうにニコニコと笑っている針葉と若竹だった。もともと手にはしっかりとラム酒の瓶。とても油断はできないが。

「困ったものです。同じ強行偵察艦として恥ずかしいです。強行偵察艦は常に冷静に周囲を確認し本隊の安全を図るのが仕事なのに」

針葉達の醜態に眉をひそめたアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊の側の強行偵察艦序列十三位のエリカは同じ強行偵察艦仲間の十四位クルベ十五位ローレヌとともに、針葉達の後ろに座りゆかりと同じくちびちび缶カクテルを舐めていた。

こちらはごく普通のパジャマ姿だ。

「そうよね。こんなに乱れちゃ」

同意の意を込めゆかりも大きく頷く。大人しくしつかりとした性格のエリカはさすがに冷静とゆかりは感心した。

「ですから確認させてください」「……何を」

針葉の横から回り込んできた妙に強引なエリカにゆかりは違和感を覚える。

「下着です。胸の張りです。残念なことに着替えの場面を見逃していました。強行偵察艦として失格です」

ゆかりがよくよく見ればこちらにも完全に目が据わっていた。どちらが一番下位だからストレスがたまっているのか。

強行偵察艦以前に女の子として失格だった。

「お願いです。強行偵察艦の本分を果たさせてください！」

言いながらエリカはゆかりのパジャマを引きはがそうと手を伸ばしてきた。

「落ち着いて！やめなさいエリカちゃん！」

強引に振り払うわけにも行かずゆかりは身を縮み込ませる。

「エリカの責務を果たさせて！」「お願いします！」

エリカに気を取られている隙にクーベルとローレヌが若竹側から迂回、エリカとともに挟撃してきた。さすがというか艦隊らしく見事な連携だ。

「やめなさい！勘弁してよ！」

ゴロゴロともつれ合いながら布団の上を転がって行く四人。何かの余興と思ったのか、周りの戦艦娘は生温かく見守るだけだ。

「ああっ、お酒が残っているのに」

「同じ強行偵察艦なのに、なぜあたし達の邪魔をするの？」

ただ針葉と若竹は悲しそうな顔をしていたが、これ以上お酒はまっぴらなゆかりとしてはそちらに捕まるわけにも行かない。

「うるさい！静かにしてなさい」

突然エリカの頭がはたかれた。憤然とした口調。エリカよりも明らかに背の低い、小柄な娘だ。

「何をするんですか？人の探求心を邪魔しないでください！」

線の細いエリカはキツと振り向くと、一見聞こえのいい抗議を繰り出す。

「黙れ！艦隊は序列がすべてだ！あたしの序列を言ってみろ？」

背は低いが態度は大きい。アジア連合艦隊の序列五位、戦艦扶桑だ。

対して強行偵察艦のエリカは序列十三位。

艦隊は違っていても五位と十位以下では勝負にならない。

「ちよつと背が高いからと思って調子に乗るなよ。このヒヨロヒヨロ娘」

内部では小悪魔的で通っているが、ここまでくると単なるいじめっ子だ。それも小なりと言えど権力を背負っているだけに質が悪い。

「何が確認だ？自慢のセンサーはどうした？こんな時に使わないでどうする？忘れてるのか、相手はただの人間だ。シールドなど持っていないぞ！」

畳み掛けてくる扶桑。ゆかりはこれは悪い方向にと焦る。

「そうでした。スキャンします。皆さんとデータ共有です。大和様にもお知らせします！いつかは役に立つ情報です」

完全に壊れた雰囲気でエリカがゆかりの全身を舐め回すようにスキャンしていく。

「こらっ、やめなさい！役に立たないから！絶対役に立たないから！」

必死に手を振り回しエリカのセンサースキャンを阻もうとするゆかりだが、そもそもどうすれば妨害したこととなるのかすらわからない。

「スキャン完了！これからスキャンの結果を発表します」

そのまま強行偵察艦娘のスキャンは終わった。

「これはなかなかの逸材！大人しそうな顔の裏で」

一番上座で大和が感心したように呟く。

「こんなデータが」「胸はあたしより大きいのね」

ザワザワと戦艦娘達がざわめく。ゆかりには全然分らないがデーターの共有が完了したらしい。

「余計なお世話かもしれないですけどパンツ少しへたってますよ」
戦艦娘の一人がお酒のせいだけではなく、赤い顔のゆかりに注意してきた。本当に大きなお世話だった。

「全く乱れすぎだ。酒は楽しむものだ。こちらが飲まれるものじゃない」

「その通りです。羽目を外さない奴も困りますが外しすぎはさらに困ります」

両者ともシースルーのベビードール姿。スキャンティが丸見えの状態で白人艦隊序列二位戦艦コルドバと序列三位戦艦スージーが重々しく頷き合う。

会話と外見がちぐはぐと言えbachぐはぐだが、ともにかわいいうんジェリーが趣味なので仕方がない。

「なかなか見栄えがするなお前達」

突然ゴルドバ達に声かけられた。見ればゆかりのデーターをダウンロードして興奮気味の大和だ。真っ赤な顔。女の子の秘密を知って、尻が下がり機嫌が良さそうだ。かなり酒を飲んでいた。

ここまで酔ってしまえば気配りも失せるらしい。いつもはまともに見ない戦艦娘達の肢体に無遠慮な視線を這わせていた。

「私達の体が見たいのですか、大和様？」

「御覧になりたいのなら存分に御覧ください」

自分達の肢体は艦隊でも一番なのに。ゆかりの次か。少し腹が立つ。からかってやるか？目と目で会話。いつならこんなことはしないけど、しっかり酔っていたゴルドバとスージーは二人で顔を見合わせた後、スツと立ち上がった。

酒を飲んで気持ちのたがは外れても体の制御は失わない。言うだけ有って足がふらつくなどの醜態は一切見せなかった。

はつきりと言って男好きのする体だ。胸は大きく形も良く。腰はキュツとくびれ、尻は魅惑的に張り出している。

扇情的な雑誌の表紙を飾っていても何の不思議も感じない。

「胸をもっと寄せて強調しようか?」「お尻の方が好みとか?」

ゴールドバは前屈みになり大きな胸をさらに持ち上げる。乳房が柔らかくたわみ、ブルンと揺れた。

スージーは後ろを向くと中腰になりお尻を突き出す。

ちょうど大和の目の高さに合わり、目の前一杯に小さな布に股間辺りがほんの少し隠されただけの真っ白な山が二つ。

素面ではとてもできないサービスぶりだ。

「どうです。興奮します?」「大きくなります?」

「い、いえ!もう勘弁してください!」

思わず大和は平伏していた。ゴールドバとスージーは全然笑っていなかった。内面はともかく、あくまで冷静そのものの表情。

逆に扇情的な姿が恐怖しか感じさせない。

「よかったらスキヤンティも脱ぎますか?もう一回見られていますから、私は全然構いませんよ」

「……………」

追い打ちをかけてやるか?ゴールドバに静かに問われ大和は何も言えず、ただ震えるしかない。

「全く何をなさっているのですか?統合旗艦殿を脅かしてどうしようというのです?」

大和の危機を救ったのはアジア連合艦隊副旗艦艦隊序列二位、ゴールドバ達と同じフリルで飾られ半透明、扇情的なベビードール姿の戦艦定延だ。

胸を突き出すゴールドバと大和の間にスルリと入り込むその動きは肉食獣を思わせた。

「……別に胸を見せていただけだが」

自分と同格の副旗艦、定延の登場にゴールドバはしれっと言う。

本当ならゴールドバ達を監督しなければいけない両艦隊の序列一位、旗艦であるキャサリンと飛鳥は既に酔いつぶれていた。

もっともそれを言うてしまうと統合旗艦である大和はキャサリン

達よりも上位の立場だが、今となっては有名無実でしかない。

「中途半端ですね。見せるだけですか？それでは本当に殿方は満足なさいませんよ」

定延の呆れたような口調に、両副旗艦の視線が絡み合う。

「ならば定延はどうなさるのです？まさかこんな場所では不可能なことをなさってしまうとか？」

まずいと内心では焦っても勢いが止められない。挑発的にゴールドバは笑う。

「まさか。単に抱き締めてあげるだけです」

言うどフワツと大和を抱く定延。

「迷子の子犬を抱くようなものです。男の方を安心させてあげるだけです」

座っていた大和に柔らかく抱きつくど、そのまま定延は動きを止める。言葉の通り軽く抱き締めたただけだ。

「ゴールドバ仲良くいたしましょう」「……………」

首だけをゴールドバに向け定延は言う。

「酒の宴の戯れ。ちょっと脅かしただけ。下手に口を出し失礼しました。一緒に大和殿に抱きついてそのまま水に流しましょう」

大人の対応だった。

「そうですね、定延。ちょっとした悪戯心だったのです、大和様。あそこまで退かれるとは正直思いませんでした。お二方とも、どうかお許しを」

止めるに止められない。酒も入って少し意固地になりかけていたゴールドバ。定延の申し出は渡りに船と、大和の後ろから抱きつく。

大和の広い背中が気持ちよくゴールドバは穏やかな気持ちを取り戻す。だから気付くのが遅れてしまった。

「……………」

ゴールドバは半分呆けたような呟きを漏らす。トロンとしつつあったその目にとんでもない光景が飛び込んできた。

「大和殿、悪戯が過ぎますよ」「定延の胸は柔らかいんだろ？」

統合旗艦大和はベビードールの前を開いたアジア連合艦隊副旗艦、艦隊序列二位戦艦定延の豊かな胸に必死に手を伸ばしている最中だった。

「駄目ですってば」「……フニャとしている、定延」

チョンとだが指先に触れる柔らかく弾力のあるもの。焦った大和にクスクスと笑う定延と意馬心猿、情欲のまま息を荒くしていた大和。

ゴルドバの理性を吹き飛ばすには十分な威力だ。

「何をしているこの淫婦？定延、演技かと思っていたら地だったとはな」

バツと体を起こし定延を見るゴルドバの視線は極限まで険しい。

「酒の上の冗談です。いいではないですか？」

さすがに流せないみたい。いつのように軽くかわそうとする定延だが、少々無理があった。額からは冷や汗が一筋。

「お風呂場の時といい、どうしても私に綺麗に終わらせてくれる気はないのですね？」

宿舎大浴場の破壊も定延と大和絡み。再度の行いに怒りもひとしお。低い呪詛のような呟きがゴルドバの唇から漏れる。アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊副旗艦、艦隊序列二位戦艦ゴルドバの体に縦線が走った。

「んっ？ゴルドバどうした？」「目が血走っているわよ？」

ゴルドバの低いうなり声に目を覚ました両艦隊の旗艦、序列一位、戦艦キャサリンと戦艦飛鳥の目の前でゴルドバのクワガタの角型の主砲はエネルギーの充填を終え、今まさに発射されようとしていた。「外道達を処分します。ゼロ点発射なので防御をよろしく」
部屋を凄まじいエネルギーが荒れ狂った。

「酷い目にあった。だんだんゴルドバも容赦がなくなってくるな」
恐怖のあまり強く凝った首筋をグリグリと動かしながら統合旗艦大和。宿舎の裏庭、無数の星が瞬いていた。

「女の子だったら誰でも怒ると思いますよ？」

大和の隣には立木ゆかり。心の中で先程のでき事を再現してみる。余裕を持っていかに可笑しそうに笑う定延。彼女の豊かな胸に手を伸ばす大和。眉はだらんと緩み、鼻の下が極限まで伸びていた。「あたしだって怒っているんですから」

大和に向け唇を尖らす。ゆかりも正直よい気はしない。ゴルドバのきついお仕置きで気が晴れたが、そうでなければ正直今二人でいたかどうかかわからない。

「悪かったよ。もう少し気を遣うべきだった」

頭を下げる大和の頭から焦げた髪の毛の固まりがポトリと落ちた。

「……まるでコント。これで部屋の中は無事だったんだから」

驚くよりも呆れるゆかり。戦艦娘との時間は短い、中身の濃い時間。何度も戦艦娘の集中攻撃を受けていた大和。

もはやこんな程度で驚くようなゆかりではない。むしろ砲撃の被害の少なさに感心してしまう。

最初は部屋そのものが壊滅。ランジェリーショップでは商品の被害だけ。今回はゴルドバの暴発にもかかわらず、部屋には何の被害も出なかった。

「慣れは恐ろしいな。シールドの張り方が精妙になる一方だ」

キャサリンや飛鳥、その他の戦艦娘がダンゴになって防御、それでも残る隙間を小型艦娘が潰していく。

見事なコンビネーションだったと大和は思い出す。

「それでも部屋の中は目茶苦茶に散らばっちゃて。みんなで片付けると言っていたけど本当にあたし手伝わなくてもいいのかな？」

心配そうにゆかりは呟く。大和と二人きりとなって裏庭に立っているのはそのため。

「お客さんに掃除は不作法だからな。俺は邪魔だと追い出されたし」いつもはみんないるしここで一つ。心の中でチャンスと思いながら、大和はゆかりにさらに近付く。

「この間二人で会ってもいいと言っていたし、今度はいつ会ってく

れるかな？」

大和目線では滑らかなつもりゆかり目線ではギグシャクとした動きで、統合旗艦は少女の細い指に自らの手を伸ばす。

「一度といったでしょ？今度会ったら二度目になっちゃうじゃない」
これくらいはいいかと大和に指を任せ、ゆかりは残念そうに言う。
「こんなのノーカウントじゃないか？遊園地でも何でもいいから、そっちの言う通りでいいからさ」

ここで退いては男ではない。緩く絡んでいた指に力を入れ、尚も大和はゆかりを引き寄せようとする。

「遊園地は確かにいいけど、あなた達って自由に外出できた？この間だって特別に許されたんでしょう」

大和を軽く振り払いながらゆかりは逆に聞き返す。

「それに二つの艦隊の娘達だっているでしょ？いつでも行けるあたしとは違うんだから、あの娘達を連れて行ってあげたら？」

確かに大和に対する気もなくはないが、今は戦艦娘達との関係が気になる。やんわりと拒否の意を示すゆかりだった。

「そんなこと言わないで。僕の間を見てよ？ねっ、一緒にもう一度だけ？」

諦めるにはまだ早い。自分の顔に自信のある大和はまともにゆかりに目を向け、再度の説得に入る。

「今は考えられないから、後でいいでしょ？学校でだって会えるし？」

「じゃあ、ちょっとだけ。ほんのちょっとだけ」

美形の大和に怯んだのか何とか目を背けるゆかり。これは気のある証拠だと大和は考えた。実際に大和は絶世の美少年。

宇宙艦隊全体のイメージ向上にと選ばれた程だからそれも無理はない。

しかし大和の考えは甘い。ゆかりは戦艦娘の顔にすっかり慣れていたのだから。男女の違いはあっても絶世に近い美形にはすっかり耐性ができていたのだ。

「いい加減にしてよ！後でと言っているのが分からないの？」

「そうですわ。みつともない。統合旗艦としてのプライドはおあり？」

「強引はいけないよ。女の子には優しくが基本でしょ？」

ゆかりの言葉に被せるように別の女の子の声が裏庭に響く。

アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊副旗艦艦隊序列一位位戦艦キャサリンとアジア連合艦隊旗艦艦隊序列一位戦艦飛鳥の登場だ。

「何でお前達がここに？後片付けをしていたの？」

「こんなイベント、あたし達が見逃すわけじゃないじゃありませんか？そんなの強行偵察艦の本性に逆らっています」

ひょいっと顔を見せたのは針葉とエリカだった。

「だが恋話に興味津々なのは偵察艦だけではなく、女だったらすべてだろう」

「そうですとも。私達だって」

続いて顔を見せたのはいかにも堅そうなアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊副旗艦艦隊序列二位戦艦ゴールドバと序列三位戦艦スージীরコンビ。

「これまた面白そうなことを」「やーい、振られ虫！」

口々にからかいの声を上げながら裏口から木々の影から、そして玄関から回り込んできたのか、建物の影から続々戦艦娘が姿を現わす。

「まだデータ共有した感じはなかったのに。なぜそんなことを？」

後から出てきた娘までことの顛末を知っていた。まだ見てもいいはずなのに。大和は思わず驚く。

「甘すぎるわね。あたし達のセンサーの能力は知っているでしょ？裏庭で起こっていることくらい、宿舎の中にいたって関係ないわ」

アジア連合艦隊序列五位戦艦扶桑が得意げに言ってきた。

「そんなこと。面白そうと思えば出てくる程度のことわかっていさ。だからダミーのビジュアルデータを流しておいたの？」

知られてからかわれたくなかった。それ以上にせっかく女の子を

口説いているのに邪魔が入るのも困る。

だから誤魔化そうと事前に普通に会話しているだけの映像を作って、それをリンクに流しておいたのに。

思わず大和は頭を抱える。

「いくらダミーデーターを流したって、直接見ている分には関係ないものですから」

最後にアジア連合艦隊序列二位の副旗艦、戦艦定延が草むらの影から姿を現す。地面に伏せていたのだろう。パタパタとスカートから土塊をはたきながら。

「定延、お前は罰当番だといっていたのに？」

驚く大和。さすがに統合旗艦である大和には課せなかったが、艦隊仲間の定延は別。さっさと部屋を追い出され、特別なところの掃除を命じられていたはず。

「これが罰当番なのです。暗闇の中剥き出しのジメジメとした地面に寝ころんで。酷い目に遭いました。」

シレっと言うが定延のその糸のように細い目には確かに笑いが含まれていた。

「それに連絡には携帯電話を使っていましたし」

その手に持っていたのは小さな電話機だ。

ゆかりは溜息を吐くと大和に背を向ける。

「こんなにたくさんさんの女の子が気にしてくれているようだし、こうなったら自分の艦隊の娘を大切にしておいてあげてね」

そのだらしなさにもはや大和に対する執着をすっかりなくしたのだろう。立木ゆかりは他人事のように言ってきた。

エピローグ

「見ろよ。例の戦艦娘だぜ」

「停学がとけたのかな」

「かしこいっ見ても、可愛くて綺麗な娘だらけだ」

「あれで暴れなければいいのに」

男子生徒の目前、ほぼ三十人もの美少女の一群が校庭を横切っていく。先頭に立つのは華美な印象の娘と活発な雰囲気娘だ。

それを見ていた男子生徒の一人は急に美少女評論家と化す。

「アメリカ・ヨーロッパ艦隊の旗艦娘キャサリンか。少し高慢な感じだが、そこがまたいいんだよな」

男子生徒の一人がうっとりと呟く。

「アジア艦隊の旗艦、飛鳥ちゃん。気が強いけど素直な娘なんだよな」

「ゴルドバはまさにお堅い印象」

「定延は学級は同じだけどお姉さん。もっとも甘やかしてはくれないけど」

それぞれの戦艦娘達の個性に惹かれ、男子生徒達は小さな派閥を作り上げていた。

「だが全員が観賞用なのは確ないからな」

惹かれながらも、恐ろしさは熟知している男子生徒だ。

「おいっ！あれを見ろよ。立木だぜ」

と、男子生徒は一人団の中に見知った顔を見いだす。

「何で戦艦娘達に混じって登校してきているんだ？」

にこやかに笑い合いながら戦艦娘達と会話を交わしているゆかりに、男子生徒は訳がわからなかった。

「大和君も来ているのかな？」

「例によって女の子達の真ん中を歩いているんでしょう」

ゆかりの存在が気にならないわけではないが、女子生徒のお目当ては大和だ。

とにかく見た目は非常にいい。上背があって足が長い。退くところまでは行かないが逞しく筋肉質。

顔は整っているのに、愛嬌もそれなりに。

「あれだけガードが厳しいと近づけないのが残念」

「何でゆかりだけ彼女達の仲間になっているのよ？大和君に一人だ

け近づいている？」

さすがに女生徒の声が大きくなっていく。訳はわからずとも、ゆかりを加えて美少女三十人の護りは堅く、女生徒達のほとんどが大和の顔を見るのが精一杯だ。

姦しくさえずる女生徒の視線が大和を捉えた。

「珍しい。今日は後ろを歩いているんだ。何あれ？」

「……まるで小山？」

女生徒が息を呑む。女生徒の視界に捉えられた大和は巨大な荷物を背負っていた。カラフルな色合いの荷物は明らかに背丈の倍はある。

「あれは鞆だわ」

「そういえば飛鳥さん達、誰も鞆を持っていない」

大和が近づき細部が見えてきた。取っ手が揺れている。ばらけなように白っぽいヒモで括ってあった。

かなりの重さらしく、大和は汗にまみれている。

「しっかりしてね、大和様」

「後少しで校舎だから頑張って」

最後尾を歩いていた若竹や針葉が大和を励ます声が女生徒の耳にも届く。

「何がどうなっているの」

「大和様が荷物運び」

女生徒の呟きに男子生徒も大和を見、同じく疑問符を大量に飛ばした。

「全く飛鳥さんが大和様を甘やかしすぎるから駄目になってしまったのです」

「持ち上げていたのは誰よ。大和様、大和様と付きまとして」

「付きまとしていたのではありません。慕っていたのです」

「やっぱり甘やかして大和を駄目にしたのはキャサリン達じゃない」
キャサリンと飛鳥。両艦隊の旗艦娘は口角に泡を飛ばし、激しく応酬を繰り返す。

「辛いな。統合旗艦なのにみんな言うことを聞かなくなったし。鍛え直して全員の鞆運びはやらされるし。こんなことなら人の姿にならなくてもよかったのに」

汗が目に入って痛い。涙目で大和は前を歩く戦艦娘達を見る。

「やっぱり大和君にこの仕打ちはちよつと」

大和のすがるような視線に、何とか取りなそうと一人だけ鞆を持つたゆかりが声を上げたが、飛鳥達は聞いていない。

「立木さん、あなただって被害者じゃありませんか？まさか、あんなに女の子のことが理解できない方とは？大和様には今後は厳しく当たります。昼にはパンを買ってきてもらいます」

「確かにもっと女の子を大切にするようにさせないと。あたし達だってお昼ご飯を買ってきてもらうわ。外のコンビニに買い物にだつて行かせるんだから」

キャサリンと飛鳥の口論は激しさを増す。いつの間にか大和はパシリに決まった。統合旗艦大和は厳しくなる境遇も知らず、辛い鞆運びに汗を流し続けるのだった。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9681x/>

戦艦娘ラブソディ

2011年11月15日20時19分発行